

秘結社俱樂部  
密社会部

みどりのくま



# 目次

第一章 物語は早春にはじまる .....	3
第二章 社会って何ですか .....	21
第三章 プライバシーは尊重しましょう .....	39
第四章 部長が留守だと何だかね .....	55
第五章 俺の浅はかな試み .....	71
第六章 天上に在る楽園 .....	87
第七章 親子って難しいのです .....	105
第八章 夏って何だか儂いよね .....	121



## 第一章 物語は早春にはじまる



早朝の空というものは、夜の紫色と昼の小麦色が混ざり合った彩りをしている。古来より早起きは得をする部類に入っているから、まあ、気分を高揚させるものを持っていると解釈して間違いはあるまい。

しかしながら思うのだ。今日から四月だというのに吐く息が白くなるほど寒い。春という季節感とは微妙に違うのだ。温暖化が進むと年中温かくなるものと思っていたのに、実際はそうでは無いらしい。ヒトという生き物は物事を自分の都合のいいように考える傾向があるらしくて、現実はそんなに甘くないよと自然が警告しているのか。

ええと、いかんいかん、こんなことをしている場合ではない。

俺は、ささやかな庭を通りぬけて門を出るとすぐの下り坂を急ぎ足で下る。新興住宅地の中段あたりにある我が家から坂を下りきり、最寄駅の梅が丘駅まで徒歩十五分というところなのだ。会社員らしき人影が一人また一人と加わる。皆無心に歩いてゆく。俺も集団にまぎれて流されてゆく。

それにしても肌寒い。コートでも着てくれば良かったかな。だけど日が高くなれば気温も上がるだろうから、今しばらくの我慢ということか。

そんなことを考えながら、ふと後ろを振り返る。ここへ越してきた小さい頃はまだ上のほうは山が残っていたのに、今はもう頂上までびっしりと家が建てこんでいる。色とりどりの瓦屋根が斜光にキラキラ輝いている。さびしさが心をよぎる。あれ、何でさびしいんだろ。

気を取り直して再び歩き出す。家々からの新入りが増えて、駅に着く頃には結構な人波となる。ほとんどが会社員風の人達で、みんな早起きして多分夜遅くまで働いて、ご苦労様なことです。俺みたいな高校生はほんのちらほらで、多分部活の朝練なんだろうな。眠そうな顔で鉄をカチカチさせている改札の駅員に買ったばかりの定期を見せる。ええと、上り線のホームは、跨線橋を渡るのか。

向かい側の下りホームより心なしか人が多いような気がする。もしかしたら座れないのだろうか。もっと早起きしないと駄目なのか。なんだか憂鬱な気分になる。

俺は、人込みが嫌いだ。パーソナルスペースに他人が入り込むことに対する感覚は人それぞれだが、身動きもとれないような場所にたとえ短時間でも閉じ込められるなんて想像しただけで身震いがする。神経質すぎるだろうか。ともかく、そんなわけで早朝の比較的空いているであろう電車で通学することに決めたのだ。

こげ茶色の電車がホームに滑り込んで来る。空いている。扉が開くのももどかしく、駆け込んで席を確保する。緑色でベロア地のシートはふわりと沈み込んで身体を支えてくれる。ヒーターがほんのりと温かい。これから三年間、いや、場合によってはその先も

お世話になるであろう車内の雰囲気を一つ一つ確かめていく。大半は会社員風の男性で、皆黙って折りたたんだ新聞を読んでいる。扉の脇には OL 風の若い女性が立っていて、鏡を覗きこんで身だしなみのチェックに余念がない。

発車のアナウンス、ホイッスル、扉はがたがたと閉まる。ややおいてモーターの歌うような唸りとともに加速していく。踏切を通過して警笛はカンカンがコワンコワンとドップラー効果でひずむ。そんなことが気になるほど皆黙り込んでいる。気持ちが少し落ち着いたら、カバンからペーパーバックを取り出して目を落とす。心地よい温かさに眠気を誘われる。皆黙り込んでいる。次第に意識は活字の中へと沈んでいく。

いくつかの駅を経て車内も次第に込んできたとき、「ちょっと、君」という声に俺は現実には引き戻される。見上げると初老の男がじっと見ているのに気づく。何だろうと思うと、つり革に手がふさがっているからだろうしきりに目配せをしてはあごを右へしゃくる。そちらを見てみると身重の女性が電車の揺れにふらつきながら立っているのが目に入る。ああ、席を譲ってやれということか。俺は立ち上がり、よろしければどうぞと女性に席を指し示す。丁寧に何度も頭を下げたほっとした表情になって彼女は腰を下ろす。まあ、こういうことも自然にできるようになったものだなどと自分をほめてみる。もうすぐ乗り換えだから、乗り過ごさなくてよかったというのも正直なところなのだ。

ターミナル駅で下車し跨線橋を渡ると、白い車体に水色のラインが入った二両編成のディーゼル客車が停まっている。ホームと扉に段差のある仏壇みたいにかめしい旧式のやつだ。乗り込むと乗客はちらほらしかいないのも当然で、この時間この先へ用のあるのは俺みたいな生徒かあるいは学校関係者くらいなのだ。斜め向かいに先ほど席を譲るようにながした初老の男が座っているのに気がつく。どうやら学校関係者らしい。一応あいさつしておいたほうがいいかなと思っていたら、向こうから声をかけてきた。「君、新入生かな。さっきはありがとう。私は新谷といいます。桜野高校で物理を教えています」

やはり先生でした。今日から俺が入る桜野高校は公立校として中の中といったところの普通の学校なのであります。

「おはようございます。川合といいます。今日からお世話になります」

「川合君だね。それにしても朝早いね。入学式は九時からだからだいぶ時間があるよ」

「はい。事前にゆっくり見ておきたいと思ひまして」

ウソです。満員電車が嫌いなだけなのです。

「そうかね。感心感心」

ガラガラと扉が閉まる。ディーゼルのゴオという雄叫びをあげ、ガタピシいいながらゆっくりと発車する。建てこんだ家の軒先をかすめるようにゆっくりと左右に揺れながら進んでいく。路面電車に近い感覚なのだ。住んでいる人達は朝からさぞうるさいことだろう。三つほど無人駅を経て、高校前というなんのひねりもない駅に着く。改札を出て道を渡れば校門というロケーションだから、まあ、しょうがないか。校門を入ったところで先生と別れ、とりあえずまだ受付までだいぶ時間があるから本当に一通り見てまわることにする。まずは校庭の方へ行ってみることにした。



見事な桜の木があり、八分咲きといったところでかろうじて入学シーズンらしさを演出してくれている。寒さのせいで今年は少し開花が遅れているということだったが、まあ、こんなもんでしょう。奥の方には倉庫やら運動部の部室やらがある。その先はフェンスで囲われていてプールがあるようだ。朝練の部員がめいめいストレッチやら道具の準備やらしている。お邪魔してはいけないので、校舎の方へまわってみる。

三階建てが二つ、四階建てが一つ川の字に並んでいて渡り廊下でつながれている。校舎の間は中庭になっていて花壇には色とりどりの花が咲いている。きれいに手入れされている。その中に誰かうずくまっている。黄緑色の作業服を着ているところを見ると、業者の方だろうか。視線を察したらしくやおら立ち上がりこちらを振り向く。小太りのおじさんといった感じだ。

「やあ、おはよう。新入生かい」よく通る声である。

すこし思案顔になって「まだ受付まで時間があるなあ。よかったらすこし手伝ってくれないかな」と提案される。まあ、断る理由もないでしょう。

「そこにあるジョウロでそっち側の花壇に水をやってくれないかな。水道はね、ほら、そこにあるから」

水をやりながら雑談する。

「おひとりで毎日手入れされているのですか」

「いやいや。いつもは生徒が手伝ってくれているよ」

「失礼ですが」

「わたし？ 施設整備員だよ。ああ、ありがとう、そのくらいでいいよ」

道具を片付ける。さて、どうするかなこのあと。

「まだ時間あるだろ。よかったらお茶でもごちそうするよ」

校舎の裏手に連れられていく。古ぼけた二階建てがある。レンガ造りでよく見るとしっかりした建物だ。

「こちらは」

「これは旧館だよ。昔、職業学校だったころの実習室があった建物さ。今は一階を物置にしている。さあ、入って入って」

導かれるまま重厚な扉を開いて中へ入る。吹き抜けのホールになっていて中央に二階へ上がる石造りのどっしりした階段が鎮座している。こりゃ大理石かな。

階段の脇に扉があり、入るとたたきに台所とテーブルがありその奥に畳の部屋が見える。宿直室といった感じだ。

「さあ、そこに座って。今お茶入れるから」

すすめられるまま熱い番茶をいただく。一息つく。

「立派な建物ですね。今はもう使っていないんですか」

「一階は物置だね。二階はいくらか使ってるけどね」

そんな調子でしばらく雑談をする。日比野さんはかれこれ十年ほどここの管理をしていること、前職は建設会社で働いていて大きなビルや橋をいくつも作ったことなどをうかがった。

すっかり話しこんでしまったようで時計の針はもうすぐ九時だ。お礼を言い席を立つ。

「いつでもいらっしやい」別れ際そう声をかけていただいた。

校舎のほうへ戻るとすでに受付は始まっている。がやがやした群れに加わって入校手続きを済ませる。資料によるとすでにクラス分けされており、四組六番というのが俺に与えられた符号ということになるらしい。見取り図を参照して体育館に設営された式場に居場所を見つける。皆それなりに緊張した面持ちで所在なげにキョロキョロしている。そのまま観察を続けてみる。

体育館は比較的新しく小奇麗なのだが、天井の梁にはお約束のバレーボールが一つ引っかかっている。いたずらか事故かはともかくそんな光景を見上げてニヤニヤしてみる。ほどなく両隣も埋まり、そろそろ始めてもらいたいものだと思ったところで、威勢のいい声が飛んでくる。

「さっさと自分の席につく。いつまでだらだらやってるんだ」

どこにでもこういう役回りの教師がいるものだ。席に着かずに後ろにかたまって話していた連中がぞろぞろ席に着きはじめる。ほどなく話し声もひかえめになり、マイクの前に出た進行役の教師がこれからの式進行について説明を始める。左奥の来賓席、右奥に教職員席が並んでいる。校長とおぼしきモーニングを着た男性が正装した男女数名を引きつけて来賓席に案内している。すでに会場は静まりかえっている。

入校式が開始され、お決まりの点呼やら訓示やらが続いてゆく。次第にここで三年間過ごすことになるのかと実感がわいてくる。なにか腹のあたりをぎゅっとつかまれるような不快感が襲ってくるのだ。始まりというものはいつもこんなふうにするせない気分になるものだ。やがて単調な日常になってゆくことは解っている。そうやって一つ一つクリアしてゆくことを、そつなくこなしてゆくことを当然のこととして受け入れるようしつけられてきたということだ。

式が終わると各クラスに分かれて教室へ移動するよう指示される。資料を確認するとなるほど三階建てが一般教室棟で一年は一階に玄関から一組二組と教室が並んでいるようだ。二年は二階、三年は三階か。こんなところにも社会のヒエラルキを反映させるとはね。まったくくだらないのだ。

まだ互いに深く知らない、それだから無秩序な群れになかば押し流されるように教室へと足を踏み入れる。およそ美的感覚からは遠い存在として効率と保守性から出来あがったような直線を基調とした景観というものは、同時に圧迫感を与えることで生徒を無言のうちに従え馴らすことを計算された空間とも言える。

机に張られた番号と名前を確認して着席する。まだ落ち着かない。まわりも一様にゆるく緊張しているのが空気として伝わってくる。とても居心地が悪い。そんな空気を察したかのように、ガラリと扉が開いて女性が入ってくる。

身長は、そうだな、百五十そこそこといったところのチビっ子で、おまけに髪を高い位置でツインテールにしてふわふわのシフォンのワンピースは目の醒めるような緋色なの

だ。細くて変化にとぼしい脚に黒のニーハイソックスで、軽やかに遊ぶスカートとの間に形成される領域にわずかな色香がただよっている。子供なのか大人なのか判別困難な彼女は教壇に上がるとコロコロと鈴の鳴るような声で話し始める。

「はあい皆さん、ごきげんよう。わたしがこのクラスを担当します林原ミレイです。とりあえず一年間よろしくね」

これはまたキャラの濃い先生だこと。

後ろの方の席に座っているちょっとやんちゃな男子生徒が口笛を吹くと、教室の雰囲気は少し荒れたような感じになる。少し不安になる。

「ミレイちゃんはカレシとかいるんですかぁ？」などと野次を飛ばす始末なのだ。

するといきなり、ばんっと教卓を叩き、

「おふざけはよしましょうね、ボク。ちゃんとミレイ先生と言いましょね」

言葉は丁寧なのだが、有無を言わせぬ威圧感が空気を切り裂き、おふざけをした奴を打ちのめした。教室は静まり返る。

おや、見かけによらず本当はベテラン教師だったりして。それならそれでイタイ気もするが。

「そうね、ご質問にはお答えしておくのが礼儀というものかしらね。カレシはいないけどまだ独身です。まあ、モテすぎて選べないってとこかしらね」にっこり笑う。

うわすげえ自信家なんだ。うぬぼれやさんとも言うけど。

あらためて観察してみる。目鼻立ちは作り物みたいに整っている。灰色の瞳は水晶体の反射によっては虹色に変化する。感情がそこだけ欠落しているような印象を与える。

「教科は、英語を担当します。ともかくみんな、よろしくね」

その後出席順に自己紹介をやらされたり、今後の予定を聞かされたりして午前中で放課となった。クラスの雰囲気は、まあ、まだみんなネコかぶってるんだろうから判断保留といったところか。

そのあと教科書とか体育着など販売している教室や中庭をめぐって買い揃え、個人ロッカーに置いておくものを除いても結構な荷物になってしまう。これを持って満員電車は勘弁だから、少し時間をずらして帰ることにしよう。

そこで、今週中に決めることになっているクラブ活動の下見も兼ねて校内をぶらぶらと見て歩くことにする。一通り把握しておかないと気持ち悪い性質なのだ。

まず、特殊教室のある四階建ての中を見て歩く。化学室を覗くと中はしんとしんと、何やら薬品の匂いがしてくる。秘密めいた雰囲気がただよっている。

物理室では天文部が天体運行の計算をああだこうだ言いながらやっている。

「君、新入生だろ。うちに入らないか」とチラシを渡される。検討しますとその場は切り抜ける。

音楽室からは吹奏楽の軽やかな調べ。情報教室からはゲームの電子音。

階段教室では演台を舞台に見立てて演劇部と舞踏部が実演をしている。しばらく見ているとコスプレの団が現れて「アニメ同好会へどうぞ」と勧誘される。

視聴覚室ではプロジェクターで映し出された映像をあれこれ議論している。メディア研

研究会というらしい。

別の教室では軽音楽部がきゃいきゃいと言いながら盛り上がっている。

畳敷きの部屋では茶道部と百人一首同好会がお茶している。

あと、美術部や陶芸研究会とか考古学同好会など、いろいろ見て歩くがいまひとつ心に響いてこない。そうはいつても、運動部に入るほどの気合いがない俺は、まあしばらく考えてみるかな、他にも何か面白そうなのがあるかも知れないしなどと考えながら屋上に出る。

そこには数名の男女が空を見上げてぶつぶつ言っている。はて、星でも見てるのかなと思うがまだ昼間だし一体なんだろうと思っていると肩を叩かれ振りかえると、「超常現象研究会だけど、何か？」と真顔の男子生徒。

しばし言葉が見つからないで固まっていると、「ああ、入部希望か？ それなら一緒にアンノウンなフライングソーサを捜してみるかい？」と引き込まれそうになる。

焦った俺の視界に今朝の旧館が入った。「すみません、あそこへ行くので私はこれで」とその場をあとにする。

旧館の前に来たところで、二階はまだ見てなかったからちょっと覗くかという気で、まず日比野さんに声を掛けてからと訪ねると巡回中の札がかかかっていて留守だ。

まあ、ちょっと見るだけなんだからいいか。

薄暗い階段を上ると、廊下に沿って三つと奥に一つ部屋があるようだ。手前から探索していくとしようか。

そこは何やらよくわからない機械がいくつも設置され電気コードの束が乱雑に置いてある。

しばらく使われていないようだ。

次の部屋はきれいに整頓されていて、ずらりとマシンが据えられている。壁には作品が飾られていて手芸クラブと書いてある。今日はお休みなのか誰もいない。

また次の部屋を覗いてみると、そこは普通の教室のようで長机が床に固定されている。天井からコンセントがいくつもぶらさがっているところをみると、電気工作室のようだ。奥の方まで見てみると懐かしいワンボードコンピュータや旧式のパソコンがいくつか置いてある。

最後に突き当たりの教室に近づいたとき、「あんた、誰」と後ろから声を掛けられ、俺は心臓が飛び出るほどびっくりした。たぶん数センチ飛び上がったことだろう。

恐る恐る振りかえる。仁王立ちになったシルエットが見えた。

ちょうど逆光になって表情は読み取れないのだが、背の高い女であることはわかる。まあ、声の時点で若い女性だとわかっていたのだが。

じっと目をこらしていると「なによ人の顔じろじろ見るなんて失礼ね」と不機嫌そうな声が返ってくる。

「すみません、そんなつもりじゃ…」と言うのかぶせるように、

「あんた、もしかしてウチの部に入りたくてわざわざ訪ねてきたかわいい新入生なんじゃ

ないの？」と少し機嫌の直ったような声で言うのだ。

「そんなとこ突っ立ってないで、さあさあ入りなさい」背中をぐいぐい押される。なんちゅう強引な。それに馬鹿力だし。部屋の中に押し込まれる。

部屋の中を見廻す。カウンターとテーブルがある、バーかもしくは喫茶店といった風情の造りなのだ。天井からはいくつかランプが下がりオレンジ色のきれいなランプシェードが印象的だ。カウンターの背後にはグラスや食器が並べられている。奥にはキッチンまである。

ここは何のための部屋なのか。ウチの部と言うからには部室ということなのだろう。直接聞くのが早いというものだ。

「あの、ここは何部ですか」

「ようこそ、即席麺愛好会へ」うれしそうに言うのだ。

「えっと、インスタントラーメンの食べ比べとかですか？」

「ああそうか。今年から軽食研究会だったわ」答えになっていない。

「ともかく、あんたは栄えある新入部員第一号ってわけよ」と続けた。

「あのう、入るなんてまだ一言も…」

「これに名前と学年クラスとそれから入部動機を書いてね」用紙を渡される。

「もうすぐ部長も来るから、説明はそのときね」もう勝手に決めている。

呆気にとられ見つめる俺の視線に、

「ああ、あたしは副部長のサヤカ。岩橋サヤカ。よろしくね」

どうやら人の話というものを聞くという考えが無いらしい。会話が成立していない。

しかしそんなことにはおかまいなく喋り続ける。

「あと二三人は欲しいとこね。そうだ、いまから勧誘に出かけるわよ。あんたも一緒に来なさい。書くのは後でいいから」

がっしりと腕をつかまれて、とてつもない力で引きずられてゆく。いったいどうなっちゃうんだよ、おい。

さんざんあちこち引き回されたあげく収穫はゼロで、結局また旧館へ戻ってくるはめになってしまった。その間観察させてもらった感じでは、どこへ行ってもまるで蜘蛛の子を散らすように人がいなくなるのだ。

背がひとときわ高くてスレンダーで、肩より少し長い髪は洗いざらしの無造作な感じなのにそれが似合うと思わせる整った顔立ちで、まあ、少々エラの張っているとこと鼻がわずかに上向きなとこに目をつぶれば美形の部類と言って差し支えない。長い手足も華奢というよりしなやかという表現がぴったりくるのだ。

そんなとても目立つタイプのモデル系美少女が本来持つ人を惹きつけるたたずまいが、なぜか人を遠ざけるのだ。その理由を俺なりに分析してみると、相手のふとこに遠慮なく入っていく行動と心の中まで見透かすようなすどい瞳がもつ威圧感が半端でないからだろう。瞬間的にまず相手に怖いと思わせる雰囲気を持っているということ。

そしてそれを、多分ではあるのだが、本人は全く自覚していないところがあるのだ。そんな俺の苦手なぐいぐい来る無神経さというものにまきこまれて、それにもかかわらず

俺はこの人のこれまで孤独感を持って生きてきたであろう日々に、余計なお世話と言われるだろうが、同情をしまっているのだ。

短い時間ではあるが、ゆく先々でこの時間までうろうろしている貴重な新入生にことごとく逃げられて途方にくれる姿を間近にして、俺はこの人に付き合ってもいいかなという気になっていた。いったい何様のつもりよと言われるのだろうが。

そんなことを考えながら彼女の横顔をじっと見つめていると、その視線に気づいたのかふっと口元をゆがめる。

「まあ、今日はこのくらいにしといてあげるってことよ」と自分に言い聞かせるように呟く。

「さあ、もう部長も来てるだろうから部室に戻りましょ」とうながされて俺は旧館の重厚な扉を開く。

部室からは暖色系の灯かりが漏れていて、おまけにいい匂いまでただよってくる。

「ああ、やっぱりもう来てるわ」と入っていくのに付いていくと、カウンターに一人何やら作業している男がいる。前髪がすこし掛かっている奥の顔は線が細くすこし病的な鋭さを持っている。こちらに気づいてにっこりと笑う。

「いらっしやい。いまコーヒーを煎れているからちょっと待っててね」と意外にさわやかで優しい雰囲気をかもしだす。

「部長の細川です。よろしく」

「川合です。はじめまして。よろしくお願ひします」

俺はとりあえず席に着いて入部届を書き始める。何かよくわからないけれど、とりあえず悪い人達ではなさそうだし。そしてなにより、興味というものが湧いてきたのだ。

そんな俺を彼女、いや、サヤカ先輩はすこし意外そうな顔をしながらじっと見つめている。

「これでいいでしょうか、先輩」と入部届を見せる。

「ふうん、川合ミノルか。あれ、ミノルって…」すこし思案顔になる。

サヤカ先輩が何か言いかけたところで、

「さあ出来たよ。ミルクと砂糖はそこにあるからお好みでね」

きれいなティーカップを三つ載せて彼、いや、部長がカウンターを廻ってテーブルに着く。

コーヒーをいただきながら話は始まる。

「ええとすいません、部長さん」

「部長でいいよ」

「部長。この軽食研究会というのは、その、軽食を研究する会ということなんですか」なに言ってんだか、俺。

「まあそういうことだね。こうやって集まってみんなでおいしいものを作って食べながら、わいわい話しをするということさ」

サヤカ先輩が話を引き継ぐ。

「いままで即席麺同好会ということでやってたんだけど、今年から何でもありにしようと

ということでリニューアルオープンすることになったわけ」  
なるほど、ゆるーい感じなのかな。  
「それで、ミノル、あんたが入って三人になったわけだけど、これじゃさびしいからね。明日から新入部員獲得強化週間ということで働いてもらうから。いい？」  
「まあまあサヤカ君、いきなりそんなプレッシャかけなくても」  
「いいえ部長、ここで勝負かけないと。生徒会からもにらまれてるし」  
「あいかわらず言いにくいことをはっきりと言うねえ」  
「頭数そろえないと、予算切られちゃいますよ」  
まるで夫婦漫才だなこれは。話に割り込んでみよう。  
「あの、既存のヒラ部員はいないのですか。お二人でやられてたんですか」  
「いやあ実はね、もろもろの理由で他の部員は辞めちゃってね」と部長。  
「はっきり言えば方向性の相違で分裂したところね」と先輩。  
なんの方向性だ？ ラーメン派とパスタ派とうどん派との対立とかそういう話なのか？  
「分裂とはおだやかな表現じゃないね。部活は自由意思なんだから新しく集まって新しい部を立ち上げるのは自由だからね。僕もそうしてこの部を立ち上げたんだから」  
「部長がこの部を作ったんですか」  
「そうそう。おとし立ち上げてそのときは五人かな。みんな同級生でね。去年サヤカ君とあと二人入って、で、総勢八人だったんだけどね。そのうち六人が今年から新しい部を立ち上げてね、それで二人残ったというわけ」  
「その新しい部はどんなことしてるんですか。定食部とかディナー研究会とかですか」  
俺がそう言うと、二人は顔を見合わせてくすくす笑い出した。  
「ごめんごめん、まだ大事なことを話してなかったね」と部長。  
「実はね、この部にはもうひとつ活動目的があってね。公然の秘密ってやつだけど、一応ね、秘密結社社会倶楽部というのがもうひとつの顔さ」  
先輩が続ける。  
「おいしいものをお腹いっぱい食べて、わいわい話す訳だけど、その話っていうのはあたしたち高校生という子供でもない大人でもない中途半端な立場にあるものが、社会というものと近い将来いやおうなく対峙しなければならない現実を踏まえ、ただ直感的に社会というものをつかむ試みをしようという話なのよ」  
長広舌に翻弄される俺。  
そんな様子を心配するように部長が続ける。  
「難しく考えることはないよ。なにしろ直感でつかむんだから。僕達がいま置かれている立場というものは親による庇護下の子供と社会人として自己責任を問われる大人との間にできたエアポケットのようなもので、社会からある一定の猶予を与えられたモラトリアムを生きているんだ。だから気楽にぼんやり生きてもいいし好きなことに熱中して過ごしてもいい。そんないろんなやり方の中で、この期間を社会への準備期間ととらえて無責任に気楽に社会というものをつかんでみようというのがウチの部の趣旨なのさ」  
なんか急に不安になってきた。  
それを察した先輩が、  
「へーきへーき、大丈夫大丈夫」と俺の背中をばんばん叩く。

思わずむせてげほげほいう俺。

そんな様子を微笑しながら見ている部長が、

「コーヒー、もう一杯飲む？」

もしかしてこれほとんどもないことになったのかも知れない。

あれからというもの、毎日放課後にはまだどこにも入ってなさそうな奴をつかまえては「毎日タダ飯食えるよ」とか「ゆるーいから試しに入ってみない」とか「帰宅部もいいけどそれじゃもったい無いじゃない」とか本質からなるべく離れたところで引きずり込もうと画策するも、だいたい三日も過ぎたころにはもはや頑なに集団行動を嫌う奴が放課後はバイトや遊びに忙しい奴がほとんどで、正直俺は焦っていた。新入りが俺一人だと気詰まりだし、やっぱり仲間は多い方が楽しいに決まっているのだ。俺は人嫌いではなく人込みが嫌いなだけなのだ。

なにしろもう時間の余裕はない。そこでクラスの中でまだどこに入るか決めかねている奴をリサーチしたところ、男はだいたい固まっていることが判明した。これは女子を攻めるしかあるまいと蛮勇を奮い、一人気になる子がいたので試しに「見学だけでもいいから」と昨日作ったばかりのチラシを渡してお願いしてみた。ショートカットで小柄で幼顔で舌足らずの話し方がかわいい感じの子。しばらく迷っているふうだったけど「友達さそっていいですか」とのことで、それはもう大歓迎ということで、放課後來てくれることになった。一步前進だ。すこしほっとする。うまくいくことを願うばかりだ。

放課後部室へ行くと、部長と先輩は優雅なティータイム中でハーブティーを飲んでいる。勧誘はもう俺にまかせっきりにするつもりらしい。やれやれ。

「いま煎れるからちょっと待ってね」と部長はあいかわらず物腰がおだやかだ。

「ミノル、いい知らせみたいね。顔にそう書いてあるわよ」先輩はあいかわらず単刀直入だ。

この雰囲気にもだいぶ慣れてきたのだ。

「とりあえず見学の予定を確保しました、先輩」

「うむ、苦しゅうない。もっと近う寄れ」

先輩は手をひらひらさせながら席に着くよううながす。

部長に煎れてもらったハーブティーをすすりながら雑談になる。

「そろそろ桜も見頃だねえ」と部長。

「ミノルは花粉症とか平気なの」と先輩。

かみ合っていないようでそれなりに成立している会話を楽しみながら、まったりとして時間を過ごす。

「ごめんください」かわいらしい声がする。

ショートカットで小柄で...ええと、そうそう、モエちゃんと、それからもう一人その後ろに隠れるようにまるで小動物のようなおどおどした仕草でこちらをうかがう美少女。

先輩は来訪者と俺の顔を交互に見てから、にやっと八重歯を見せて、

「あんたやるじゃない」と一言。

何か誤解してるみたいだけど、まあいいか。

「いらっしやい、いまお茶煎れるからね」と部長はすっと立ち上がり二人を席へエスコー



トする。

おれも精一杯の笑顔を作って、

「まあまあ、ゆっくりしてってよ」と愛嬌を振りまく。

なにしろこのチャンスを逃すわけにはいかないのだ。

先輩はカウンターの下からなにやらごそごそ出してくる。

「さあさあ食べて食べて」

見れば、かご一杯にいろいろなお菓子が入っている。おいおい、何か俺のときと対応違うんじゃないかい。

最初もじもじしていた二人だったが、ショートカットのモエちゃんのほうはすぐになじんで「おいしい。これ何味ですか」「お目が高いわね。これは新作のこんがりチーズ味よ」と先輩と話が弾んでいる。

部長はにこにこしながら見守っている。

もう一人の方、手入れの行き届いた漆黒のストレイトロングヘアでまるでリスのように少しづつかわいらしい仕草でお菓子を食べながらじっと話を聞いている子をしばし観察してみる。

たぶんとてもおとなしい性格でモエちゃんに無理やり引っ張られてきたと見た。まだ幼さが残り線が甘いけれど端正な顔立ちで、ぎゅっと抱きしめれば壊れてしまいそうなほど華奢だ。もちろん俺にそんな勇気無いけどね。

俺はともかく話しかけてみる。

「今日はどうもありがとう。あっ、お茶がもう無いね。いま煎れるよ」

彼女は無言でこくりとうなずいた。

注ぎながら話を続ける。

「ええと、モエちゃんのお友達？ クラスは違うよね」

「はい。小中と同じなんです」

「俺は川合ミノル。君は？」

「石井メグミです」はにかんで俯きながら小声でささやく。

「どう？ ウチに入らない？ こんな感じだけど」間もない俺が言うのも変だけど。

メグミちゃんはモエちゃんのほうをチラリと見る。

すると、先輩と盛り上がっていたモエちゃんは、そうそうという感じで話しだした。

「まず詳しいことを聞かせてください」

すかさず先輩は、

「だよねー。あんたまだ説明してなかったの、ミノル」と俺をにらむ。

俺だって裏テーマのことは詳しく知らないんだからね。

ごほん、と部長は一つ咳払いをしてから皆をぐるりと見渡してから話はじめる。

「じゃあ最初から順を追って説明するね。まずウチの部、軽食研究会は主に手軽でおいしいものを探求することを目的として日々楽しく活動しようというものです」

皆、静かに聞き入る。

「以前は即席麺をメインに研究というか愛好していたんだけど、そういう枠を設けなくて広く簡単でうまいものを食べようではないかということにしたんだよ」

先輩はにやにやしながら聞いている。

「具体的にはこうやって放課後に集まって作って食べて評価をわいわい話すというとき」

モエちゃん、ちゃんはどういうか、モエはすかさず質問をする。

「作る内容によっては事前準備とか仕込みとか、そういうことも必要なことはあるんですか。放課後だけで出来るんですか」

先輩が答える。

「まあ、手軽ということが前提なんだから基本インスタントということね。でもそれじゃ味気ないときは…」俺のほうを見る。なんかいやな予感。

「ミノルが朝早く来て仕込みをしてくれます」

おいおい、聞いてないよ。

先輩は俺の目を見て、

「あとでここのカギ渡しとくからよろしくね」と有無を言わせない。

モエは質問を続ける。

「この部室はまるでレストランみたいに立派ですけど、こんなにいい場所を独占して使ってるんですか」

「ここはね」と部長が答える。

「この高校の前身だった職業高校の食品サービス科の授業で接客対応の実習室だったのさ。物置同然だったのを許可もらってかなり手を入れて部室にしたわけ」

なるほど、それでこれだけ手の込んだ設備があるのか。

「ここは旧館と呼ばれてるけど、こことあとは手芸クラブ、今は開店休業状態だけど、その二つの部室以外は物置だから、静かに活動するにはうってつけというわけさ」

俺は、そろそろ本題の話になるなど感じていた。二人に逃げられないことを祈りつつ見守るほかなかった。

「他に質問が無いようなら、説明の続きに戻るよ」

少し間を置いてから、部長は話を続ける。

「それで、がやがやと品評をしながらお腹が満たされたところで」再び間を置く。

「ウチの部が持つもう一つのテーマである、社会について好き勝手なことを言い合いながらその真実をつかむという活動をします」

モエもメグミも黙って聞いている。

「社会と言うととても漠然としているけど、要は僕達を取り巻く空気みたいなものなんだ」

俺もじっと聞き入る。

「人間というものは、もうだいぶ発達してあまり意識することはないけど、社会というもの無しでは生きられない生物なんだ。その社会というものが何物でどう働きかけたりどう影響を受けたりしているのかということを知らずに、というか興味を持たずに生きていくということは、考えてみればすごくいいかげんなことと言える、と思う」

長広舌はさらに続く。

「ただ、一般にこういうことを考え始めると、えてして政治とか経済とか福祉とかとても狭い領域に入って個別的なことに終始することになりやすい。もちろん最終的には自

分が個人として何ができるかということになれば、そういった限定されたところで動くほかないんだけど、まずは全体を大掴みでとらえるということがいいと思うんだ。まずは直感を頼りにね。それ無しには各論に入っても最終的には自分の位置というものを見失って混乱する危険があると思うんだよね」

俺は気づいた。部長は普段優しくてのんびりしているけれど、本当の姿はいつか見た病的な鋭さを持った暗い影を感じさせるものなのだ。なぜこんな手の込んだ方法を使って裏テーマとしてこの社会倶楽部というものを主宰するのかということが、普段決して見せない影の後ろ側にあるのだらうと想像するのだ。いま直接そんなこと聞いても多分答えてはくれないだろう。活動を通じて知るほかない。それこそが俺をここになんとなく居つけさせるものなのだ。

そう考えると、自分ではまるで気づかなかった、そういうことに興味を持つ性質に驚くのだ。

そして、なんだか楽しくなってきたのだ。中ぶらりんの子供と大人の間にいるこの時間にしか多分感じるこのできないものにわくわくさせられるのだ。

そんなことを考えていたら、モエの声に現実に戻される。

「何かおもしろそう。わたしお世話になります」晴れやかに笑う。

「わたしね、実を言うと、何となく高校に進学して多分短大か専門学校に行ってどこかに就職してそのうち結婚してという、そんなずっと先まで決まっているような生き方しかできないのかなとうんざりしていたの。でも、話を聞いていてそんなありきたりの生き方と違うものを高校生活で何か見つけられそうな気がしてきたの。そういうわけですので、どうぞよろしくをお願いします」とペこりとお辞儀をする。

俺はメグミのほうを見る。どうするのかな。

すると、意外にさっぱりした顔で瞳をきらきらさせながら、でも小さな声で、「私もご一緒させてください。よろしく願いいたします」俺に向かってゆっくりとお辞儀をする。濡れたように艶のある髪がさらさらと流れる。

俺は胸をなでおろす。よかったよかった。

「ところで」と俺は先輩に訊ねてみる。「あと何人くらい勧誘すればいいですか。そろそろ厳しいとは思いますが」

「そうね、うん、これで完成よ。いいんじゃない？」手をひらひらさせる。「ご苦労」部長もにこにこしながら頷いている。

先輩はやおら立ち上がり、びゅっと指を天に突き上げて雄叫びをあげる。

「さあ、軽食研究会カッコ秘密結社社会倶楽部カッコ閉じ、新たなる出発よ！」

やれやれ、ようやく物語りは動き出しますか。

「それから」先輩は俺のほうを向きなおり新たなる指令を発するのだ。

「顧問と生徒会に出す書類、ミノル作っというてね。書式はこれだから」

分厚いファイルを渡される。すっかり俺は先輩のしもべなのだ。

考えを察したように俺の背中をばんばん叩きながら言うのだ。

「あんたには期待してんだから、しっかりやんなさい、ミノル」

ああ、こうやって馴らされてゆくのだろうか。しゅん。

顧問は新谷先生だということで、朝電車でご一緒したときはあいさつを欠かさなかったのが今更ながら良かったと思う。好印象を持たれているようなのだ。

職員室に入るときは、入り口を開けてから「一年四組川合ミノル、入ります」と申告してから入るシステムになっている。まっすぐ先生の席へ向かう。

「失礼します。部活報告書の提出に参りました」

「おお、ごくろうさん。これも何かの縁かねえ。よろしく頼むよ、川合君」

ひとつ質問してみる。

「先生は顧問でいらっしゃるんですけども、部室へはみえられることはあるのでしょうか」

なんか日本語おかしくなりそうだ、俺。

「まあそうだなあ、自主性にまかせているからなあ、あんまり顔出さないほうがいいと思ってね。もちろん何か困ったことがあればいつでも相談してくれよ」

はあ、そうですか。

「まあ、部長も副部長もしっかりしているし、君もしっかりしているし、あとは、ええと、女子が二人だね、まあ自分達で考えて自分達で行動するということがとても大事なことからね」と言ってぼんと肩を叩かれる。

「まあ、仲良くしっかりやんなさい、うん」

俺はあいさつをして退室する。

あとは生徒会か。ええと、特殊教室棟の三階にあるんだよな、生徒会室は。

誰もいなかったら明日になるなあとぼんやり考えながら階段を上る。

入り口にはけっこう立派な看板がかかっている。あれ、もうひとつ政治経済研究会というのかかかっている。これは生徒会と部室が同居しているのかな。

とりあえずノックしてみる。反応はない。しかたなく扉を開いて中へ入ってみる。

「失礼します。部活届を提出に来ました」

中には長机がコの字に並べられて、奥のホワイトボードにはなにやら難しそうな文句がいっぱい書かれている。

隣に別室があるらしく、扉ががちゃりと開いて目付きの鋭いポニーテールの女性が顔をのぞかせる。

「ご苦労さん。こっちへ来て」

書類を持参して小部屋へ入る。そこはもともと準備室かなにかだったようで、五六人が座れる応接セットと天井まである本棚、それに小さな机にデスクトップパソコンが一台載っている。

ソファには三人、男子生徒二人と先ほどの女子、いままで何か会議でもしていたのかテーブルには資料がたくさん置いてある。

「君、何部の人？ 初めてみる顔だね」とメガネでちょっと老け顔の男が尋ねる。

「はじめまして。私、軽食研究会の新人部員です。川合といいます」

三人の表情がさっと変わる。

「君、あそこ入ったの？ いまからでも遅くない、止めたほうがいい」

一体どういうことだ。何でそんなこと言うんだろう。

「ああ、ごめんごめん、びっくりさせちゃったね」もう一人の男、長身でけっこうイケメ

ンのほうが他の二人を制するように話しはじめる。

「僕は生徒会副会長の佐伯です。こっちは書記の城山君」女生徒が頷く。目が怖い。

「それからこっちは渡辺君」さきほどの男はまだ何か言いたそうな顔をしている。

「まさか新入部員が入るとはね。細川と岩橋と君と三人かい？」

なんか上からものを言う感じ。嫌な印象なのだ。

「いえ、全部で五人です。こちらが部活届です」書類を手渡す。

「なるほどね。よく集まったなあ。ところで君何か聞いている？」

「いえ。特にはなにも」

「そうだろうなあ、あいつらしいや」

一体どういうことなのか。

渡辺が話しはじめる。

「俺達はあいつらといっしょに社会クラブをやっていたのさ。あいつらはいつまでもふわふわしてやがって、いっこうに実力行動に出ようとしな。政治ってのは結果なんだ。それなのにいつまでも抽象論ばかりで…」

城山が割って入る。

「そうよ。私達は政治というものを経済というものを具体的に把握することを追求するのよ」

何だか二人とも肩に力が入っている。

そして俺は思い出した。そういえば分裂がどうか言ってたな。

「おいおい、君達そんなに感情的になってどうするんだい」佐伯が制する。

「ともかく、そういう経緯でね。しかしまあ、我々は生徒会執行部として私情をはさむようなことはしないから安心していいよ。確かに届は受理しました。今後ともよろしくね」手を差し出される。

「こちらこそよろしく申し上げます」握手してお礼を言い生徒会室を後にする。

しかし、これからもいろいろありそうな予感がするなあ。部室へ戻る道中いろいろ考えてしまう。でもまあ、始まったばかりだし、考えてもしょうがないか。

外へ出ると辺りはすっかり暗くなっている。続きは明日にしよう。

そういえば、宿題出たなあ。ああ、思い出したくない。しょうがないなあ。

俺って独り言多くなったかもなあ、など独り言を言ってみた。



## 第二章 社会って何ですか





一日は部室での仕込みから始まる。

その日の部活で味わうものに合わせて野菜を切っておいたり出汁を取ったりソースをレシピ見ながら作ってみたりと、インスタントの手早さを犠牲にすることなくインスタントには無い深みを与えるにはどうすればいいか研究するのが役目なのだ。

実際は、ひと手間かけるくらいがせいぜいだけど。

それから、ぬか床の手入れも任されている。なすときゅうりと白菜を漬けてある。先輩から教わったとき「ちょっとだけならつまんでもいいから」と許可を得てある。そしてそれが意外な効能を発揮したのだ。

俺の家は平均的サラリーマン家庭でご多分にもれず共働きである。かあちゃん、母親のことをこう呼ぶのは少々気恥ずかしいが、俺の早起きに付き合わせて朝に弁当を作ってもらうのも内心悪いと思っていたので「弁当作らなくていいから」と宣言してしまったのだ。俺は気をつかったつもりなのだが、かあちゃんの少し寂しそうな顔が何だかチクリとした。

ともかく昼は売店で何か買うつもりだったのだが、その競争たるや凄まじく、人込みを見ただけで寒気をする俺はしまったと後悔したのだ。

しかし、ご想像のとおり、朝に保温ジャーへ白飯だけ詰めてくれば仕込みついでに簡単なおかずなら作れるしつけものはつまめるしで我が食糧問題は解決を見たのだ。大袈裟か。ともかくそういうわけで、早起きして空いてる電車に乗る合理的説明もつくから、変人扱いされずに済むし万事うまくいくのだ。

手早く仕込みを終わり、おやつがわりにきゅうりをぽりぽりやりながらまったりしているとちょうどいい時間になってくれる。そして教室へ急ぐ。

廊下でモエと一緒にいる。

「おはよ」毎日ぎりぎりのご出勤ならぬご登校ですか。

早く来て手伝うとかそういう気はいまのところ無いらしい。

教室へ飛び込む。ぎりぎりでセーフだ。

しばらくして担任のミレイ先生が何やら大きな荷物を持って入ってくる。なんだろう。

「はい、みなさんおはようございます」あいかわらずしゃべる声はかわいい。

「えーと、連絡事項があります。よく聞いてね。いまから書類を二通配ります。じゃこれ後ろへ回してね」

手元に書類が届く。

「まず一つ目。緑色の複写式のほうは授業料の振込依頼書ね。それから二つ目。これはみなさんのご家庭の状況を教えていただく調査票です。親御さんに書いてもらって、今週中に提出してください」

ざっと目を通す。両親の勤務先や家族構成などは言うに及ばずその他こと細かく記入する欄がびっしりなのだ。正直ここまで詳しい情報を何に使うのか疑問になる。思わず立ちあがって質問してしまう。

「こういうのは、個人情報とかいってむやみに公にするものではないと思うのですが、必要性というものを説明していただけないのでしょうか」

教室中の視線が集中する。めんどくさいこと言うなよという空気がじめじめと感じられる。無駄に目立ってしまった。後悔する。

ミレイ先生は意外と優しい顔で答える。

「いい質問ね。言うとおりの個人情報は正当な理由なく公表をせまることはできません。正当な理由はあります。ご家庭の状況というものを把握することであなた達の背景というものを知ることになります。そしてそれを今後の学習指導や進路指導に役立てます。当校のこれまでのデータの蓄積から予測する結果と定期的な面談とのすりあわせで個人それぞれに適した指導というものが可能になります。書類の最後に説明がされています」  
確かめると、細かい文字でびっしり説明が書いてある。

「また、知り得た情報はその目的以外には使用しないこと、情報管理には細心の注意が払われています」

まるで機械のように淡々と説明は続く。

「その関係でね」どさっと封筒の束を出して「提出の際にはこれに入れて封をしてください。それじゃそういうことでよろしくね」言い終わると先生は俺にウインクする。

なんだよそれ。モエは俺のほう見てにやにやしてるし。

「さて、それでは授業を始めます。教科書の十八ページ、マーガレットはボブと遊園地へ行きましたというところからね」

脱力した俺は席に沈みこんだ。

昼休み、俺は部室で昼飯を食べながら考えていた。

今朝の一件で少々目立ってしまったことの影響を考えていたのだ。

今度のホームルームでクラス委員の選出があるのだ。だいたい誰もがやりたくないから押し付け合いになる公算大なのだが、そういう時はえてしてクラスの総意という理由を付けて普段目立っている奴に指名が集中することがあるのだ。まあ、とり越し苦労で済めばいいけどな。

「あんた何やってんのよ」

びっくりして食べたものを戻しそうになる。なんだよ心臓に悪い。

先輩がにやにやしなから入ってくる。全くどういうつもりなんだか。

「元気ないわね、どうしたのよ」

そんなに落ち込んでいるように見えるのか。

「なんでもありませんよ、先輩」

「ふうん」

なんだろう。何か用事なのかな。

「そうそう、その戸棚の中にあるお菓子、ちょっとだったら食べていいわよ」

やきそばパンを頬張りながら聞き取りづらい声で言う。

「どうやらあんた、一人でいるのが好きそうだからあんまり邪魔しちゃ悪いわね」と言って手のひらをひらひらさせながら出ていってしまう。

一体何だったんだろうか。まあ、いいけどね。

それとも俺がいるの知らなくて、一人になりたいくて来たのかな。それなら悪いことしたかな。

お言葉に甘えて戸棚を開いてみる。お菓子がいっぱい入っている。どちらかというと駄菓子のたぐいが多い。これも部費でまかなってるのかな。まだまだ謎が多いのだ。

物色を続けると、おお、これはイケル棒ではありませんか。梅こんぶ風味とな。

これ、いただき。

はたして一体、俺はこんなんでもいいのだろうか。

放課後、部長以下全員で手分けして作業に取りかかる。

俺は朝に仕込んでおいた野菜とフリーズドライのえびを戻したのを、とろみをつけたスープとともに炒める。

モエとメグミは麺を茹でている。

部長はウーロン茶を煎れている。

先輩はというと、食器をそろえて今か今かと出来あがりを待っている。

今回はちゃんぽんを作っているのだ。

ささっと仕上げ、さっそく賞味となる。

「この麺、コシがあつてうまい」とずるずるすすりながらモエが感想をもらす。

「よくとろみが出ていますね。インスタントにしてはいいと思います」髪をかきあげて上品に少しづつ口に運びながらメグミが言う。

「うん、上出来上出来」目一杯頬張り口をもぐもぐさせながら先輩がつぶやく。

そんなにがついたら、のどに詰まるんじゃないですか。

部長は優雅に食べながら無言でうなずいている。

なるほど、袋に本場仕込みとあるだけのことはある。簡単なわりに予想以上にうまいのだ。

「かまぼこ入れるんだったな、失敗したな」俺がそうつぶやくと皆同意する。

「あと、もやしもあるといいわね」先輩が続ける。

「でもまあ、手軽さという点では悪くないと思うよ」部長がフォローする。

「限られた食材で作るというのも大切なことだから、贅沢を言うばかりが正解じゃないからねえ」と大人な発言を続ける。

それから、俺とメグミで食器を洗って、先輩とモエでおやつ準備、部長はレモンティーを準備している。まだまだ雑談の時間は続くのだ。

「ええと、それじゃ社会倶楽部の活動へいくわよ」先輩が口火を切る。

「あの、その前に一つ聞いていいですか」俺はえびせんべいをぱりぱりやりながら発言する。

「何よミノル、何か不満でもあるの」先輩は口を尖らせる。

「いえいえそうではありません。とりあえず今日は冷蔵庫とか野菜庫にあるものでやったんですけど、食材の補充とかどうしてるんですか。そのへんまだ聞いてないんですけど」

先輩はバツの悪い顔になって答える。

「そうかまだ言ってなかったわね。基本的に生野菜とか肉類なんかは必要に応じてあたしが発注しておきます。あと保存の効くひものとかフリーズドライとかまとめ買いしてあるものは切れそうになったら、ミノル、あたしに言ってね。発注するから。あと、できる範囲でいいから各自でお菓子とかお茶っ葉とか持ってきてくれると助かるわ。無理はしなくていいけどね」

なるほど。

「あとは、仕込みとぬか床班長のミノルを、そうね、たまには手伝ってあげてね」

モエとメグミはうなづく。

「とりあえずそんなところでいいかしらね。気づいたらその都度言ってね、ミノル」

そして、にっと笑う。八重歯がきらりと光る。

笑顔はけっこうイケるんだから普段からそうすればいいのに。まあ余計なお世話ですけどね。

レモンティーをがぶりと飲む。鼻にふわっと香りが抜ける。

「それじゃ社会倶楽部の活動に移るわよ。部長からお願いします」

ごほんと咳払いして話しはじめる。

「それじゃまず、社会とは一体何だろうというところから始めようか。社会って言って何をイメージする？」メグミのほうを見る。

「私は、そうですね、先日お話いただいた空気みたいなものというのがぴったりだと思いますけれども」

今度はモエのほうを見る。

「うーん、よくわからないけど、私達にとって良くも悪くも切り離せない存在ってことかしらねえ」

「ミノルは？」先輩が指名する。

「はい。社会というものをまだよく知らないんだと思うんです。フィルターを通してしか見ていないんだと思います」

「まあそうだよね。特別意識しないで付き合ってるし、社会を剥き出しの欲望が大手を振ってふるまう現実世界というふうに解釈すると僕達はまだその手前にいると言える」部長はさらに続ける。

「そこで、社会というものを定義して、それは仮にということでもいいんだけど、社会は法であるとする考えから始めたいんだ」

社会が法とはどういうことだろう。

「この社会は発展の途中にあるんだ。それが自由と平等を基軸とした民主主義社会ということだね。まだ社会は完成してないんだから、いつかまた次の段階に行くんだ。しかし今のところそれが何なのかはわからないというところだね」

「ええと確か、社会主義とか共産主義なんていうのがあったと思うんですけど」と俺が発言する。

「うんそうだね。だがそれが資本主義社会、まあ民主主義で資本主義の社会だけど、それにとって代わるかどうかまだ結論は出ていない」と部長が答える。

「なんだか難しいわね」モエがため息をつく。

「ごめんごめん、そう難しく考える必要はないんだ。いまの民主主義社会の前がどうだったかって考えればいいんだ。それは君主制だろ。王様や皇帝が治める社会だね。それを市民が倒して民主主義になった。そうすると市民って不特定多数として存在しているから、社会を運営するためにはあらかじめいろいろな問題に対処する解決法を決めておかないとうまくいかない。その社会における規範となるものとして法というものを定めた。法治国家ということだね」

うーん、難しいままのような気がする。

「僕達はその法治国家という社会に生きているわけだから、その法というものが一体何者なのかを考えるとところから始まると思うんだ」

「法律ってことは、あれしちやダメこれしちやダメということでしょ」モエが発言する。

「社会ってそれだけなのかな」

「うん、その通り。こういう話をするとどうしても狭いところへ行きがちなんだけど、おおざっぱに法といった場合はその範囲はもっと広いんだ。不特定多数の人間が共同生活をするわけだから、法律で一定の縛りをする必要があるということも重要だけれど、それだけじゃなくて皆の価値観を一つにまとめておいたりすることも法の役割なんだ。日常の出来事を当たり前だと感じる基準というものがあるわけだから、それが社会とは何であるかを法によって決めているということになるんだよ」

ふうん。そういうものなのかな。

「社会が法であるということになれば、そこで気にしなくてはいけないのは社会を法が従えているのか法は社会に従属しているのかということなんだ」

「まあ！卵が先かニワトリが先かみたいいな話なんですね」メグミがくすくす笑う。

「そうそう。どっちが先でどっちが後なんて本当はわからないし、多分どっちでもないと言えるんだよ。でも実際はそこがとても大きな問題に発展してしまうんだ」

どうということだろう。

「当然社会って生き物のように変化していくわけだけれども、その社会の基準である法がそれに合わせて変化できるかということと必ずしもそうはならない。するとまるで法が社会の足を引っ張るような現象が起ることもあり得る。まるで法が社会を支配しているんじゃないのかと感じられる」

「ああなるほど。たとえば許せないような奴がいても法の目をかいくぐってのうのうとしていてくやしい思いをするようなものね」モエがうんうんうなずきながら言う。

そういうことなのか？

「まあ、それも一つの例と言えなくもないけど。社会というのは本当は全ての人間にとって都合のいい存在なのが理想だけれど、実際そうはうまくいかない。でもそれに近づけるように法を変えて良くしていくことを続けなければならない。しかしその過程で思わぬ弊害が出てくることもある。法と社会が互いに作用しあってそのバランスの上に成立しているところに僕達はいるということをもっと押さえておきたいんだ」

先輩がやおら立ち上がり叫んだ。

「安心してちゃいけないってことなのよ。水と空気はタダだなんてのが幻想なのと同じように、社会は付き合いかたによって味方にもなるし敵にもなるのよ。敵を知れば百戦危うからずとかまず身内を疑えとか言うでしょ。社会ってやつが何考えてるのかをいつも

注意してないと痛い目にあうということよ」

えええっ、それってまとめてるつもりなのですか。

部長はやれやれという顔をしながら続ける。

「ともかく、社会っていうのは不完全だしその社会を支える法もまた不完全なものだから、社会に起きている現実注意到それをどうすれば良い方向に向かわせることができるかを自分のこととして感じるが必要ってことだね」

なんとなく結論ということにしておきましょうか。

「話は少し違うんですけど」俺は気になってたことを確かめようと思った。

先輩は、すっぱい鳥賊を食べながら「何よ話して」と応じる。

視線が集まる。

「ええと、先日部活届を出しに生徒会に行ったんですが、そこでとても濃いキャラクターの方々とお会いいたしました」

先輩はぶっと吹き出してしまう。部長は真顔で聞いている。

「それで、この前お話をお聞きした分裂の件を匂わせる話になったんです。一体何があったんですか」

部長は神妙な顔で話しはじめる。

「ええと、どこから話したらいいかな。まず佐伯、いまの生徒会副会長だけど、あいつらと共に青雲の志というやつで将来この社会をどうしていくべきかということの研究する同好会を作ることになった。だけれどその時は同好会設立の許可が降りなかった。青臭いガキが一人前みたいな顔をして設立趣意書なんて作って直接学校当局にねじこんだ姿勢が反感をかったということなんだ」

へえ、何だか今の部長からは想像できないなあ。

「それでどうするということになって、ともかく世をしのぶ仮の姿として名前だけ残っていて休止中だった即席同好会を復活するというので、今度は生徒会に根回しして自治権を盾に秘密結社社会倶楽部を立ち上げたのさ」

ああそれで一応いまでも裏テーマというスタンスを維持してるわけね。

「当初はうまくいったんだけどね、昨年の夏ごろかな、急に部内に対立が表面化してね」うんうん、それからそれから。

「そのころやってきた教師、ミノル君のクラス担任の林原先生だけど、彼女が『生徒管理システム』といわれる人間の思考を環境や教育体験から類型化し最適化した個別指導を可能にする超高規格情報処理システムをこの学校に導入したんだ。彼女はね、ええと、どこだったか海外の大学でその研究をやっていて、フィールドワークとしてこの学校に来たんだ」

えっと、あの子供っぽい先生がそんなわけのわからないことを。

「もちろん僕はそのこと自体を批判的に捉えているわけじゃない。テクノロジーは人を幸福にするために利用される限りにおいては正しいことだし、どんなシステムも実験を通して改良されるものだ。僕が引っかかっているのはそのことじゃなくて、生徒を一つのプログラムと仮定し暗示という方法でそのプログラムを改変して自分の意に添う生徒を作り出しそれを使って学校全体の生徒にどのような影響を及ぼし得るかという多分彼女の

個人的な実験を展開していることなんだ。機械は正直にいうことを聞いて思い通りに働いてくれるけど、そんなことに飽きてしまった彼女は人間そのものを使ってどういう方法でどういう制御が可能かということをおもいついたんだろう」

なんだか怖いような話になってきました。

「それで多分政治的志向の強い佐伯らに働きかけて何らかの暗示を与えた。これは僕の想像として聞いておいてほしいんだけど、分裂騒動が始まったところに彼らの心の中にあった政治を具体的行為として表現したいという欲求を暴走させるようなことが続くようになったんだ。僕とサヤカ君には少し違った考え方があるから彼らの盛り上がりについていけないところがあった。彼らはまず改選期だった生徒会役員選挙に立候補し当選した。合法的に生徒会を占拠した彼らは政策研究会準備室を立ち上げて今に至るというわけさ」そんな事情があったのか。

先輩は少し顔を曇らせて「予算を握る生徒会が敵の手に落ちた今、あたしたちの運命は風前のともし火なのよ」

そんな大袈裟な。

「先輩、心配しすぎですよ。届はちゃんと受理しますと会長さんも言ってたし」

「まだ副会長よ。すぐ会長になるんだろうけど」いまいましげに先輩はつぶやく。

部長はやれやれという顔で、

「あくまで今の話は確かな証拠があるわけじゃない。それに僕は今でも彼らとは実質的対立は無いと信じている。目標は一つだけそこへ向かう道筋が少し違うというだけなのさ。林原先生にも反感を持っているわけじゃない。ただ、ちょっとお遊びが過ぎるのかなと思うだけさ」

そして、モエの浮かない顔に気づいて部長は付け加える。

「あまり先入観を持たないようにね。あくまでここだけの話だからね」

釘をさされるかっこうになったモエは一言「はい、わかってます」と答えたきり何だか考えこんでしまったのだった。

解散になったあと、俺は「ちょっと付き合いなさい、ミノル」と駅前にある甘味処へ連れていかれた。大判焼きとオレンジジュースを注文すると少し心配顔で切り出された。

「モエのことなんだけどね」そういう話でしたか。俺はすこし安堵する。

「あの子ちょっと潔癖なところがあるみたいね。ちょっと心配なのよね」

「そうですねえ、俺の質問が変な方向に行っちゃったみたいで」

「それはいいのよ。どうせわかることなんだから」

「どうしましょうか」

思案顔になった先輩はやがてきっぱりと言う。

「あんた気をつけて見守るのよ。こういうことはもともと大したことないのに変な誤解の連鎖で意外な展開をみせることがあるのよ」

「見守ればいいんですか」

先輩にじっと瞳を見つめられる。まるで心を見透かすように。

「そうよ。何か起る前にうまくフォローしてあげて。あんただったらできるから」

俺にできるのか。自信無いなあ。

大判焼きが運ばれてくる。

「白あんかつぶあんとそれからチョコクリームにゆず味と。好きな食べなさい」

俺はチョコクリームにかじりつく。中から香ばしいクリームがあふれて口の中にひろがる。

「あんたおいしそうに食べるわね」観察するような顔をして言う。

「ごちそうのし甲斐があるわ」

「おごりですか」

「当たり前でしょ」笑う。

店内を見まわす。ウチの生徒をあてこんだ商売に違いないこの店は、ほとんどの客が通りに面したテイクアウトで買っていくので、四人掛けのテーブルが三つ壁際に並んだ細長い店内には先輩と俺の二人きりだ。何だかどきどきするのは何故だろう。

気をそらすようにお品書きをながめる。かぼちゃ味もあるのか。うまそうだな。

食い入るように見つめる俺に、

「食べる？」「はい」

頬張りながら、この機会に聞いておこうと決心する。

「あの、聞いていいですか」

「何？」

「部長と先輩って、付き合ってるんですか？」

一瞬固まったあとで、

「ほうほう、ういういしい質問だねえ」ニヤニヤして言う。

「そういうことに興味深々のお年頃なのはよくわかるけど、あたしと部長の関係はそんなんじゃないのよ」遠くを見るような目になる。

「何ていうのかしらね、惹かれることは確かなんだけど、なんかこう遠い未来にある同じものを見ている感覚というのかな、同じ夢を見ているというのかな、うまく表現できないけど」

ぽつぽつと話す。

「人との関係っていろいろあるけど、恋人とか友達とかそういうものと違う、とても安心できるけれどとても不安にもさせられる、たぶんこの世界に二人といない相手に出会ったんだという直感があったのよね」

「ええと、そういうのを恋というんじゃないんですか？」

「うーん、そうじゃないのよね」腕組みして考えこんでしまう。

俺はその言葉をはんすうしてみる。安心と不安の共存か。まだそういう体験は...

「好きだよ」

「えっ」どきどき。

「部長のこと」

「...はあ」そっちね。

「恋とかじゃなくて」

「はあ」

先輩は俺の顔を覗きこむような仕草をする。



間近で見るとやはりそれぞれのパーツがとても繊細な造りなのだ。睫毛が長い。瞳の網膜の襞襞がグリーンがかかっていて光の加減なのかゆらゆら色彩が変化するように見える。鼻筋が通っている下に少々大きめの鼻腔が開いている。ひくひく動いている。唇は真一文字に結ばれている。そして...

急にぶっと吹き出した。

「あんた何深刻な顔してんのよ、可笑しい」

ついにはゲラゲラ腹をかかえて笑いだしてしまう。

なんだろう、この感触は。奥のほうがどくどくしている。

「まあいいわ。ともかくモエのことよろしくね。あたしが言うのも変なんだけどね、何だか危なっかしいのよね」

本題に戻ります。

「大丈夫よ、あんたならやれるわよ」

すこし胸を反らしながら言う。

「なんたって、あたしがそう言うんだから間違いないわ」

あいかわらず自信家なんですね。俺はオレンジジュースをがぶりと飲み込む。

「そうは言っても、何かあったらすぐ相談してよね。必ず助けるから。いいわね」

俺は、不謹慎にも別のことを考えていた。はたして先輩は俺のことどう思ってるんだろ。しかし、とてもじゃないけど、そんなこと訊く気にはなれなかった。

それから数日は何事もなく過ぎていった。部での話題もなんとなくあたりさわりのない雑談に終始した。

収穫としては、モエがデザイナー志望でできればそっち方面の専門学校に行こうと思っていることが知れたこと。普段のモエはとても明るく少しお調子者のとてもいい娘なのだ。

メグミはすごいお嬢様で、モエとは幼なじみ。

「あまりそういう目で見られたくないので、内緒にしておいてくださいね」ということなので皆秘密は守ることを誓う。

俺は、平均的な何のとりえも無い、どこにでもいるつまらない男だから、そのままのことを話した。

「まあ、身の上話もなんなんだけど、皆にしゃべらしておいてあたしだけ話さないのもフェアじゃないから」と先輩は少しだけ教えてくれる。

何代も続く菓子問屋の娘だということで、なるほどやたらにお菓子の供給が豊富な理由は、ワレモノや売れ残りで賞味期限間近のものをタダでどんどん持ってきてくれていたのだ。

「言っとくけど、賞味期限切れたって全然おいしいのよ。なま物の消費期限とは違うんだからね。それなのにこの国ではあと一ヶ月とかそういうレベルでとたんに商品価値が下がるのよね。こんなんでもいいのかしらね」

なるほどねえ。そんなこと考えたこと無かった。

部長がすかさずフォローする。

「そうだよねえ、もったいない話だよねえ。まあ、そのおかげで僕達はただでおいしい

思いしてるんだから、なんとも言えないんだけどねえ」

俺が話しを継ぐ。

「確かにもったいない話ではありますが、言い訳するわけではないけど、そういう風味に対するこだわりというものがこの国のキャラクターとして有効な部分があるんじゃないでしょうか。食だけに限らないけど、全てにおいて繊細さというものがこの国の才能として認められてきたと思うけどなあ」

「おお、ミノル君、いいこと言うじゃないか。感心するねえ」

「でもねえ、神経質すぎるのも、あたしはどうかと思うわよ、ミノル」

そう言ってから、はっとした顔で先輩はモエのほうをちらりと見る。

モエは、「そうかあ、そういう考え方もあるのかあ」といいながら酢こんぶをもぐもぐ食べている。俺と先輩の目が合う。先輩は目で、あんた気をつけなさいよねと言っている。俺は、神経質すぎる、と言ったのは先輩じゃないですかとアイコンタクトを試みるが全く通じる気配がないのでしかたなく、すいません気をつけますと目で言ってみたら、宜しいと目で返ってきた。

ともかくそんな平和な日が続いたのです。

そして事件は忘れたころに起るものです。

その日の朝は、早めに教室で授業の準備などという慣れないことをしていたのがよくなかったのかも知れない。

教室にひょいとミレイ先生が顔をのぞかせて、あれ今日一時間目英語じゃないよなと思っていたら、誰かを手招きしている。

モエが廊下のほうに呼び出される。ガラス越しなので何を話しているかはわからないのだが、しばらくやりとりがあったあとで急に「わたし、拒否します」というモエの叫び声みたいなのが聞こえてきた。

いやな予感がした。しばらくちゅうちょした。

意を決して、俺は廊下へ飛び出す。

始業前でけっこう生徒がいるところで、

「それはどういうことなのかしら」

「わたし、先生の考え方には賛成できません」

押し問答をはじめたものだから、他のクラスからも、おい何だなんだナンダと、みるみる野次馬に囲まれるようなかっこうになってしまっていた。

これは何とかしないと変に騒ぎにでもなったらモエの立場が悪くなる、しかしどうするという思いでしばし見守ることしかできない。

「ここで私の考え方を説明しなければいけないのかしら。あなた何をそんなに心配しているのかしら」

「先生は、間違っていると思います」

いよいよこれは尋常じゃないことになりそうだ。どうする。

ほとんど無意識に人込みをかき分け、先生とモエの間に割って入るようなかっこうになっていたのだ。

俺は、とりあえず思いつくままに、

「先生、騒ぎになってますよ。もうすぐ授業も始まりますしとりあえず話は放課後ってことでどうですか」

「あら川合君」俺とモエの顔を交互に見て、

「いいでしょう。ちゃんと話しをしなければならぬよね。わかりました。放課後職員室へ来るように。あなたもよ」俺の顔を厳しい目で見つめながらそれだけ言うと、

「あなたたち見世物じゃないのよ早く教室に戻りなさい」と周囲を一喝する。

そしてずんずん肩をいからせながら去っていった。

やれやれ、まあ、とりあえず、こんなもんでしょう。はあ。

モエはうつむいたままでまだ興奮しているようだ。声をかける。

「とりあえず昼休み作戦会議な。いいな」

俺にも信じられないような言葉が出る。

モエはうつむいたままで「うん。まきこんじゃったね。ごめん」とだけ言い残して教室へ入って行ってしまふ。

それにしても油断していたな。やっぱり先輩の言ってたとおりになった。

俺は周囲の異常なほど好奇心むき出しの無数の視線に気づく。

ものすごい誤解をされているようだ。こういうときは知らん顔で口笛でも吹きながら...

「おいお前ら。もうチャイム鳴ってるぞ。さっさと教室入れ」という数学教師の声に救われた。

昼休み部室にてモエと俺とそれから朝の騒ぎを見て心配したメグミと三人で集まった。

とりあえず事の発端について訊ねる。

「例の調査票なんだけど、早く提出しなさいということだったのよ」

提出期限は過ぎているから、催促にきたわけか。

「それで、最初、どうしても出さないといけませんかと言うと『当然でしょ、どういうこと』って強い調子で言われて、つい」

まあまあ教師というものはそういうものだからな。俺は訊ねる。

「それで拒否したというわけだ。理由はやはり、管理システムってやつが気に入らないということかい？」

「うん、なんだかイヤなのよね。まるでプライバシーをのぞき見して勝手に調べられ勝手に解釈されて。そんなことって強制できるものじゃないと思うわ」思いつめた顔で言う。俺は少し考えてみる。確かに少し踏み込みすぎの感はあるものの、情報の管理は徹底すると言うしその目的も緻密な個別指導だというから、まあ、正面きって拒否する理由としては少し弱いと思う。そういえば、ウチのかあちゃんはびっしりと書き込んで『こんなに真剣に取り組んでいただけるんだから、あんた勉強頑張るのよ』とすごく乗り気だったよな。

待てよ、モエの親御さんはどういう反応だったのかな。

訊いてみると、

「実はね、親には話してないの。これはわたしの問題なんですから」決然と言う。

なるほどそういうことになると、大人を納得させる理由を言わないとならないな。ただ

心情的な理由だけでは弱い。さてどうしたものか。俺は頭を抱えてしまう。

すると心配顔でメグミが話し出す。

「ともかくモエちゃんはこのあいだ部長さんから聞かされた話が引っかかっているのですよね。部長さんもあんまり深刻に受け止めないほうがいいってことだったし、とりあえず今回は先生の言うことを聞いてすこし様子をみてはどうですか」

今までの俺だったらその意見に賛成していたかもしれない。やはり教師も人間だ。変に騒ぎを大きくしてもこちらにいいことなんて無いはずだ。それはわかりやすく言えば教師の言うことに最終的には従わざるをえない立場というものに俺達はいるのだという前提を置いているからだ。この学校という空間を支配しているのは教師の決めたルールで、その範囲内での自由というものが保証されているということ。その前提を否定して反抗するという選択もある。ただ従うのか全面对決するのか。まあ対決すれば事の成り行きによっては退学なんてこともあり得る。馬鹿馬鹿しいから無難にというところに落ち着いていただろう。

この考えの道筋は、まあ普通そんなとこだらうと多くの賛成を得られるものと思う。

しかし、である。本当にできることはそれだけなのか。この社会を規定する法というものが不完全であるというのなら、同じように教師が決めたルールであってもそれが完璧であるはずがない。疑問があればそれに対して異議を申し立てることはしていいはずだ。よし、それで行こう。具体的にはどう言えばいいか。まず説明を、くわしい説明をしてほしいと願う。その説明にモエが納得すればそれでいい。それでもやはり納得できないのであれば、そのシステムにモエが参加しない選択肢は可能かを問う。そのシステムというものが個人指導のためだけのものであれば不利益をこうむるのはモエ自身ということになるから、本人がそれでいいというのであればそうしてほしいと願うことは間違っていないだろう。その場合やはり親の承諾という話しになるだろうが、それはモエが親を説得するというところだからそれでいいんだ。この方法で異議を申し立てよう。よし、それでいい。

俺はモエに考えを説明して、メグミには部活に遅れることを部長と先輩に伝えてもらうよう頼んで、あとはともかくやってみるしかないと心に決めたのだった。

放課後、職員室へ出頭すると、ミレイ先生はさっぱりした表情で俺達を迎えた。

「まず、調査票を提出できない理由を聞かせてもらおうかしら」

「わたし、何に使われるのかよくわからないのに情報を強制的に出させる、先生の考え方に賛成できないんです」

いかん、これじゃまた朝の続きになってしまう。俺はともかく空気を変えようと、

「先生、その管理システムというものの説明を詳しく聞かせていただくことはできませんか。そうしないと…」

さえぎるように、

「わかりました。誰に何を吹き込まれたか知らないけど、まあいいわ。説明しましょう」

俺はとりあえずほっとする。

「そうね、まず、『生徒管理システム』の目的だけど、従来の生徒指導というものは担当

教師の経験からその生徒の特性を理解し好ましいと思われる方向性というものを提示する手法だと言えます。基本は変わりません。最終的に判断するのは教師の責任であることは事実です。しかし、たとえば私はあなた達一人一人と一体どれだけのコミュニケーションが可能かということを考えればそれはとても限定されたものと言わざるをえない」話しは熱を帯びてくる。

「こういう言い方をすると無責任ととられかねないけど、年に数度の個人面談くらいでわかることなんて知れてるの。それ以外に私達教師は生徒一人一人とどれだけ関わられるかということと教師に課せられた責任というものにはアンバランスがあると思う。それを情報技術でサポートすることができるならこれは教師にとってだけでなくあなた達にもメリットがあることなのよ。その手法としては、あなた達が生まれてから今までの成長過程をどういった環境でどういった考え方によって過ごしてきたかを知ることあなた達の持っている特性というものを類型、これは過去のデータベースに基づくものだけど、それに当てはめて絞りこむの。それを知ったうえでポイントだけあなた達との直接交渉から得ることで適切な判断が下せる。そのための情報を求めているということ。そして、その目的以外に使わないし外部に漏れる心配もない。セキュリティは万全だから」俺が話しを受け取る。

「なるほどおっしゃるとおりのすばらしいシステムなら正しいことなのでしょう。でも思うのです。たとえそうであってもそのために全ての情報を出さなければならない理由、つまり情報提供を強制する根拠というものがあるのでしょうか。システムに参加しないことによる不利益を本人が承知するのであれば、参加しないという選択は許されるのでしょうか。それを教えていただけますか」

先生はまるで苦虫を噛み潰したような顔をしてしばらく考えてから口を開く。

「それは許されません。強制する根拠というのであれば、あなた達生徒は教師の指示に従う義務というのがあります。明らかにこちら側に落ち度があるならともかく、いまの説明で理解できないからといってそれは理由にはなりません」

それから明らかに不快をあらわにして、

「不利益を承知すればですって？ そんな判断をあなた達にゆだねることはできません」

まるで俺達に不満をぶちまけるようにいろいろなことをまくしたてる。

俺は途方にくれる。これでは平行線のままだ。何かいい方法はないものか。しかし考えがまとまらない。やはり甘かったということか。現実はそんなに簡単にはゆらがないということか。

「ちょっとよろしいですか」

背後からよく通る声があった。振りかえると新谷先生がいる。いつの間にといい気がした。

「さしでがましいようですが、私は本人の希望をまるで無視するような方法はいかがかと思えますよ」

ミレイ先生は黙っている。

「林原先生のやり方を批判するつもりはありません。しかしね、傍で聞かせていただいた限りにおいて彼らの言い分にも理解できる点はあると私は思うのです」

ミレイ先生は、なお黙って聞いている。

「学校を運営するうえで必要な情報を求めることはあります。しかしね、それがどこまで

許されるのかという一線は常に意識しないとならない。先生の教育に対する情熱には敬服するばかりだが、それなら全て許されるというわけではない」

やおらミレイ先生は甲高い声をあげる。

「これは、当校の方針として決定したことです。認められたことです。それをおかしいとおっしゃるのは、新谷先生、我が校の教師として…」

新谷先生が制して、

「言わんとすることは十分承知している。しかしね、少なくともこのやり方が先生の考える生徒指導の最適化にかなうことにはならんんじゃないかな。本人の意思を無視して強制することが先生が考える生徒と教師のコミュニケーションを良くする目的にかなうことにはならんんじゃないのかな」

ミレイ先生はかたい表情のままつぶやくように言葉をはき出す。

「わかりました。私も事を荒立てるつもりはありません。それでも…」

モエのほうを向き直り、諭すような口調で続ける。

「なにも教えてくれないというわけにはいかないのはわかるでしょ」

新谷先生が引き取る。

「じゃあこういうことにしてはいかがですか」モエにやさしく語りかける。

「ご両親の勤務先、これは緊急連絡のために必要ということなんだけど、それから家族構成、これはまあ君がご家庭でどういう位置にいるかということで先生としてはいろんな話を聞かせてもらうときに参考になるんだがなあ、それくらいは教えてもらえないかな」

モエは明るい声で、

「はい、それはよくわかります。わがママをいってすみません」

ミレイ先生も肩をすくめて苦笑する。

「まあ、あなた達とはこうして濃い話をさせてもらったから、よく理解することができました。性格とかね」

俺はとりあえず感情論にならなくてよかったと胸をなでおろした。

ミレイ先生は俺の顔を見て続ける。

「それにしても、あなた達のような反応があるとは予想外だったわね。これはこれで貴重なデータになります」もう分析にはいつているのだ。

俺は思うのだ。事はそんな生易しいことではない。これはあとを引くことになるだろう。それはしかたがないのだ。なりゆきとはいえ混乱をもたらしたことは事実だ。俺の考えが甘かったということだ。

しかし、とも思うのだ。行動を起こしたことにより経験することができたことは無駄にはなるまい。俺の中でかちりと何かが動いたように感じた。意外な感じがした。

ミレイ先生はそんな俺の心を見透かしたように、

「心配しなくても大丈夫よ」とぼつりと言ったのだ。

部室に戻ると、部長も先輩もメグミも、モエを取り囲んで「大丈夫かい」「とりあえずこれ食べなさい」「元気だしてね」と声をかけている。

俺はほったらかしかい。

しょうゆせんべいをばりばり食べながら隅っこでいじけてみる。

あのとモエは新谷先生の提案に従い必要な部分だけ記入した調査票を後日提出することをミレイ先生に約束し、さっぱりした顔になっていたのも、まあ良しと思ったのだ。

そんな俺の存在に今気づいたかのように、

「なんだ、あんたいたの。あいかわらず存在感薄いわね」とぬかしやがる。

俺はそんな薄い存在なのか。

「馬鹿ね、冗談に決まってるでしょ」愉快そうに笑う。

「ともかく、ごくろうさん」

あーあ。まあ、いいけどね。





### 第三章 プライバシーは尊重しましょう



「プライバシーというものについて話してみたいと思うんだ」  
部長がそう切り出したのは、あんなことがあって数日後のことだ。  
その日は、チャーシューとしょうゆラーメンの相性について、  
「ギトギトとさっぱり相殺効果なのよ。カレーに冷たい水と同じことよ」  
この先輩の意見に、  
「そうかしら。とんこつにも合うんだから、しょうゆの油の部分とのギトギト相乗効果という考えも成り立つではありませんか」  
めずらしくメグミがかみついて議論は混乱するばかりだったところ、「まあ君達落ち着いて」と部長がアップルパイとジンジャエールを出すと何故か落ち着をみるという経緯をたどったあとのことだった。  
「あんなことがあったからというわけじゃないんだけどね、プライバシーって微妙な問題だから、それをキーにして社会を垣間見るのもいいと思うんだよね」  
「それは」と先輩が続ける。  
「知る権利といわれるものとの対立として見えてくるんじゃない」  
プライバシーと知る権利か。  
「プライバシーって言えば知られたくないことを指す意味だと思うから、知られたくない権利と知りたい権利ってことね。さあどうするのってことかしら」とモエ。  
「何か基準があるのかしら」メグミが不思議そうな声で言う。  
「そう、きっちり基準なんか作れっこない。一対一の話しだったら教えろ教えないで当事者同士でもめてどこかで妥協点を見出してやればいい。個別のことはそれで十分なんだ」部長は一呼吸おいて続ける。  
「それじゃどういう時のことを考えておかななくてはならないかということ、やっぱり社会ということになるんだ。社会を通して知りたいという欲求と知られたくないという欲求がお互い顔の見えない状況で作用する。あいまいな、基準のはっきりしない状況で、知られたくないことが知られてしまう。その可能性は常にある。その可能性が社会を構成している個人を不安にさせる」  
また一呼吸置き、  
「その不安が、あいまいな基準をはっきりさせたいという方向に作用する。できれば知りたい欲求を制限する方向に決めておけば安心だ。そういう現象が実際に起こっている」  
「プライバシーは保護されるべきという常識ね」先輩が引き取る。  
「それでいいじゃないということなんだけど、実際はそう単純ではないのよね」  
「そう、知られたくない側からすればいっそのこと全て秘密にしまえばいいというこ

とで問題は解決するわけだけど、さてそれじゃ今度は知りたい側は必要な情報を求めようとしても何もわからないことに気づく。そこで困ってしまう」

「でも」モエが発言する。「もともと誰にも知られたくないことは、知りたい人がいても知らせないことでいいと思います」

そうなのだ。それでいいはずだ。だいたいプライバシーに分類されるものはそういうものではないのか。

「そうだね。守られるべきものが守られることは何の不都合もない。でもね、考えてごらん。自分は他人のそういう守られるべきものについて知りたいと思ったことは無いかい」  
「どういうことだ。」

「自分を中心に知られたくないことばかり考えて満足しては不十分なんだ。本来はプライバシーの領域と認識していても、いざ自分が知りたい側になったとき、たとえ無意識だとしてもだよ、相手が嫌がることをなぜか忘れたように根掘り葉掘り知りたいと思ってしまう自分についても考えないかね」

「それは著名人のゴシップのことをおっしゃっているのでしょうか」メグミが指摘する。

「まあ、例としてはわかりやすいね」

「プライバシーの基準がどこにあるのかを考えるにはいい例ね」先輩が続ける。

「くだらないと思いつつ、それでも見てしまうというところがこの問題の本質を表しているわね」

でもそれは、

「知られることを前提にしてコントロールされたリークではないのかな」と指摘してみる。

「まあそういうこともあるだろうね。だが注目点はそこじゃないんだ。知りたい欲求がプライバシーの境界を動かしてしまうという点だ。プライバシーの保護に例外を大した根拠もなく作ってしまう、その節操の無さを見なければならぬんだ」

先輩が引き継ぐ。

「そうね。本来大切にしなければならないもの、慎重に扱うべきものをいとも簡単に越えて見せるのも人間の本質よね」

部長が補足する。

「それが社会というものを媒介することによって自覚なき暴走を始める。社会がそれを欲していると転化する。知る権利なんだとね」

「なんだか怖い話ですわね」メグミはしみじみと言う。

「社会って何だか油断ならないわね」とモエが納得している。

「しかし、知る権利は保障されなければならない大切なものでもある。それは知られてはマズイと思ってかくされていることを白日の元にさらす働きをしてくれるからね」

知られてはマズイことって何だ。

先輩は俺のことを見てにたにたしながら言う。

「あんたにも知られたらマズイことの一つや二つあるんじゃないの。でもね、そういう意味じゃないのよ」

「そう。わかりやすく言えば不正なことだよ。社会の中にはうもれていることがいくらかでもある。そういうことを発掘することを保障する権利というのが知る権利の本来の

意味だよ。しかし油断してると権利は一人歩きしてしまうこともあるんだということ。知る権利を主張しているのは一体誰なんだということがあいまいになって、ただ権利だけが勝手に振る舞う危険を意識していなければならない。これは社会というものと付き合うとき常時頭に置いておくほうがいいよね」

先輩は、ぱんと机を叩き立ちあがる。

「そうよ、権利の濫用を許しちゃいけないのよ。コントロールしなきゃいけないのよ」

案外まともなこと言ってる。うーん、でもなんか食い足りないような。

プライバシーと知る権利の関係ってもっと深みがあるような気がする。それは一体なんだろうか。

すると、モエがおもしろい提案をする。

「これなんですけど」携帯端末を取り出で見せる。

「これを使うことで知らないうちに個人情報がある意図を持った者に集められているということがありますね。これもプライバシーの侵害の例ではないかしら」

「それはおもしろいね。確かに便利だからとあまり深く考えずにいると、知られたくないことが結果的にどこの誰かわからない者に知られているということはある得ね。そう、個人情報が価値を持つ時代だからその保護についてよく考えなければならないんだ」

先輩は恥ずかしそうに、

「あたしはコレだから心配ないけどね」といまどき珍しいただの携帯電話を取り出して言う。

「これならイタズラ電話くらいなものよ、心配することは」

何か違う気もするが、まあいいか。

そのとき、俺の頭の中をさっと暗い影のようなものが通りすぎた。何か重要なことを忘れていた。プライバシーと知る権利と情報化社会。

あと思った。プライバシーが守られているか心配なこと。情報の管理がどのようにされているのかということ。

俺はモエの件で学校が管理する情報の中身のことで気にかけていて、ミレイ先生のいう情報の管理は適切に行われているという説明をそのまま鵜呑みにしていた。それ以上深く考えなかったけど、実際その管理って誰がどういう方法で行っているんだ。そう思ったら急に不安が増幅していくのだ。

そんなことを考えている俺にお構い無しに話しは進んでいく。

「情報を持っている公共機関はその管理について注目されている。ずさんな管理がされているのではないかと心配の種になっていることは事実だ。利便性を上げるために公共機関同士が連携すればするほど情報の持つ重要性は高まりそれと比例して管理に対する不安も増大する。これは今の社会が生み出した新たな課題なんだろうね」部長はさらに続ける。

「もはや好むと好まざるとに関わらず重要な情報が一瞬で奪われる可能性がある社会にいるということは間違いないけど、もうあともどりはできないんだよね」

俺は上の空で聞いていた。

俺は早速、自分達の個人情報が具体的にどう適切に管理されているのかを知りたかった。

しかし、その願いはかなわなかった。セキュリティの詳細を明かすことはそれ自体がセキュリティを危うくするのだから当然と言えば当然だ。もちろん俺にはそんな専門知識があるわけではないが、それであっても明かすことは不可能であると断られた。

ミレイ先生は、

「あなたは本当に細かなことを次から次へと持ち込んでくるのね」とすこし呆れ顔。

「具体的なことは何一つ言えないけど、最高レベルのセキュリティだから安心していいから」と念を押すように言うのだ。

もうそれ以上俺には何も言うことができないということだ。

なんだかモヤモヤした気分でぼんやり授業を受けていたとき、後ろの席から背中をつんつんつかれて我にかえった。

そっと振り向くと「これ」と机の下から何か手渡された。そっと見てみると紙片を折りたたんだ上に『川合へ。あとで読んでくれ』と書いてある。教師の様子をうかがいながら後ろを振りかえり「お前？」と聞いてみる。肩をすくめるような仕草をするだけで多分他から送られて来たということなのだろう。

気になるので机の下でそっと開いて見てみると、

『放課後に特殊教室棟屋上に来てほしい。重要な話がある。必ず一人で来てくれ』

それだけ記されている。なんだか危険なニオイがする。どうするか。

超常現象研究会からのご招待とは思えないから、これはいわゆる呼び出しというやつだろう。相手がわからないから不気味だ。

そうはいっても行くしかないだろう。もう一度メモを見る。

これは男の字だから、やっぱりヤバイことなのか。心当たりは、無い。重要な話というからにはぶっそうなことでないことを祈ろう。

やっぱり止めとこうかな。いや、そうもいくまい。

でもなあ。ええい、もうどうにでもなれ。

頭を上げると、教壇では『石器時代における採集生活の不安定さがその後の社会形成に及ぼした影響』について解説しているところであった。

放課後になり、俺はどきどきしながら屋上へ出かけたのだ。

階段の踊り場から、隅っこの影から、誰か飛び出してくるのではないかとびくびくしながら、ようやく外へ出る扉までたどりつく。そっと開く。

どうやら今日は未確認飛行物体を捜す活動はお休みのようで誰もいない。油断なくあたりを見廻しながら恐る恐る外へ出る。

屋上はこの出入り口としての建屋と給水塔以外には何も無く、転落防止柵も無いからあまり縁に近づくのは危険だ。注意して歩きながら捜すが本当に誰もいない。

これはもしかしてからかわれたのかと少し腹立たしさを覚えたころ、ふいに出入り口がきいと開く。俺は身構える。

一人の男が顔をのぞかせる。クラスメイトの、ええと、なんて名前だったかな。

「呼び出してすまない」それだけ言うとそいつは黙りこむ。

ええと、名前が出てこない。

「ええと…」 「吉田だよ」 そうそう吉田だ。

たしか帰宅部でクラスでもあまり目立たない奴だ。一体何の用だろうか。

「実はさ、ちょっと聞きたいことがあってさ。あまり人に聞かれたくないから、悪いと思ったけどこんなことをしたんだ」

まあ、ぶっそうな話しでもなさそうだから、俺はひとまず安心した。

「なんだい、聞きたいことって」

「実は、高岡のことなんだ」

高岡？ 誰だっけ。俺はすこし戸惑った。

「モエちゃんのことだよ」 口をとがらせて恥ずかしそうに言う。

ああ、そういえばあいつそんな名字だったっけ。

「モエがどうしたの」

吉田は少し俺のことを睨んでから続ける。

「お前さ、いつも一緒にいるみたいだけどさ、お前ら付き合ってるのかよ」

ほほう、そういうことか。

「付き合ってるわけじゃないよ、心配しなくても」

言ってから俺ははっとした。こういうときはこんな上から目線の言い方が一番まずいのだ。

案の定、吉田は憎憎しげな目で俺を見ている。これは何とかしないとぶっそうなことになりかねないぞ。

「何か誤解しているみたいだけれども、俺達はただ同好会の仲間ということだけだから」

言ってから、仲間か、その表現がぴったりだなと思う。

吉田はなお不信そうに言う。

「それじゃこの前騒ぎがあったとき、真っ先にかばってたのは何なんだよ」

「それはさ、仲間が困っているとき助けるのって普通のことだろ」

吉田はすこし沈黙したあと、多少やわらかい顔になって続ける。

「それじゃさ、ええとね、その、親しくしてるならさ、知ってることを教えてほしいんだよ」

「何を知りたい？」

「彼女、誰か付き合ってる奴いるのかな」

それは、と言いかけて俺は止めた。

これはモエ自身のことなのだ。いくら俺が知っていることがあったとしても、俺の口から言っているのかどうかは俺の決められることではないのだ。

そうだ、これはモエのプライバシーの問題なんだ。モエの知らないところでそれを勝手にやりとりするわけにはいかない。でも、それをどう説明すればいいんだ。

俺が黙っているのを、何か知っていると誤解したらしくて、

「そうだよな、いるよな」と肩を落とす。

まずいぞ何か言わないと。

「それは、直接本人に聞いてみるほうがいいと思うけどな」

吉田はじっと俺の顔を見る。

「正直に言うと、俺はあいつのことを何でも知っているわけじゃないから、わからないと

いうことだけど、それよりもこういうことは直接聞かないと意味がないと思うがどうだろう」

なんで疑問形なんだろう。よくわからん。

「何て言うのかな、つまり、その、なんだ。つまり吉田は高岡と願わくば付き合いたいと思ってるわけだろ」

吉田、うつむく。

「それだったら、もし仮にだよ、もし高岡が吉田に好意を持っていたとしても、自分の知らないところでこんな話しをされていると知ったらどう思うかな」

「言うのか」吉田は思いつめた顔で言う。

いかんいかん、雲行きがあやしくなるばかりだ。

「俺はそんなことは言わない。本当だよ」

なんとか気持ちをほぐさなくては。

「そういうことじゃなくてさ、俺が言いたいのは、こういうことはうまくいくかどうかはともかく、行くしかないってことだよ」

なんか適当なこと言ってんな、俺。

「そういうところを見るんじゃないかな、女って」

本当かよ、それ。俺本当にこんな適当でいいのかよ。

「だからさ、影ながら応援するからさ、言っちゃえよ」

無責任なことだけど、でもなあ、それぐらいしか言うことないよなあ。

「とりあえず、がんばれとしか言えないよ」

吉田は考え込んでいるようだ。

俺は続ける。

「多分、これは俺の勝手な想像だけど、あいつは良い悪いはともかくちゃんと対応する奴だと思っよ。だから、やってみるべし」

吉田はなおも何か言いたそうな顔をしていたが、はげまして送り出した。

屋上に残された俺は、はてこのあと部室でどんな顔をすればいいのかと思った。

まあ、余計なことは考えずに知らないことにしておくのがよかろう。

ともかく、屋上をあとにしたのだった。

俺は何食わぬ顔で自然な空気を発散させながらさりげなく部室へ入っていく。

部長が「おや、重役出勤だねえ」と言うと、先輩は「遅いわよまったく。お腹すいてもうめまいがしそうだわ」といって悪態をつく。毎度のことながら背中をドンと叩かれ俺は咳き込む。

メグミはそんな俺を「どこかお悪いんですか」と心配してくれる。

モエが奥のキッチンから顔をだす。一瞬どぎまぎしてしまう。

「ちょっと手伝ってよ」と手招きされる。

「パスタ茹でるから、あんたホワイトソース作ってよ」

なんだか先輩の口調がうつったような言い方だ。

「へいへい仰せのままに」

茶化して適当なことと言ってないと顔に変なものが出そうだ。



とりあえず缶を開けてなべで煮る。ええと、マッシュルームあったかな。  
「冷蔵庫にカット野菜あるからそれ使って」先輩が首だけ出して指示する。  
おお、これは楽チンだ。分量はだいたいフライパンに移して茹であがったパスタと絡めて炒める。なかなかいい香り。  
「メグミちゃん、お皿準備してー」「はい」  
出来たところで次々盛り付ける。  
「おお、おいしそうじゃないのよ」「まだ食べちゃダメですよ、先輩」「えーっ我慢できない」  
ともかく手を動かしていれば余計なことを考えずに済むのだ。  
手早く五人分仕上げたところで「いただきまーす」  
先輩はがつつ食べ始める。  
メグミは器用にクルクルと巻き取っては口に運ぶ。  
部長は「うん、上出来」と満足そうだ。  
モエが「茹で具合はどうかしら」とつぶやきながら食べる。  
先輩がちゅるちゅるすすりながら右手を突き出し親指を立てる。  
俺もすすりながら、少し硬めだけどまあこのくらいかなと思う。  
クリームソースが絡んでなかなかうまい。  
あっという間に平らげた先輩は「おかわりないの、ミノル」と言う。  
「はいはい、少々お待ちを」とキッチンへ戻る。  
「半分くらいでいいですか」パスタを一掴み取りながら聞く。  
「それでいいわ」と声だけ返ってくる。  
茹でながらソースも作る。  
「悪いね」と部長が顔をのぞかせて言う。  
「いえ、大丈夫ですよ」  
「飲み物は何がいいかい？」  
「そうですね、さっぱりストレイトティーがいいんじゃないですか」  
「了解」  
ああ、今日も平和だ。何か心配事があったような無かったような。まあいいか。

皆満足してまったりしているところで、部長が話し始める。  
「このあいだの話の続きでもないけど、知ることに権利があるように知らせることの権利もあるんだよねえ」  
「知らせる権利ってなんですか」と俺は訊く。  
「うん、それは表現の自由っていったほうが正確だね」  
「はい、わたしはもっと表現を自由してみたいわ」モエが発言する。  
なんのこっちゃ、それ。  
クスクス笑いながら続ける。  
「わたしいま、デザインをいっぱい書いているの。いつか作品にしていっぱい発表したいわ」  
ああ、そういう意味ね。

メグミが発言する。

「表現するって難しいことですね。私なんて思ったことの十分の一も言葉にできてない」  
すこし悲しそうな顔をする。

「そんなことないって。メグミはその奥ゆかしいところがいいんだから」とモエ。

「表現かあ。あたしも言いたいことをなかなか言えないタイプなのよね」と先輩。

ウソつけ。思ったこと全部言葉にしないと済まないタイプでしょうが。

「そうだね。誰でも自分の考えというものがあって、それを他者に知ってもらいたいという欲求があるんだね。それを自由に、言いたいことを言えることは、そういう環境というものは実はとても貴重なんだ。この国に暮らして自由になんか何でも言える、それを当たり前だと思っているけれども、本当はとても貴重なことなんだ」

メグミが話しを引き取る。

「私、海外にお友達がいてよくチャットしたりするんですけど、国によっては情報が制限されていたり言いたいことが言えないというところは多いと聞きます」

「へえ、チャットなんてやるんだ。意外だな」と俺が言うと、

「文字だとわりとスラスラ出てくるんです」と恥ずかしそうに言う。

そういうのはあるかも知れないなあ。

モエは思い出したように、「そういえば直接会ってるのにチャットで会話してるなんてこと聞いたことある」とすこし極端な例をあげる。

「うん、ともかく言いたいことが言える環境にいることは確かだ。その権利は保障されている。かつてとてつもなく苦労して勝ち取った権利ということだね」

部長は少し声のトーンを押さえてさらに続ける。

「それなら、表現の自由が保障されているなら何の問題も無いのかということ必ずしもそうじゃない。やはり問題はある。それは何だと思うかい」

問いかけにメグミがすかさず答える。

「自由だから何でも許されると誤解することではないでしょうか」

すうっと息を吸い込んで続ける。

「顔の見えない仮想空間でのやりとりでいつも頭を悩ませるのは一方的な誹謗中傷なんです。反論しても何倍にも返ってくる。あることないことあらゆることを書かれる。そんなときはとてもやりきれない気分になるんです」

悲しそうな表情で黙り込んでしまう。

俺は不謹慎にもその横顔を美しいと思った。なんだこの感覚は。

そんな俺の葛藤をよそに先輩が咆哮する。

「そんな卑怯な奴はとっつかまえて、ぎたんぎたんにしてやればいいのかよ」

今にも口から何か出てきそうな勢いで、

「全く何が自由よ。ふざけんじゃないわよ」と興奮まくっている。

「まあまあサヤカ君、落ち着いて」部長がなだめる。

「そういう奴はね、相手が手も足も出ないとわかっている相手にしかそういうことができなないんだから、まあ放っておくしかないんだよ。本当に怖いのは、それを口実に規制してしまえという考え方の方なんだ。これは口実さえあればなんだってかまわないから押さえつけることを目的とした考え方で、規制することが善という考えはいつでもどこで

も出てくるものなんだ」

「でも」モエは不満そうに言う。「それじゃやりたい放題は見過ごせてことですか」

「いや、そうじゃないんだ。確かに無法者を放っておいていいはずがないと思うよね。しかしね、注意すべきはその当たり前の感情に付け込まれて知らないうちに自由を奪われる危険があるということさ」あくまで冷静だ。

「まあ、突き詰めれば自由って一体何だということになって、一言では表現しつくせないことになってしまうんだけど、自由を奪われる危険をまず言うておかななくてはいけないと思うんだ。その、目に見えないもののことを言うておきたいんだ」

俺は少し混乱していた。意味がよくわからないのだ。

メグミが重い口を開く。

「悲しいけれどもそんな悪意はどこにでもあると思います。でも、どうすることもできない」

少し黙ってまた続ける。

「どうすることもできないことは、我慢するしかないってことですよ」

「なによそれ、おかしいわ」モエが叫ぶ。

「ごめん。すこし話しが飛躍しすぎて混乱させちゃったね」部長が悲しそうな目で言う。

「すこし話しを戻して、ええと、いわれなき誹謗中傷と表現の自由の関係だね。自由だから何を言ってもいいということにはならないからそんな中傷にどう対処するかということだね」

部長はしばし思案してから続ける。

「道徳ってことかな。つまりはこの中傷は道徳に反する。だから規制ではなく本人の理性に訴えるしかない」

先輩がゆっくりと反論する。

「理性に訴えてもだめよ。ただの愉快犯なんだから」

そうなのか、愉快犯なのか。

「愉快犯だから理性に訴えてもだめだって？ それは違うよ」

少し怖い顔で部長は決然と言い放つ。

「もっと性善説にたって考える必要があるんだよ。何が彼をそうさせるのかを知ろうとしなければ解決しないんだよ」

メグミは済まなそうに小声でつぶやく。

「何か私、変なこと言っちゃってすみません」

「いや、そんなことはないんだよ。とても大事なことを指摘してくれたと思うよ」

部長はまた優しい目に戻りメグミを見てそう言う。

モエが続ける。「そうね、感情的になっては意味ないんだよね。どうすればいいか冷静に考えなきゃ」

「ごめん。悪い。あたしのせいだ」先輩は少ししょげている。

俺は、何故か、何を言っているのか、言葉が出てこなかった。不甲斐ない。

部長が話しを続ける。

「いわれなき誹謗中傷をして、それに快感をおぼえるというのは大なり小なり誰にでもある感覚なんだよ。考えてごらんよ、生まれていままで悪口の一つも言ったことないなん

て奴いないだろ」皆うなずく。

「それでもそれほど大事にならずに済んでいるのは、やはり後悔する気持ちがあって反省する気持ちがあって、もう止めようとする自制心があるからだろ。顔が見えないことをいいことにひどいことする奴って普段はとでもそんなことをするようには見えない奴が多いんだよ。つまりは普通のどこにでもいる奴。ということは理性もあり道徳もある同じ人間なんだ。すごい当たり前のこと言ってるみたいで白けるかもしれないけど、その基本から出発するしかないんだよ。どんなにやりきれなくてもさ」

それはそうだけど、そんな原則論にとらわれていても何もできない気がする。悪い奴はとっちめないとというのが、社会はそんなに甘くはないのだというのが...

そこで俺は言うことを思いついて「それは社会の問題ということかな」と言ってみた。

「そうだねえ、大雑把な言い方をするとね」部長が少しほっとした顔で俺を見る。

「社会がそうさせる。じゃあ一体社会の何がそうさせるのか」

モエが発言する。

「そういうことする人って、とっとも淋しい人なんじゃないかしら。目立つことしてかまって欲しいんじゃないかしら」

「うん、そういうこともあるだろうね」

「私、そういえば心当たりあるかもしれません。ええ、あると思います」とメグミ。

先輩が話し出す。

「人間不信におちいつている場合もあるんじゃないかしらね。たとえば以前中傷の被害者であって、そのとき誰も助けてくれない。そんな体験をして今度は加害者になってしまふ。考えられることじゃない？」

俺は正直、あまり縁がなかったせいか、もうひとつピンとこないのだ。

「そういうこともあるだろうね。失望してしまうところから始まる。あり得るね」部長は慎重に言葉を選ぶような言い方で「現実社会でも同じといえるのかも」と付け加える。

「匿名性というものをキーにして考えてみると」先輩が提起する。「どこのだれかわからない存在に自分自身になってしまうことの新鮮さはすぐに飽きてしまうもので、そのあと孤独感だけが残ってそれに耐えられなくなって、それでも実際はどこのだれかわからないものの集合体でしかないところでしか接点をもてなくて」苦悶の表情になる。「不満だけが蓄積されて、しかしそのはけ口はなくて自分でもどうしていいかわからなくて、全てのものがとにかく憎くて」そして言葉を失う。

俺はなぜそんなごく一部の偏ったところへ入り込んで物事を考えることになったのか、正直まだ納得いかなかった。誤解を恐れずに言うとそんなことは例外的なことだと思った。「たとえそうだとしても、それはごく一部の個人の問題であって、あまり広い問題としてとらえるのはどうかと思います。社会全般との関係性が希薄のような気がします」と俺は言ってみたのだ。すると、

「そうかしら」と先輩が反応して「正直あたしもそういう気持ちがあったわ。でも実際問題日々仮想空間は拡大して近い将来だれでも日常的に関わることになると思う。そうなってからそこで起っていることを考え始めたのでは遅いと思うのよ」

モエが続ける。

「わたしもそう思うわ。これは仮想空間のことではなくて実際の社会で起きていることと

捉えるべきよ。孤独ってもっと身近な問題なのよ」

メグミも遠慮がちに続ける。

「私も同感です。いままではただ嫌だなあという考え方だったんですけど、よく考えてみると何だか助けを呼んでいるみたいな気がしてきたんです。悲鳴のような気がするんです」

部長がゆっくりと話す。

「今は特殊な現象と言えるかもしれない。しかしそこには大切なヒントが隠されていると思うよ」

何だこの感覚は。俺は取り残されているのか。

「まあ、ちょっと深刻な話になりすぎたわね。何よミノル、元気出さない」

先輩は俺の顔をのぞきこむような仕草をして言う。

気を使ってくれているのはわかるけど、なんだかしっくりこない。

しかし俺は「何言ってますか、俺は元気ですよいつも」とすこしおどけて見せる。

こんなの俺らしくない。こんな俺は認めたくない。そう思い込んだ。

屈折した数日を過ごしたあとの放課後、「ちょっといいかしら」とミレイ先生に呼び出される。

何だろうと職員室へ行くと、「これを見てくれる」とパソコン画面を示される。

どこかのサイトのようだ。

「これがどうかしましたか」

「これは学校の公式サイトなんだけれど、ここの書き込みを見てごらんさない」

へえ、こんなのあったんだ知らなかった。それは自由に書き込める掲示板ではなくて、投稿形式の、つまりは学校側でしか見ることができないものだ。平たく言えば意見とか苦情とかそういうたぐいが入ってくるものだ。

読んでみて、俺は愕然とした。俺に関するでたらめが事細かく書かれている。一体誰がこんなことを。

「心当たりあるかしら」

その悪意に満ちたものは、内容はでたらめだが、気になるのは俺の学校以外での行動を知ってるような雰囲気があることだ。とても強い恨みでもあって尾行でもしているような不気味さが感じられる。

しばし茫然としていたら、

「ともかくこれは削除しておきます。それにしても本当に心当たりないの？」

ない。いや、それよりも怒りが込み上げてくる。なんでこんな目に合わなくてはならないのかという怒りだ。文句があるなら直接言えばいいのに。まあ、順当に考えれば誰かのイタズラなのだろうが。それにしても経験したことの無い気分だ。

「あの、これは誰でも書き込みができるのですか」訊いてみる。

「いいえ、IDとパスワードがないと」ちょっと考えてから「職員とあなた達生徒にしか与えられていないから、もちろん何らかの方法で入手することが不可能ではないけれど、ともかく外部の人間ということは無いと思う」

「誰が書いたのか特定はできませんか」

「それはできないのよね。できないように、つまり何か情報を提供するとき自分がしたと知られたくないのが心理だから、あえて判らないようにしてあるのよ」

「これはそういう、ええと、密告をすることを目的としているのですか」

「まあ使い方にもよるけど、誰にも相談することができない悩みを言えるそんな役割を想定しているわけ。まあ今回はその趣旨に反することだと言えるけど」

そんなもんか。でもすっきりしない。

「これは想像だけど、あなたのことを面白く思っていない者がしたイタズラだと思う。心当たりないならしばらく様子を見るしかないかな」と先生は言う。

俺は職員室を辞去したあと、どこをどう歩いたのか記憶が無いまま中庭の自販機前でカップコーヒーの甘ったるさに顔をしかめていた。

一体誰が。そんなくだらないことばかり頭をめぐる。どうでもいいじゃないか。でも気になる。よく考えてみれば意図がわからない。普通は掲示板のように公開されているところに書くのがこの手のイタズラの定番だろう。そうだよ、あんな内容だれが見たってデタラメで、それを学校側でしか見られないところに書いたってあまり意味は無い。もっと信憑性のある書き方ならともかく、いや、待てよ、あんまりよくわかってないで誰でも見られると思って書いたのか。すると...いや、やめよう。考えてもしょうがない。

俺は部室へ向かう。旧館の影から人影が。あれ、あいつは。

吉田だ。そうか、あれからどうしたのかな。モエとは話できたのかな。

「ちょっといいかい」

「うん、どうしたんだい」

俺は自然に聞いたつもりだったのだけれど、多分深刻な顔をしていたのだろう、吉田は、「大丈夫？ 顔色悪いけど」そしてにっこり笑いかける。

俺の頭の中で、火花がぱちりと弾ける。もしかして。いやそんなはずは。

「実はね」吉田は周囲を見廻してから切り出す。

「あれからだいぶ迷ったんだけど、このあいだ思いきって」

俺はどんな顔してるのかな。

「告白してみた」

そうか。

「で、どうだった」平静を保って俺は訊いた。

正直おれの頭の中では別のことがぐるぐる回転していたのだが。

吉田は、にっこりと、笑う。「だめだったよ」

そうか。

「どうもありがとう。相談してよかったよ」手を差し出される。

俺は多分ぎこちない動作で握手したと思う。

「これからもよろしくね、じゃあ」去っていく。

俺はその後姿をぼんやりと見送る。そして、気づくのだ。

間違いなく俺はあいつのことを疑った。たとえ一瞬でも疑った。

恥ずかしい。俺は猛烈に自分を恥じた。

俺は思いあがっていたのだ。無意識に周囲を一段下に見ていたのだ。

しかし、俺なんてなにも出来ないじゃないか。つまらない男だ。

暗い階段を上る。どんな顔して？

部室へ入ると、奥からがちゃがちゃ格闘している音。いい匂いがする。

部長の姿は、無い。モエもメグミもない。どうしたんだろう。

キッチンのをぞくと先輩がめずらしく何か作っている。

俺の姿をみとめて、

「遅かったわね。いまチャーハン作ってるから。食べるでしょ」

俺はもう何も言えなかった。

「さあ出来たわよ」

大盛りのチャーハンを一つ持って、先輩は俺の前に腰掛ける。

目の前に出されたそれは、多分ケチャップで味付けされた言うなれば卵無しのオムレツのようなものだ。赤いウインナとちくわときゃべつとにんじんと…。

無言で頬張る。少しコゲがある。無心でがつつく。

先輩は何も言わずただ見守っている。

一気に平らげる。のどがひりひりする。

何故だろう、話したくて堪らない。

「すいません、俺」

先輩は目で促す。

話す。

先輩はただ黙って聞いてくれた。

「そう。でも気にすることはないわよ」とだけつぶやく。

少し気分が楽になる。

これでいいんだ。これで。

「まあ、いいことばかりじゃないわよ。大丈夫よ。うん」

少し間をおいて、

「ミノル、あんたにはいろいろ頼むばっかで悪かったわ。これからは言いたいことあれば言っていていいから、遠慮しないでいいから」食器をまとめて立ち上がる。

「あっ俺やります」

振り返って「いーからいーから」とキッチンへ消える。

手持無沙汰にしていると、部長がモエとメグミを連れて入ってくる。

「やあ、ごくろうさん」なにやら大きな箱を運んでいる。何だろう。

「これかい？ 実はねメグミ君がね電子レンジをね」

「こっちはオープンよ」モエが補足する。

メグミが恥ずかしそうに「使い古しなんですけど…」と言う。

俺も手伝ってキッチンへ運び、冷蔵庫の上に設置する。オープンは流しの下へ。

「悪いわね。これでさらに設備が充実したわね」先輩はうれしそうだ。

一体感みたいなのが出てきたのかな。そう思う。





## 第四章 部長が留守だと何だかね



『資本主義社会というものは一体何であるのかということ話し合ってみてはどうか。すごく身近な話題だし、なにより主題がはっきりしていたほうが話も弾むんじゃないかな』とそれだけを言い残して、部長は出掛けたのだ。

今週一杯、全国から雄弁部が集まり『ディベート・オブ・ザ・イヤー』を決めるのだそうだ。

ウチの学校にはディベート同好会があるのだが、そこから助っ人として頼まれたらしい。

「部長はね、意外と人気があるのよね。ちょこちょこいろんなお誘いがあるのよね」

なるほど。それにしても何だか宿題を出されたみたいだな。

確かに俺達だけだと雑談だけで終わってしまいそうだからなあ。

先輩が進行して、俺達三人が意見を出すことでやってみようということになった。

「それじゃね…」先輩はおもむろに宣言する。

「とりあえずはレンジでチンするリゾットをいくつか集めたから食べ比べてみましょ」

一同賛成して準備にとりかかる。まあ、出来あがりをお分けするだけなのですが。

「これは、ごはんが少し硬いかな」

「これは味付けはいいけど具が少しさびしいわね」

「まあ！ 変わったお味。ええと、たらこマヨ味ですって」

俺は感心していた。手軽に出来てけっこううまい。インスタント恐るべし。

これなら手軽にできるから、電子レンジをもう何台か手に入れば、昼食の殺人的争奪戦をくりひろげる学内の独占企業たる購買部に対抗して起業できるかもね。

問題は単価だけど、必ずその日に売れる数が予想可能なら賞味期限ぎりぎりのやつを安く仕入れれば。

でもなあ俺は考える。はたしてうまくいったとしても、そのビジネスモデルを真似してまたたく間に競合他社が乱立して価格競争に巻き込まれて、急激な利益率の低下を見るであろう。

やっぱ俺が思いつくことなんか大したことないんだよね。

まあ、それはともかく、今度から昼飯に導入することにしよう。うん。

「ミノル、さっきから何にやにやしてんのよ、気味悪い」先輩は顔をしかめる。

俺は、笑い話として考えていたことを話してみた。

「まあ、現実はそのとおりだね。それに校内で商売するってわけにもいかないし」

先輩はそう言ってから、

「でも、社会の実情を端的に指摘してるねって、部長なら言うだろうね」

「それって資本主義社会につながるということですか」とモエ。

「そうそう。自由競争ということよね」

なるほど、無駄な妄想というわけでもなかったか。

「資本主義って普通に言うけれども、そうでないものもあるのですか」とメグミ。

「ほら、社会主義とか共産主義とかあるだろ」と俺。

「あと、無政府主義も」と先輩。アナーキズムってやつか。

「また話を難しくする。あんまり広げるとわかんない」とモエ愚痴る。

「そうね。資本主義社会にしぼって話を進めましょ」

先輩は立ち上がって続ける。

「資本って言えばお金のことを思い浮かべるけど、本当はお金に限らないのよ」

皆うなずく。

「物とか労働力とかも資本だから、それを必要に応じて交換することで成り立つ社会が、とっても大雑把だけど、それが資本主義社会ってことよね」

そうなのだ。そして俺は多分労働力をお金に交換してそれで必要な物を手に入れる典型的なかかわり方をすることになるのだろうな。

その他大勢の何の取柄も無い存在として社会に埋もれていく。なんかせつないなあ。

先輩はそんな俺の顔をのぞきこんで、

「何かしんみりしているわね」と言う。

そりやしんみりもしますよ。この先、大したことも無さそうだとわかれば。

「ともかく、それが今生きている社会だとすると、資本を持っている者が一人前の社会人ということになるのよ。十分な資本を持っていない者、お金のことだけ言ってんじゃなくてね、たとえば労働力を十分に持ってない者は社会的弱者ということになる。子供はまだ働くことができないから社会的弱者として保護の対象になる。だいたい親がその保護者となる」

俺達はまだ子供の部類になるわけだよな、社会的には。

でも、バイトして稼ぐことはできるからまるっきり子供というわけでもないか。

「それで、あたしたちは何を考えればいいかという、まもなく社会人として資本主義社会のただなかに放り込まれる、いや、飛び込んでいくその場所が具体的にどういふところか知っておこうということ」先輩はびゅっと右手を突き上げて決め顔になる。

「そうよねえ、わたしは夢をかなえられるかしら」とモエはつぶやく。

すかさず先輩は、

「おお、夢があるっていいわね。なにになに」と聞く。

「わたしの夢は、世界的デザイナーになることです。でも親が反対していて」肩を落とす。

「そうだったわね。親が反対するってどういうことよ。夢はでっかいほうがいいじゃない」げげんそうな顔をする先輩にモエは言う。

「そんなかないっこない事考えてないで、現実を見ろっていうんです」

へえ、めずらしいな。いまだき夢があるってほめられていいことだと思うけどな。

「ご両親とも？」

「ええ」

「そう」

メグミが遠慮がちに付け加える。

「私、モエちゃん家によく遊びに行くんですけど。とても厳しいお家で。ご両親は一人暮らしをさせたくないみたいなんです」

モエはこくりとうなずく。

「でもわたし、絶対説得してみせるんだ。あきらめたくない」

先輩は少し慎重なしゃべり方で、

「まだ先のことだから、ゆっくり時間をかけてやれば大丈夫よ、きっとね」

「はい。がんばります」明るい顔で言う。

俺なんてまだ何も考えて無いや。はは。

「メグミはどうなの。将来どうするの」

先輩に聞かれ、メグミは苦笑する。

「私は、お父様の言いなりですわ。仕方が無いんです」

「どういうことよ」

「前にもお話しましたがけれど、私はひとり娘だから、高校を卒業していける範囲の短大とかに行き、そのあとお父様のすすめる相手と結婚してということになるんです。私に選択の余地は無いんですわ」あきらめ顔で言うのだ。

今度はモエが補足する。

「実は、メグミちゃん家ってこの高校へ進むことも大反対だったんです。それをどうしてもわたしと同じ学校に行きたいってがんばって」

ふうん、みんな大変な思いしてるんだなあ。俺なんか適当に生きてるのになあ。なんか恥ずかしいなあ。

「そうかあ、いろいろあるのねえ。でもあたしだって…」先輩は、あれ、どうした？

何かをふっきるような言い方で「まあ、まだ決めなくてもね」呟く。

メグミはふっとため息をついたあと、

「でも良かった。だって今は毎日が楽しいんですもの」

「そう。よかった」

先輩は一言それだけいって、モエとメグミの顔を交互に見てうなずいた。

その日はなんとなくそのままお開きとなった。

俺は自宅で数学の宿題と格闘していた。時計を見るとそろそろ寝ないときつい時間だが終わらないからしかたない。

そのときドアをとんとんとノックする音。かあちゃん夜食でも作ってくれたのかな気を使わせて悪いなと思った。

しかし「おい、起きてるか」の声で親父だとわかる。何だよ何の用だよと思う。

「起きてるよ」短く答える。

「入るぞ」と言いながらすでにドアは開いている。全くどういうつもりだ。

「勉強か」「そうだよ」「そうか」「何?」「学校はどうだ」「まあまあだよ」「そうか」「…」

何か言いたいのかな。

「あまり夜更かしするなよ」「これ終わったら寝るから」「そうか」

そのまま出ていってしまう。

何だったんだ一体。

気分がそがれて宿題に集中できない。余計な思いが頭を駆けめぐる。  
親父と話したのはいつ以来だろう。  
朝はだいたい顔を合わせることは無い。会社員の親父は俺よりさらに早く家を出てしまう。  
夜はだいたい遅いし、休みもほとんど家に居ないし。  
そんなことだから、会話が無いのも当たり前か。  
それにしてもと思う。子供のころは休みにどこか連れていってくれたりしたっけ。結構会話もあったような気がする。  
まあ、どこの家でもこんなもんだろうとは思っけど。  
別に避けてるわけでもない、嫌ってるわけでもない。  
でも何だか自然に話せなくなったんだよな。何でだろうかなあ。  
そんなことを考えているうち、俺は気絶するように寝ちまった。  
不思議と身体に染みついた習慣なのか朝は目覚まし無しでも起きられてしまう。  
急いで支度して部屋を飛び出す。親父はもう出勤したあとだ。  
走って駅へ向かい、いつもの電車に飛び込んで席を確保できて、ああやれやれと思ったところで、ああしまった宿題半分もやってないや学校着いてからやるかでも間に合うかな。

部室に顔を出すとめずらしいことに全員集合なのである。これ幸いなり、宿題を手伝ってもらおうことにしよう。  
「しょうがないわね」と先輩は難解な数式をすらすら解いてしまう。意外といえば失礼だが、けっこう頭いいんだ。  
「あのね、これでもあきんどの娘よ。数字には強いんだから」何か違うような気が。  
宿題をさっさとかたづけた俺は、モエとメグミがいそがしくやっている部屋の模様替えを手伝う。もともと飲食店風の造りでしゃれた内装なのだが、少々古いということで雰囲気を変えてみようということなのだ。  
予算は限られているが、あちこち回って集めた材料をモエのデザインで飾り付けていく。ちょっとしたことで印象は変わるものだ。  
「まあ、こんなものでしょ」「かわいい感じになったね」と二人はご満悦。  
「部長の留守の間にやっても平気なんですか」といまさら俺は先輩に訊く。  
「大丈夫よ。うん、いいじゃない」と気に入ったようです。  
すこしゆっくりもしたいところですがそろそろ授業も始まるということで解散です。  
後ろ髪引かれる思いで部室を後にする。何かここでの時間がメインになりつつあるなあ。どこからか甘い香りが漂ってくる。知らぬ間に季節は動いて空気が軽く感じる。やがてあのまわりつくような湿り気を帯びることになるのであろうが。  
影は丸みを帯びている。空の高さが少し高くなったような気がした。

「クラス委員の選出をします」

午後のホームルームの時間、ミレイ先生はすこしけだるい感じで切り出すのだ。  
だらだらしてしまいそうだ。何しろそういう制度があることは誰でも知っていることで

あるけれども、それに積極的に関わろうとする者はほとんどいないのだ。

どういう訳かはわからないが、数週間遅れての選出作業だ。お互いの性格とか人間関係とかははっきりするのを待っていたのかもしれない。

クラス委員長はサッカー部の青木、こいつは背が高く、快活で性格も申し分ない典型的なさわやか系で、皆からの推薦で「しょうがねえな」と快諾する。

女子人気が高いバスケット部の橘が副委員長というところまではすぐ決まった。あとの生徒会クラス代議員を誰にするかはなかなか決まらなかった。はっきり言えばもう人材がいないのだ。

だいたい人気があって責任感もある人材なんてそう多くない。

皆顔を見合わせるばかりである。

予想どおりの展開で、こういう時は普段目立っている奴に押し付けるという消極的選択に陥りがちなのだ。

まずいなあとひやひやしていたところ、ミレイ先生は意外なことを言う。

「じゃんけんでいいか」

さすがにそれはちょっとということになり、女生徒が「じゃんけんより投票にしましょうよ」と提案してそれに落ち着いた。

俺は、じゃんけんなら偶然型、投票なら押し付け型と分析してみた。どっちのほうが俺は有利なのか。そして、押し付けられることを覚悟するかという気になった。

それほど生徒会には関わりたいとは思わない。あの、部活届のときの印象があって、すこし距離を置いておくほうがいいかなと思う。

でも、選ばれたらそれはしょうがないことだからやるしかないのだ。

「さっそくで悪いんだけど、進行お願いできるかしら」委員長の初仕事です。

「ええと、今用紙配るから、一人だけ名前書いて、そうだな、これに入れてもらおうかな」と菓子箱を教卓に出す。

「見えないように折ってくれよな」

さて、手元に届いた用紙を前にして、悩むのだ。

はっきりいって誰でもいいやと思っているときって、かえって難しいものだ。

心の中でクラスの面々を高速検索する。決め手が、無い。

周りはもう書き終えて投票を始めている。あせる俺は、えいと一つの名前を書いてさっさと投票することにした。もうあとは野となれ山となれだ。

全員終わったところで、開票が始まる。黒板に正の字を書いていく。

結果に俺は後悔することになる。

名前の挙がった十一名のうち、一票差で俺に当たってしまったのだ。平均三票の低率の結果はやはり誰に入れるかというところで適当にやったことを想像させるのだが、実は、俺は自分の名を書いたのだ。

もちろん、自分がやりたいからではなく、誰の名前も書けなかったのだ。こんなことになるなら白票にすれば良かった。事実、白票は二票あった。そんな後悔をしながら、四票のうちあと三票は一体誰がと考えたが、すぐ馬鹿馬鹿しくなった。そんな問題じゃないのだ。

引きうけることにした。もちろん断る理由も権利も無いのだが。

まあいいさ。代議員といっても要は連絡係みたいなもんだろう。そう俺は自分に言い聞かせるのだ。

ミレイ先生は何故か心配顔で「これで決まりね。それじゃよろしくね」と言った。

「いいんじゃない。いろいろ教えてもらおうかしらね」と先輩はイタズラっぽく笑うのだ。生徒会とは確執があることを気にして、一応言っておいたのだ。

「それにしても、このうどん、意外にコシがあるわね」

生タイプの新製品を囲んで品評会です。

「出汁が液体タイプだから、深みがあるのよ」とモエがおいしそうにする。

「そういうものかしら。具材はもうひと工夫ほしいところですけど」

フリーズドライは簡単でいいけど、とメグミは思案顔なのだ。

「そこがインスタントの悩ましいところなのよね。ミノルはどう思う」

「そうですね、どうせなら生タイプの具材って出来ないんですかね」

「そうねえ、保存が意外と難しいのかね。冷凍に限定すれば出来るかもしれないけど」

待てよ、フリーズドライも凍らせて乾燥するわけだから、要は戻すときにどれだけ生の感触を再現するかということだよな。

「まあ、そこらへんはこれからの期待ということで、お茶にしようか」

先輩は移り気なのである。

「ええと、先輩。コーヒーにしますか、それとも…」

モエが「ああそうわたし、家からコーヒー豆持ってきたからコレにしようよ」と提案。どれどれと、いつもは部長が煎れてくれることの多いコーヒーメーカーを操作して、そうかその前に豆を挽かないと。

「えっとね、ミルはそこの棚に。フィルターも入ってるから」先輩が指示する。

豆を挽くと、なんともいえないいい香りがする。

「けっこういい豆なんじゃないの」先輩は少し心配顔でモエを見る。

「えへへ、父さんの秘蔵のやつよ。大丈夫、ちゃんとかわってきたから」

コーヒーメーカーをセットして、出来あがりをしぼし待つ。

「そういえば先輩のクラスからは生徒会に誰がでるんですか」

「うん、ウチはシズカと渡辺が生徒会役員だからね。兼務じゃなかったかな」

「ああ、あの目の鋭い女性とけっこう当たりのきつい人ですね」

先輩は少し声を落として、

「うん、あの二人とはいろいろあるんだけど、根は悪い奴じゃないのよ」

「ええ、そう思います」

「あの二人は佐伯さんに心酔していて、ただ付いていっているだけ。佐伯さんは切れ者だけどすこし得体のしれないところがあるのよね」

「そういえば」モエとメグミが美しきハーモニを奏でる。

「もとは一緒に活動していたんですよね。方向性の違いで袂を分かつことになったと」興味深々と訊いてくる。

先輩はさらに声をひそめて続ける。

「部長はああ言ってたけど、あたしの意見はちょっと違うのよ」



「どういうことですか」

「あたしは、林原先生の影響もあると思うけど、それよりも本当は部長と佐伯さんのライバル心が根本にあると思うのよ」

俺達は黙って聞く。

「もともとあの二人はとても仲がいいというかウマが合うというか、二人で協力して夢を実現したいと思っていたのよ」

「夢って何ですか」

「そうね。一言でいうと政治家ってことね」

なるほどそういうことか。直接行動とかいう話だったよな。

「でもね、やっぱり同じ目的とはいっても本当のところ何を実現するのかというところは違うものなのよ。政治家ってたくさんいるけど、同じ目的を持っているといっても意外とバラバラでしょ」

言われてみればそんなものかもしれない。

「政治って何だろうっていうとき、定義はいろいろだけど、結局は現実にある社会の欠点を克服するための仕事じゃない？ その欠点って実際は立場によって見え方が違ってくると思うのよ。だからどうしても対立が出てくるのはしょうがないところなのよ」

まあ、そうなんでしょうねえ。

「だからね、根本にあるのは、社会の見え方の違いが修復不能なほどの対立を生んだ。それが一番だと思うのよ」

「じゃあ俺は訊いてみる「先輩と部長はその同じものを見ているということなんですか」先輩は沈黙する。

重い空気をはねのけるように、「あっ、コーヒー入りましたよ」とメグミが明るい声で言ってくれる。「わたしやります」とモエも空気を変えようとつとめて陽気に振る舞う。

俺は瞬間的にやってしまった感を飲み下し、「やあ、悪いね」とか言ってみる。

先輩は「そうそう、甘いものでも」と立ち上がり戸棚に頭を突っ込んで捜し始める。

準備できたところで、他愛のない話題を始める。

「休みとかどうしてんのよ」とか「このあいだ映画見に行って」とか「そういえば最近出掛けてないなあ」とか「ええっ、ああゆうの好みなんだ」とか毒にも薬にもならないことを話しつつける。そうすると、この時間がいとおしくなる。そんな感覚が自分にあることに驚きながら、ぼりぼり梅の歯ごたえ、これが堪らんと考えたりする。こんなんで、いいのだ。

「なあにいぬうぬるぬれねえ」

古文の授業中、俺は窓外をぼんやりと見ている。遠くに見える稜線は半ば張りついた水蒸気に隠れ、墨絵のような印象を与える。じめじめした季節がそろそろやってくるのかと考える。はたしてあの山の向こうは降っているのだろうか。

桜野市は有数の山脈に挟まれた場所にあり、吹き抜ける季節風の影響が大きく、季節感を印象づける場所である。

冬寒く夏暑いはっきりした気候ということだ。その自然を生かした甘い果実を作る農家

があのかすんでいる山裾にたくさんあるのだ。

この学校がある場所は中心から外れた住宅地の中にあるのだが、実は広大な公有地にぼつり建つ学校の周囲を増殖するマイホームがいつの間にもやら取り囲んだのだ。ミニ電車ももとはこの先にあった工場の引き込み線が起源なのだ。

そんな、大して意味のない情景描写にふけてしまう俺は、すでに現状に飽きているのだろうか。あのドキドキ感が懐かしい。

空気がつんと鼻の奥に染みるような緊張感。脳が新しい環境に対応しきれず、しかしながら情報は容赦なく五感から流れ込んでくる。ひどく息苦しく不安な日々は、しかし、未知の状況に対する防衛本能が、神経をすり減らす過程で何を注意し何を無視すればいいか学習し、重要なものを前景にそうでないものを背景にすることで心理への負担を減らすのだ。それが日常化というものだ。合理的反応がもたらすものが、同時に感動を消去していく。この体験を繰り返し全てを経験済みの過去として閉じ込めることが大人になるということだと、そう俺は理解しているのだ。今はその途中ということだ。

「川合、続き読んでみる」油断していたところを指名されてしまう。

俺は慌てて立ち上がり、「すみません、聞いてませんでした」と告白する。

どっと笑いが起る。先生は肩をすくめる。

まあ、このクラスもだんだんこなれてきているということだ。

こんな日々がいつまでも続けば気楽でいいのだが、そんなことはありえないことは知っているんだ。モラトリアムはいつかいつぜんばっさり切断されるのだということ。

放課後、生徒会の会合があるというので急いで会議室へ向かう。

初回は顔見せくらいだろうとたかをくくっていたのだが、開始早々に話は急展開を見せた。

「生徒会の改革を考えています」

生徒会副会長の佐伯は、お決まりのあいさつを終えたあとに、代議員を見渡したあとで宣言したのだ。

一体どういうことなのかという一同の空気を制するような厳しい声で続ける。

「私達には自治権があります。中央政府と地方自治体の関係と同じように、一定の規制の下ではあるけれども、私達が考え決め実行する権利というものを持っているのです。しかしその自覚があると言えるでしょうか。ただ何となく日常を送ることに満足して、怠惰な前例踏襲主義に陥っているのではないのでしょうか」

熱を帯びてますます声を張り上げる。

皆、ただただ呆気にとられている。

「このままでいいのだろうか。私達生徒会執行部はこの現状に危機感をいただいています。生徒会はもっと積極性を持って活動すべきではないかと考えています」

俺は本能的な嫌悪感をいだいた。この押しつけがましい物言いは何だ。

代議員の一人が発言を求める。

「ちょっと一言いいでしょうか」三年生の女生徒が立ち上がり、静かに話し始める。

「私は現状に何の不都合も感じません。これまでも自由にやってきたのだしこれからもそ

うすればいいと思います。自治権とか言うけれど、そんなめんどくさいことを持ち出さなくてはならない理由がわかりません。前例踏襲って一体なんですか。変わらなければならぬことなどなにひとつないと思います」

会場の雰囲気を変換する意見だと思う。皆黙っているけど心の中でそう言っているはずだ。

「何を言っているの」叫ぶように発言する者がいる。皆の視線が集中する。

生徒会書記の城山シズカだ。

俺はあれと思った。この前話したときと少し印象が違うのだ。

鋭い目つきや断定的な態度は変わらないのだけれども、何か違うのだ。

そういえば、佐伯も自信満々なところはそのままなのだが、もっと余裕というかそういう雰囲気が感じられた記憶がある。俺の思い過ごしだろうか。

シズカは悲壯感を漂わせながら発言を続ける。

「私達はこのままではいけないのよ。これまで自由にやってきたですって？ 何もやってないじゃない。無関心になってめんどろなことを避けているだけじゃないのよ。そんなの自由なんて言わないのよ」

会場の空気が一気に白けた。一体何を言っているんだ。

一人の男子生徒が立ち上がり発言する。

「あの、まだ掛かりますか。いいかげんうんざりするんですけど」

皆、どっと笑う。

別の男子生徒が続ける。

「お前達だけで勝手にやればいいじゃないか。俺達はまきこまれたくないんだよ。迷惑だよ」

最初に発言した女生徒が静かに話し始める。

「だいたい、生徒会執行部は今月で任期切れじゃない。改選されるかどうかわからないのに、あなたたちにそんなこと言われたくありません」

佐伯が大声をあげて割り込む。

「いいかげんにしろよ。俺は建設的提案をしたまでのことだ。任期切れはわかってる。今度の選挙には現執行部全員立候補するよ。俺は全員当選すると思ってるよ。まあいい、それからでいいんだ」

最後はまるで自分に言い聞かせるような感じである。

何かおかしい。こんな皆の反感をかうような言い方をすれば自分達に不利に働くことは明白なのだ。そんな計算もできないほどとは思えない。やはり普通じゃない。一体何が彼らをそうさせるのか。

そうさせる？ そのとき俺の頭の中にある人物の姿が浮かんで、消えた。それは考え過ぎだろう。いくらなんでも。

会合は混乱したまま散会となった。

「ふうん、別にいいんじゃないの」先輩はあまり気にするふうでもない。

俺はさきほどの会合での違和感を話してみたのだ。

「奴らのことはよく知ってるけど、そういう空回りする感じは前からあるのよ。何も心配

するほどのことではないわ」

モエは不思議そうな顔で、ただ聞いている。

「でも、何か気になる話だと思います。何か起こりそうな」メグミが心配そうに言う。

「大丈夫よ。まあ奴らの言いたいこともわからなくは無くない。流されてる感というのはあるんじゃないの、実際」

先輩はそう言うと、烏賊ゲソをむしゃむしゃ食べる。

「何をしたいのかははっきりしたところで決めても遅くないということでしょうか」

モエがそう質問すると、

「うん、それでいいと思うよ。あまり先入観を持たないほうがいいわね」

先輩の言葉に、俺はやはり考えすぎなのかと思う。今日感じだと、大した事をやろうとしても皆の反対がありそうだから、それを信じればいいことなのだ。

「そうそう、このところすっかり井戸端会議化してるけど、そろそろ今週のテーマを話し合しましょう」

先輩は思い出したように話し始める。

「ええと、資本主義社会って実際はどういうところなのかという話だったわね」

記憶をたどる。

「それで、これから社会に出る私達は、まだ一人前の社会人ではないというところ、つまりまだ親の保護の下にあるというところまで話したのよね、ミノル」

「ええ、そういう話だったと思います」

先輩は話を続ける。

「前にも言ったとおり、資本ってお金のことだけじゃないんだけど、実際はお金のことなのよね。社会が広くなればなるほどお金の確かさに依存しなければならない。価値というものをお金に換算することで計ることの確かさね」

モエは、「そう考えると何かつまらないとを感じるのはなぜかなあ。お金の無いもののひがみなのかなあ」と力なく笑う。

「お金に換算できないものもあることは確かだし、お金が全てということはないんだよ。資本主義社会って言ったってそれは社会の一つの顔なのであって、全てじゃない」と俺。先輩は慎重に言葉を選ぶ。

「うん、誤解してほしくないのは、お金が全てだという結果を言いたいんじゃないんだ。現実としてお金に換算することのわかりやすさが日常化すると、お金に換算できないものがあることはわかっているけどそれがどれほどの価値があるのって考えたとき、よくわからなくなることがないかということ」

メグミは不思議な顔で、

「お金で計れないものの価値は、かけがえのないものということではないのかしら」

「そうね。ただそのかけがえのないもののうち、もともと価値を計る必要のないもの、個人的なままでいいものは考慮しなくていいものとして除外するべきね。あくまで社会で交換されるものに限定して考えるほうがいいわね」

その考え方でいうと、お金に換算されない価値というものは一体何を指すのだろうか。

俺がその疑問をぶつけてみたら、

「そうね、たとえばこういうのはどうかしら。努力することってとても大切なことだし、

それ無しには何も生まれないけど、結果についてはその価値をはっきりさせることができるのに対して、どれだけ努力したとしても結果につながらなければ評価はされない。せいぜい慰めの言葉をかけられるだけ。だけどその努力がいつか結果につながる可能性はあるわけだから価値がないとも言えない」

なんかよくわからない。

俺の顔を見て「それじゃね」と続ける。

「たとえば美術品とか嗜好性の高い品物ってその価値はわかる人にはわかるけどってところがあるでしょ。そしてそれは実際に売買されている。私達はお金に換算してその価値を判断する。しかし本当はいくら高い金額で評価されていようが自分が欲しくないものは価値が無いわけだから...」

俺はすかさず反論する。

「それは何も限定した品物だけの話じゃないですよ。需要と供給によって金額は変わるものだから価値はそれですべて決まると思う」

先輩は困った顔になって、「うーん、そうか。なかなか難しいわね」とため息をつく。

俺は、前提を変えてみればいいと思い、

「資本をお金というふうと考えて成り立っている社会がどうなるのかという想像をしてみるから考えていけばいいんじゃないでしょうか」

「そうね、発想を変えてみましょう」と賛同する。

モエが「お金がもたらす不幸っていうものがあるなら、それが放っておけばどうなるか考えてみるのはいかがでしょうか」と提案する。

「たとえば、価値をお金を基準にして計ることに慣れてしまったことで感覚がマヒしてお金に換算できないものをよくわからないものとして軽くみることが起っていると思うの。これを突き詰めればお金になることにしか興味を持てなくなると思うの。資本主義社会の不幸な面ってそういうことではないでしょうか」

「でも」俺は反論する。「もともと自由競争が自己責任のルールの上で成り立つわけだから、それに敗れた者の不幸をどう救うのかということをもっと考えるべきじゃないのかな」「何かかみ合っていないんじゃない」

先輩は話を整理しようとする。

「モエが言いたいことは資本主義社会が人の心に及ぼす負の面を、ミノルが言いたいのは人の命にかかわる危険をどうすればいいかということよね」

まあ、そんなところでしょうか。

「どちらも負の部分指摘しようという考え方では同じだから、両方とも考えなければならぬことよね。他に何かあるかしらね」

メグミがため息まじりに提案する。

「私達には少し手にあまるテーマではないでしょうか。人の心に及ぼすことはよくわかると思います。でも自由競争とか自己責任とか言うとしりゃわかりにくい話だと思うんです」先輩は困って言う。

「そうかあ、深まらないということかあ」

俺は「少し抽象的になりすぎましたかね」と頭をかいた。

俺の想像力を超える話ということなのだ。

先輩は「それじゃこの話はここまでにして。まあ、そういうこともあるということよ」歯切れの悪い言葉でしめくくる。

俺は「今日結論を出さなくてもいづれいい考えが出ると思いますよ」と言った。

「うーん」と言ったきり部長は黙り込んでしまったのだ。

留守の間のいきさつをかいつまんで話したのだ。

俺は、やはりまだ部長がいなくてももうひとつなんだと痛感していた。

先輩には悪いけど。

俺達はまだまだ未熟だと思う。

だとすると、何が不足しているのか知りたい。何が足りないんだ。

そんな考えをまるで見透かすように、

「想定を甘くすることには何の利点も無いってことさ。もっと踏み込んでもっと極端な前提を置いてみることさ」

部長は少し考えて、

「そうだな。資本主義社会は自由競争で自己責任の世界なんだということは本質をついている。それは無慈悲なものだよ。社会的弱者は置き去りにされる。だからこそ国家権力は本来自由で結果責任のルールに介入して弱者を救済する。資本主義社会はすでにひずみを持っている。では、そんな主義は止めてしまえばいいかという現実はそうならない。それは、ひずみの一部を修正すれば大丈夫だと共通認識があるから。今のところ資本主義を超えるものは発明されていないのだからそれを続けるほかない」

一気にそこまでしゃべると一同を見廻した。

「ここまではいいかな」

皆うなづく。

「その現状をふまえて、今新たな問題としてとらえることは、金が全てであるという考え方が心におよぼす影響ということだけど、そこにあるのは金で計れない価値というものを信じる考え方と金は心を惑わせる怖いものとして嫌う意識があると思う。前者はともかく後者はもうすこし踏み込んで考える必要がある」

部長はめずらしく乱暴な言い方を続けるのだ。

何だろう、よっぽど腹にすえかねることであったのかな。

部長は皆が真剣に耳を傾けている様子を見廻すと、ふっと表情をゆるめる。

「ごめんごめん。一人で喋っちゃってるね。そうだ、モエちゃん、おいしいコーヒー豆持ってきてくれたんだってね。僕にもごちそうしてくれるかな」

空気がゆるむ。

俺がコーヒーを煎れて、先輩は戸棚からイカフライを出してくる。

「檄辛だから気をつけてよ。それからこっちはからしマヨネーズ味」

こぼこぼとドリップする様子を見つめながら俺は考えていた。

足りなかったのはこの強引さなのだと思う。

もちろん強引に持論を発表したあと、それに対して自由に意見しあうことが保障されているからこそなのだが。

先日の生徒会を思い出す。

彼らに意見を聞く姿勢があるのなら何の問題も無い。それはこれからわかるであろう。

そうだよな。表現をすることの自由が保障されているのだから、まず言いたいことを言えばいいのだ。無意識に遠慮があったということなのだろうが、それは正しいこととは限らないのだ。言わないことの配慮が常に正しいわけではない。

そうであるなら、どういうときに言うべきことを言えばいいかを考えなければならない。そういうことを判断できる力というものが要だということなのだろう。

イカフライをかじりながらコーヒーを飲む。

「うん、これはおいしいね」部長はモエを見てうなづく。

モエは照れて舌をチロリと出す。

一息ついたところで部長は話の続きへと戻る。

「金というものをマイナスのイメージでとらえることは本質を見ない行為だと思う。なにしろ現実には金の量が力を表しているのだから。どんな方法で手に入れたかではなくどれだけ金があるかで決まるんだ」

メグミが悲しそうな顔をする。

部長は苦笑して、

「もちろん、非合法な行為を認めるというわけじゃない。言いたいことは合法的であれば物を売買してもうけた金も、金で金を生んでもうけた金も同じだということ。量の問題でしかないということ」

「でも」と俺は切り出す。

「金だけで全て決まるというのも極端すぎませんか。たとえば才能だとかそういうものも重要な要素だと思いますけど」

部長は言う。

「うん、でもねそれは、金をなぜたくさん持っているのかって考えれば簡単な話で、才能があるから金の量を増やしたわけだからね。金もうけの才能ってことだね。もちろんこの世にはそのほかの才能を持っている奴もいるわけだけど、才能はあるけどそれを具体化する金の無い奴はどうするかって考えると、金持ってる奴に投資をお願いするわけだろ。そうしたとき最も大事なことは投資した金が返ってこないことは論外だとしてあとはどのくらいの利益が揚がるのかで決める。すると利率が第一でその他のことは二の次ということだから、どんなにすばらしいことであっても、金もうけにつながらないことは価値がないということなんだ」

モエがたまりかねて発言する。

「それだけじゃないと思うわ。現実には社会のために利益を度外視してやっている例はいくつもあるはずよ」

部長は続ける。

「言うとおりのだよ。でもそれは資本主義社会の原則ではないことなんだ。社会的弱者を国家が救済することと同じように、それをする別の理由にもとづいていることなんだ」

モエは黙り込む。

「さあ、それじゃその現実をいかに生きるのかというところから始まるというわけだね」

部長はしかし、少々疲れたような顔をしている。

「資本主義社会の正義がいかに多くの金をもうけるのかということだと結論して、そのう

えで何をすればいいのか、できるのか」

俺も何だか疲れてしまった。先にあるものはまだわからないことだらけだ。



## 第五章 俺の浅はかな試み



生徒会役員選挙は、旧執行部が全員当選するという結末になった。

佐伯は会長になり、城山は副会長になった。

実のところそれは、立候補が他から一人も出ないということで信任投票になった結果だ。

現実として、全校生徒の関心は全くといって盛り上がることは無かった。

そして、新執行部となった彼らは今のところ目立った動きはみせていない。

それが不気味といえはいえるかもしれない。

ただ、日常は表面上では平和なたたずまいを崩すことなく続いているということだ。

その日の朝、中庭の整備をしている日比野さんの手伝いをしているときに、こんな話を聞かされたのだ。

「今年に入ってから、ごめんよ君を責めているわけではないからね、最近ね急激に校内のいたるところにポイ捨てが目立つのだよね」

そう言いながら花壇の美しく手入れされた植栽の下から自販機の紙コップを拾い上げゴミ袋へ入れる。

「ちょっとは罪悪感があるのだろうね、こうやって目立たないよう奥へ突っ込んである」  
ため息まじりにそう言うのだ。

「今年からなんですか。そんなに増えているんですか」

日比野さんはちょっと考えてから、

「そうだねえ、多少の増減はあるけれども、今年は大い目立つようになったかな」

ゴミ袋を持ち上げ「毎日これ一杯くらいあるよ」

俺は考えていた。毎日こうやって整備してくれているから気がつかなかったけれど、今年から増えているということは、今年この学校へ入った俺達としてやはり他人事ではないと思わなくてはいけないのだ。何が原因なのか。

「それはどうかしらね。たまたまじゃないかしら」

部室でモエと二人で食材の整理をしながら今朝日比野さんに聞いた話をなにげなくしゃべった時の反応だ。

「たぶん、そういう状況にあることをみんなが知れば少なくなるんじゃないかしら」

その話はそこで終わって、今日の仕込みである餃子のあん作りに専念した。

「私ね、環境保護活動に参加したことがあるのですがけれど、不法投棄とかを見ると本当に悲しくなりましたよ」

メグミは俺の話にとっても関心を持ってくれた。

昼休み、いつものとおり部室で野菜炒めを作って昼飯を食べながら、たまたま居合わせたメグミに何か話をしなきゃ場がもたないと、最近ポイ捨て多いんだってよと話をしたのだ。

俺は、なるほど朝のモエの反応とメグミの反応を比べて、興味の問題なのではと結論した。

モエはあまり興味がなさそうだけど知れば何とかしたほうが良いと考えた。メグミは自分の体験から環境問題に興味もあり何とかしなければいけないと思っているけど、校内でそんなことになっているとは想像していなかった。

まあ、たった二人の反応だけでたいして言えることもないけど、どちらの場合もまず知ることが必要なのだと示唆している。

この問題は皆が知らないことにはどうにもならないことだ。しかし、それではどうやって知るのか。単純に考えれば、日比野さんから報告をうけた学校側がキャンペーンを実施するなどして生徒に周知し改善を求めるといふことだろう。

しかし俺は、これを機会に生徒会を試してみようと考えたのだ。

自治を目標に掲げる彼らが、生徒が起こしている問題に対してどのように反応してどのような対策を打ち出すのか。

あれ以来沈黙を続ける彼らが本当に生徒による自治ということを大事に思っているのなら、この問題にどう対処するのかでわかることがあるのではないか。

俺はその考えを実行に移した。

生徒会には以前から学校生活についての要望を聞くためのメールボックスがある。だいたい場合は教師に対する悪態だったり設備に対する不満だったりおよそ生徒会でどうできる問題とは離れたことばかりで、そして何よりも意見や要望が寄せられること自体がとても少ないのだ。

そんな休業状態のメールボックスに、

「最近校内の美化がいちじるしく損なわれています。この実態に対する生徒会の見識をお伺いしたい」とすこし堅めの意見を入れてみた。

さて、しばらくは様子ながめだな。

そう思ったところ、翌日の夕方、部室へ行くとき日比野さんに呼び止められてこう言われた。

「今日ね、お昼に生徒会長が訪ねてきてね。ゴミ問題について詳しく聞かせてほしいということだった。川合君から提案があったと言っていたな」

俺は少々とまどったが、隠すことでもないから「はい。メールボックスに意見しました」と正直に答えた。

「生徒会で対策を考えるということだったよ。まあ、生徒が自主的になることは感心なことだね。本当助かるよ」

すばやい反応は予想以上だが、さてどんな対策をとるのだろうか。

「おもしろいこと考えたわね」

部室で、”そのままラーメン”をぼりぼり食べながら先輩は言う。

それにしてもこれ、うまいなあ。そのまま食べられるしカップ麺みたいにお湯入れても食べられるのか。よくできてるなあ。

「生徒会の出方を試すなんてね。まあ、いずれやらないといけないことだったのよ」

先輩はいたずらっ子のように目を輝かせる。

「でも」俺は漏らす。「何で投稿が俺だってばれたのだろう」

「そりゃあんた、自筆で書いたんでしょ。あのね、あんたの汚い字、誰が見たってあんたとわかるわよ、そりゃ」「えーっ、そうなんですか」「気がつかなかったの？ほんとに？」

「なんだい、一体どうしたっていうんだい」

両手に焼きたての餃子を持って部長がキッチンから出てくる。モエとメグミは天津飯を持って続く。今日はとても豪華なのだ。

皆そろったところでおいしくいただく。

「これ、きゃべつ多めでボリュウムあるけど食べやすい」「あんが少し甘いかね」とにぎやかに食べているときの幸福というものにはゆるぎないものがある。

重要な商談などで、酒と食事が欠かせないのはこのためなのだ。この満足感が最後のひと押しをしてくれるというあんばいだ。最近そういうの悪者扱いだけどね。

そして、満ち足りた気分で、話題は生徒会のことになった。

部長は「そんなことがあったんだね」というだけで特段何も言わない。

「この機会に生徒会の考え方がわかると思う。何か引っかかるものを感じていたからね」

俺がそう言うと、モエは、

「どうなのかしらね。そもそもそんなメールボックスあるの知らなかった」

あんまり興味無さそうなのです。

メグミは興味あるようで、

「いい方向にいくといいですわね」と微笑む。

先輩はあいかわらず、いたずらをたくらむ子供のような様子で、

「ミノル、何か動きがあったらすぐ教えてよ。変な動きになったら手を打たないとね。なんだかわくわくするじゃない」とうかれた声で言う。

部長は「あんまり悪ノリするものどうかと思うよ」と聞いていられないというふうだ。

ともかく、俺の思いつきがどんな結果をもたらすのか注視しようということになったのだ。

帰りの電車では、めずらしく新谷先生と一緒にいる。

「今日はお早いですね」

そうなにげなくあいさつしたのだけれど、

「どうだい、部活のほうは順調かい」という表情がすこし硬い。

「はい、いたって平和に楽しくやっております」

そう答えると、すこしちゅうちょするようにこう言うのだ。

「実はね、職員会議で君の名前が出てね」

それからすこし声をひそめて、

「こういうことを直接言うのは本来ルール違反なんだが」と前置きをして続ける。

「生徒会から組織強化の提案というのがあって、自主保安組織という話が含まれていてね。そこに君の名前が出てきたというわけ」

「一体どういうことなのでしょう」

「君が生徒会に校内のマナー低下を指摘する投稿をしたことをきっかけに、生徒会で協議をしてね。それならば自主保安組織を作って自分達の責任で問題解決する体制というものを持つのではないかと結論した。執行部以外にも君という支持者が現われて、さらには表面化しないサイレントマジョリティがいるはずだという論理でね」

「校内の美化について提案したのは事実です。そこから先は初耳です」

「うん。君の提案を生徒会で協議して自主的解決を図ること自体はいいんだ。ただ、それを根拠に保安組織をとという発想はすこし行きすぎなんじゃないのかというのがほとんどの先生方の意見なんだ。ただ、一部に生徒の自主性を尊重して試しにやらせてみようという考えもあってね」とそこまで一気に話をすると、先生は俺の顔をじっと見る。

「なにしろその中心にいるのが林原先生だからね。この前の一件もあるから、なんだか因縁めいている気がしてね」と心配そうな声で言う。

そうか、もうそんな話にまでなっていたのか。生徒会の動きの速さに驚かされる。

それにしても保安組織ってどういうことなんだろう。

そのことを聞いてみたくなかったのだが、あまりくわしく聞いて新谷先生にかえって迷惑をかけては申し訳ないので、

「そんな話になっているんですね。てっきり校内美化週間とかそういう話を想像してましたのですこし意外です」とつとめて明るく話した。

しかし心の中はおだやかではない。だが、もうすこしはっきりしたことを生徒会自身の声で聞かないとなんともしようがない。もどかしいけれど。

そしてやはり、先生が心配するように、林原ミレイ先生が積極的になっていることが何か引っかかるものを感じさせて不安になるのだ。

「あの、環境問題をテーマに話し合ってみませんか」

めずらしいことにメグミからの提案なのです。

「いいじゃないですか、メグミちゃんが積極的になるなんて」とモエが歓迎する。

部長がうんとうなずいて、

「環境問題って人間関係の縮図みたいで、とてもおもしろいテーマだと思うよ」

先輩も賛成して、

「よし決まり。それじゃまず環境問題と言って真っ先に思い浮かぶのって何だろ」

メグミがそれに答えて話し始める。

「環境を破壊するものはいろいろありますけれども」すこし間をおいて、「私が一番思い出すのがきれいな高原植物の群生地は無造作に捨てられた不法投棄の姿を見たことです」  
そういえばこのあいだそんな話をしたなあ。

「なるほどね。いまとても問題になっているわね」

先輩が相づちを打つと、部長が思い出したように、

「それと関連してくることだけど、ゴミの有料化ってどう思う？」と質問する。

メグミは少し考えてから、

「そうですね、仕方のないことだと思います」

部長は話し始める。

「そう、仕方のないことなんだ。だけどそれが不法投棄を増やすとしたらどうだろうか」

俺は口を挟んでしまう。

「でもそれを不法投棄の理由にしても通らないでしょう」

部長はうなづく。

「そう、理由にはならない。しかし、いままで無料で捨てていたものにお金がかかるということに対して人はどう反応するだろうかということは難しい話ではない。だから不法投棄という現象は十分予測可能なことだったはずだ。それなら事前にどんな対策が可能かということは考えておかなければならない」

そしてさらに続ける。

「何かを始めるときにはそれがどんな影響を及ぼすかを一体どの程度まで考えているのかという検証がなされなければならない。それでもなお予想もつかないことに右往左往させられるのが現実だからね」

先輩が話を引き継ぐ。

「それはいろんなことに言えるよね。何かを始めるときには必ずリスクというものがあるんだ。当たり前のことだけど忘れていることが多いんじゃないかな」

メグミが発言する。

「そういうこともあるんですね。でも有料化の前から問題はあったと思いますけれど」

「そうだね」と部長が説明する。

「いわゆる産業廃棄物の問題だね。でもこれも業者がお客から料金を取って回収したものをその先の処分場へ払う料金を、理由はいろいろあるだろうけど、払えなくて不法投棄することが多いから、やはりゴミの有料化と根っこは同じと考えられるよね」

俺は考えている。ゴミってなんだろうか。

「そもそもゴミを出さない工夫をすることが一番大事なことなんじゃないのかな」

俺は続けて発言する。

「ゴミが増えるから処理に費用が掛かって、それで有料化なんてことになるんだから」

「それは正論だけど、ゴミの正体って経済そのものだと思うから、これだけ経済規模が大きくなった現状からそれほど劇的な減量って難しいんじゃないかな」

部長が発言する。

「工夫でまかなえる量がどの程度有効なのか。もしリサイクルに有利な素材を使うにしてもそれによる価格上昇が普及をさまたげることもあるだろうしね」

「リサイクルっていえば」モエが思い出したように言う。

「せっかく回収したのに利用が進まなくて倉庫に山積みなんて話も聞くわね」

先輩は、「けっこう思ったより複雑な問題なのよね、ゴミ問題ってね」と付け足す。

俺は目先を変えたほうがいいと思い、

「環境問題って、あと公害とかもそうですよね」と振ってみたのだが、どうも皆さん乗ってきてくれないのだ。

今日は店じまいしたほうがよさそうかなと思い、

「あはは、今日はこのくらいにしときますか」と言ったら、すべりました。

生徒会からの呼びかけがあった。代議員を集めての会合に先立ち提案されたのは、校内に自治組織の第一段として保安隊を組織したいということ。その内容は代議員の当番制で校内の見廻りをする事で生徒各自のマナー向上を図るということ。その賛否を代議員は事前にまとめて会合で発表してもらいたいとの趣旨である。

俺はホームルームの時間を借りて意見を求めた。

「そんなことしなくてもいいんじゃないか」というのが大勢だった。俺としても校内見廻りとマナー向上のつじつまが強引だと考えていたので、我がクラスとしては提案を否決するということになった。

放課後の部室で、俺は皆の意見を訊いてみた。

メグミのクラスでも同じような結論になったらしい。

「私はその自治組織という考え方が何だか怖いと思うのです。きっかけは校内で起こった、ちょっとしたマナー違反だったとしても、それを理由に警察組織を作ろうという考え方は行きすぎだと思うのです」

なかなか鋭いところを突いているなど、メグミの顔を見ながら感心した。

先輩は少し悔しそうな顔をしながら、

「ウチはね、もう話にならなかったわよ。シズカが長広舌ぶって、いかに生徒が自主的に物事を処理することが生徒のためになるかを訴えたわよ。皆もそういうもんかという空気になりかけたので、あたしはたまらずに、そんなあいまいな理由に流されたらダメだと言ってやったわよ。それからはもう非難の応酬で。結局最後は多数決になって、とりあえずやってみてそれから見なおす機会を設ければいいのではないかという結論になったのよ」

部長はあっさりした言い方で、

「生徒会の意図がまだ十分に説明されていないことを理由として、今回はよりくわしい説明を求めるといった意見になったよ。つまり、何をしたいのかをかくして既成事実を積み上げるようなやり方は許されないということさ」

俺は少し迷っていたので、この際と思って部長に訊いてみた。

「生徒会の本心はどこにあるのでしょうか。一連の流れからは、少しづつ生徒を管理することを目標にしていると思うんですけど」

部長はしばらく考えたのち、ゆっくりと話し始める。

「そうだね、憶測の域を出ないけど、ミノル君の考えているとおりだと思うよ。では何のために管理するかということになるのだけれども、僕はこう考えるんだ。それは我々生徒の側に隙があってそれを突いてどれだけ自分達の考えを押しつけることができるかを試している。つまり管理して何かをするというのではなくて、管理されるという本来は直感的に嫌なことを押しつけることに対して我々がどう反応するのかを実験しているのだと思うんだ」

俺は、意を決して、核心を訊いてみた。

「それは、実のところ、ミレイ先生の実験ということですか」

ウチのクラスには直接干渉しないけれども、ミレイ先生が生徒会に影響力を発揮してい



らしいことは想像されていたのだ。

部長は「あくまで僕の考えだけれど」と前置きして、

「ミレイ先生の実験である可能性は大きいだろうね」と言う。

モエが「もしそうなら、本当は何をしたいのかをミレイ先生に直接説明を求めるべきよね」と言うと、部長は、

「いずれそうなることもあるかも知れない。しかし今の段階ではあくまで生徒会の自主的提案ということなんだから、今はまだミレイ先生に直接の説明責任は問えないだろうね」メグミが質問する。

「まず、今回の提案を否決したあとにどういう動きになるかを見定てからということでしょうか」

「うん、そういうことだね」と部長はうなづく。

先輩は天を仰いで嘆息しながら、

「あーあ、ウチは条件付きとはいえ賛成だからなあ。全体的には反対の方が多いのかな」

「まあ、流れとしては反対派のほうが多いと思いますよ。多分大丈夫ですよ」と俺。

モエは心配そうな声で指摘する。

「本当はウチのクラスの雰囲気も積極的な反対というわけじゃなかったから、成り行きによつてはどうなるかわからないわよ」

「まだまだこれからどうなるか、予断を許さないのですね」とメグミがつぶやく。

「まあ、皆の意見を聞けてよかったです。会合ではできるかぎりのことをやってみます」

俺はそう、自分に言い聞かせるつもりでも言ってみた。

皆、温度差はあったとしても、おかしいことになりつつあることは感じていると思う。

それをどう防止するのか。

それは、彼らの言う生徒の自治というフレーズを使えば、生徒が嫌なことは生徒の力ではねつけることができると言えるのだ。

生徒に許された範囲でのことなのだから、生徒の意思で決めていいことなのだ。

そう考えると、何とかうまく行きそうな気がしてくるのだった。

生徒会代議員会に俺は少し気負った状態で出席した。

生徒会長となった佐伯がまず演説する。

「先日みなさんに提案させていただいたとおり、校内における生徒の問題は生徒自身の手で解決しようということであります。その第一段として保安組織の設立をしてはどうかということです。みなさんはそれぞれのクラスを代表する立場にあります。この会合で生徒の総意をいただきたいと考えます。ぜひ遠慮のない意見をしてください」

まず上級生の代議員からクラスでの結論を発表していく。全体的には、そこまでしなくてもいいんじゃないかというものが大勢を占めている。

俺の番になる。

「ウチのクラスでは、そんなことをする意味がわからないということでした」

すこし脚色してしまう。

「よろしければ、なぜ保安組織を作ろうと考えたのか、その理由を詳しく説明してほしいと思います」

副会長のシズカが「あとで話します」とおだやかに言って、次のクラスの代議員をうながす。

全ての代議員が意見を発表した結果、圧倒的多数をもって生徒会の提案は否決された。最後に副会長が話し始める。

「それでは今回の提案は廃案とすることに決まりました。そこで、何人かの代議員から質問のありました、今回の提案に至った経緯というものをくわしく説明します。発端はある生徒からの告発です」

シズカは全体を見渡すようなしぐさをしてから続ける。

「今年に入ってから校内のいたるところにゴミが捨てられているというものです。これだけをとりあげれば環境美化をみなさんに呼びかければそれで済むことだろうという意見もあるでしょう。しかし実は、職員、つまり先生方の間ではこれを生徒の規律意識の低下とみなし、職員による取締りをしたほうがよいという考えがあるのです。生徒会としてはそんな事態をまねく前に生徒の自治権の範囲内でのこととして事態を処理すべきではないかという考え方をしました。そしてその方法として生徒による自発的な見廻りを行うことで解決できるのではないかと考えたのです。これは私達が自律的に学校生活を管理する権利を主張することのはじまりであると考えています。今回は生徒会の提案は否決されましたが、今後も生徒による自治について提案を続けて行きたいと考えております」

そう締めくくられたあと、会合は散会となった。

俺は部室に戻り、結果を待っていた皆に話をした。

皆満足そうな顔で俺の話を聞く。

モエは「生徒会の横暴を阻止できたということね」

メグミは「ともかくおかしいことにおかしいと言うことができ良かったと思います」

先輩は「ああ良かった。最後は正義が勝つということなのよ」とうれしそう。

そんな中、部長だけは最後の副会長のスピーチについての話になった途端に、暗い顔になったのだ。俺はそれがとても気になったので、訊いてみた。

「部長は、なにか引っかけがあるものがあるのですね」

深刻な顔で考えをまとめたあと、おもむろに口を開く。

「これは思ったより手強いかもしれない。まず、副会長は何故最後に、否決された後にそんな説明をしたのかということだ。そういう考えがあるのなら、まずそれを説明してそれから採決をとれば今回の提案は通っていたかもしれない。教師による取締りなんてことがわかれば、自分達でなんとかしたほうが良いと思うのは自然なことだろ。そして、ここからは僕の推理だけど、今回の件は否決されることを前提に仕組まれたのではないかということ。つまり今回生徒会の崇高な提案を無知なお前らが否決したことで事態は、多分その教師による取締りというのはブラフではないと思うから、事態は悪化したんだと思ひ知らせるとのこと。そして、少なくとも生徒による自治ということに否定的でない層に次回の提案のときはもっと活発に意見を言える環境をつくるというもの。そういう考えに基づいたいわば演技だったということだ」

俺は、やられたと思った。そういえば否定的意見が次々と出るなかで彼らは平然としていた。自分達の提案が否決されることへの不満もなければあせりもなかった。前回とは

まるで違うのだ。そうか、もともとこういう筋書きだったということか。

俺はまんまと利用されたのだ。彼らの主張を正当化する芝居のお膳立てをしたのだ。

ももとは俺が生徒会を試すつもりだったのが、そんな意図は承知でうまく利用されてしまったのか。

そう、あのとき、副会長のシズカが『発端は生徒からの告発です』と言って全体を見渡すようなしぐさをしたとき、俺の顔を見て笑っていたのだ。あんたの考えていることなんて御見通しよと笑っていたのだ。

俺は、自分のおろかさに気づき落ち込むのだった。

そして事態は予想どおりの展開を見せたのだ。生徒会の出した結論に対して、これは教職員が強制力を発揮しなければならないということになり、校内美化委員会が設立された。そして生徒会のいたらくを連帯責任で取るのだというよく解らない論理で生徒会代議員が自動的に美化委員に任命される。

委員会が開かれて、指導教員として着任したミレイ先生は、

「あなたたちが当番制で昼休み、調査によると昼食時に多くゴミの投棄があるようです、そこでその昼休みに巡回して清掃活動をしてもらいます。心理的に、きれいにしているところへゴミを捨てるのははばかれるものです。そしてあなた達のもう一つの仕事はクラスに帰ってそのことを全員に周知してもらうことです。美化が達成されたところであなた達の役目は終了します」と命令する。

そしてほぼ週一回のペースで回ってくる当番制で昼休みの清掃活動が始まった。最初は無関心だった生徒達も毎回大量に出るゴミの様子を美化委員から報告され、そのうちにかくれてゴミを目立たないところへ押し込んでいる現場を教師に押さえられて懲罰を課される生徒が出るにおよんで、急速にゴミ問題は解決した。

ももとは生活習慣の問題であって、そこいらじゅうにゴミを捨てることに抵抗を持たない者がそれに気付くことで解決するようなことだったのである。そうしたしつけを受けた者の問題であって、それはそういうしつけをした大人達の問題でもあるのです。

晴れて昼休みの役目を放免された俺は、ひさしぶりに充実した昼食にありついていた。

なにしろ当番の日には白飯に塩辛で、胃袋へかきこむようなあわただしさだったのだ。

やはり食は精神状態に多大な影響を与えるものなのです。

そんな感慨にふっけているとき、めずらしい客が訪ねてきたのだ。

生徒会長の佐伯である。

「部長ならいせんけど」とぶっきらぼうに答えた俺に、

「いや、君に用があつてきたんだ」と言う。

一体何だろうと警戒していると、

「君は僕達を誤解しているんじゃないのかな」と言うのだ。

誤解も何もないだろう。油断ならない奴らなのだ。

「俺に何の用ですか」訊くと、佐伯は室内を見まわして、

「これだけのぜいたくを黙認しているのも、僕達が君やここの部員を心から信頼している

からなんだぜ。それを忘れてもらっては困るよ」と言うのだ。

ははあ、これは俺に対する脅しだな。

そのまま言ってやった。すると佐伯は苦笑して、

「そうじゃないよ。君は心底僕達を嫌っているみたいだね」

当然である。あんなこともあったし。

「それじゃ何ですか」

「君は今回の一件をどう思っているのかな」

「まあ、うまいことやられたと思ってますよ」

すると佐伯はとても意外そうな顔をして、

「うまいこと？ うまいことやったのは君の方だろう」

「どういうことですか」

「まず最初に断っておくが、君がああ投稿をしたことを知ったのは偶然だよ。だってあれだけ特徴的な字は一度見たら忘れないもの」

それについては、まあそうでしょう。

「だからね、あの投稿が君かどうかという点は除外して、僕達はあれをきっかけにして生徒会の自主性をみんなに理解してもらおうと思った。生徒自身で解決できるのだと示したかった。そして、それには生徒会の権限を拡張する必要があると思った。」

苦悩の表情になる。

「僕はね、生徒の自由は生徒自身を守る、そのためには生徒自身が起こす不始末は自分達で解決できないと、そういう実行力を見せないと守れないと思う」

「あなたの言う生徒の自由ってなんですか」

俺の問いかけに佐伯は一度深呼吸をするようなしぐさをして、そして諭すように話し出す。

「学校生活において教職員という権力が、いつ不条理な要求を突きつけてくるかなんてわからないだろ。そのときにそれに十分対抗しうる生徒による自治権というものが確立していないと、そのときになってあわてても遅いということになりはしないだろうか」

「俺は、教職員、先生方の言うことが時として嫌に感じることもあったとしても、基本的に正しいことを言っているんだと信じていますから。それに今実際に結構自由にやれていると思っていますから」

「いま不自由がないからといって、今後その状態が続く保障なんてどこにも無いんだよ。僕はね、そういう未来への準備が必要だと思うんだ。それに、教師だって人間なんだから間違えることはあるんだ。無謬性って言ってね、国家は過ちを犯さない政府は間違いを犯さない、それを構成している政治家や官僚が間違えることはないという、神話みたいな考えかたがあるんだけど、どうだい？ そんなこと信じられるかい？ それと同じことさ。間違いがあったときそれを指摘しなければならない。しかし、力がなければそんな指摘は無視されてしまう。強くなければ正しくても実現はできない。そういうことがあるんだよ」

俺は、正直よくわからなかった。もっともらしいことを言ってただ権力を握りたけなのかも知れない。そうでない根拠を見出すことは、できないのだ。

「俺は、その説明は、正直よくわかりません」

「残念だ」それだけ言い残し、佐伯は部屋を出て行く。

俺は、この日常が、考えているほど単純でないことに戸惑うのだった。

「ええと、この前はどこまで話したっけ」先輩はくず餅を食べながら思い出そうとしていた。

何がテーマだったかなと俺も思い出そうとする。

メグミが「ゴミの有料化と不法投棄の関係です」と答える。

そうそう思い出した。最近忘れっぽいのかな。

俺が「環境問題って公害とかもそうですね、って言ったんですよ」と補足する。

モエが「そうねえ、地球温暖化とかでしょ」と言う。

ちょっと違う気もするが、でも、そうなのかな。

「絶滅危惧種の問題もそうですね」とメグミが追加する。

部長が話しをまとめる。

「環境問題というのは広いよね。全てにおいて共通することは、環境を破壊するのは人間だということ。その人間の行為をどう制限するのかということだよね」

そう、全ては人間の仕業なのである。

先輩が「その、人間がすることを人間が制限しようというとき、問題になるのはそれをどう理由づけるのかということよね」と言う。

メグミが「どういう意味ですか」と問いかける。

モエが「それは、人が利便性を求めてやった行為が環境を破壊してしまった。好きで壊しているんじゃないんだから」と答える。

好きで壊しているわけではない。そうだな、始めたときはわからなかったことが起きたということなんだ。

部長が引き継ぐ。

「そう。人は好きで環境破壊をしているわけではない。しかし、それがわかったことで今度は環境のために利便性を手放すことの難しさと直面することになる。いままで当たり前にしてきたことが急にできなくなることを皆が素直に受け入れることができるなら問題はない。しかし実際はそんなに単純じゃない。長い目でみれば実現できるかもしれないが、それまではやはり混乱する。抜けがけも起こる。これはね、法律と道德の問題に通じることなんだ」

法律と道德ってどういうことだろう。

素直に疑問を口にする。部長が続ける。

「何か不都合なことが起こったとき、法律で禁止して重い罰則を課せば話しは早い。これは環境問題で言うと不法投棄や有害物質の放出なんかには当てはまるよね。法律で規制することで無くすことができる。まあ、それでもかくれてやる事案はあるけど、総体ではそれで解決へ大きく向かっている」

それはわかります。しかし道德って何ですか。

「法律で規制できることは誰もがそれは止めたほうがいいと思う明確な理由があるものなんだ。しかしね、環境問題でも地球温暖化なんかはまだ否定的な意見、つまり温室効果ガスの影響をどう評価するかで意見が完全に一致しているとは言えない。だから努力目

標とかの段階で停まっているところがある。これは守っても守らなくても何か特別の罰則があるとは限らないというところで道徳的な性格があるということさ」

そこまで言ったところで、先輩が引き継ぐ。

「道徳って良心を信頼したものだから、罰則で強制することとは異質なんだよね。法律と道徳の使い分けというか境界をどこに置かか社会のありようが変わってくるのよね」すこししみりして言うのだ。

部長が「すこし話しがそれたかな」と仕切りなおす。

「環境問題に話しを戻すと、人は利便性を少しづつ制限してでも環境を守らなければいけないというのがこれからの道筋となるんだろうね」

メグミは「はい。そうなってほしいと思います」とはっきりとした声で言う。

なんだか、しみじみとした雰囲気その日は終了となった。

今日も雨である。全くこの時期は気分をゆううつにさせる。窓の外をながめながら雨粒の数を数えてやろうかと意味のないことを考えてしまう。英語の授業なのだ。

よどみない発音で読み上げ、「リピートアフタミ」と全員に音読させる。この繰り返し。不謹慎ながら、眠くなってきた。湿度は眠気と関係があるのだろうかとはぼんやり考えているうちに、静かに眠りにつく。

ばんと頭を叩かれて、俺は飛び上がる。

ミレイ先生が立っている。

「あんまり大胆に寝られると、何だかこっちに責任があるみたいじゃないの」

爆笑になる。

俺は仕方なく頭をかきながら、

「すいません。あんまり先生の発音が素晴らしすぎて」とか尝试してみる。

先生は苦笑しながら、

「へえ、そんな気の効いたこと言うようになったのね」と言ったあと、

「放課後、職員室へいらっしゃい。特別に宿題たっぷり出してあげるから」

また爆笑になる。

やれやれ、ちょっと調子に乗りすぎたかと俺は反省するのだ。

放課後すみやかに出頭すると、

「ええとね、これを来週までに解いて提出しなさい」と問題集を渡される。

やれやれというような顔をしているとミレイ先生は、

「あなたね、このあいだの小テストも成績悪かったのに、授業中寝てる場合じゃないでしょ」

叱られてしまいました。

確かにどうも英語は相性がよくないらしい。

そういえば数学もあんまりかんばしくないか。

ミレイ先生は心配顔になり、

「わからないことは早めに解決しといたほうがいいわよ。いつでも質問にきてかまわないんだからね」と俺の背中をどんと叩く。けっこう力強いんだ。げほげほ咳き込む。

「ああ、それとね。これを委員長と協力してやっておいてほしいのよ」

資料を渡される。なんだろう。

「ウチの学校には、校外授業の一つとしてボランティア実習というのがあるのは知ってるわよね」

確かそんなのがあったような気がする。

「大丈夫？ まあいいわ。とにかくそろそろ実習先を決めないといけないんだけど、この資料に受入可能先の一覧があるから、クラス全員の希望を取って割り振りをお願いしたいのよ」

そこまで言って、先生はいたずらっぽく笑い、

「委員長、副委員長と協力してやってほしいのよ。まあこれも授業で寝た罰ということで」仕方がありません。寝たのは事実ですから。

「はい、つつしんでやらさせていただきます」

うやうやしくささげ持って神妙な顔で俺は答えた。

笑いながら「本当に。よろしくたのむわよ」と念を押された。

俺は部室へと急ぐ。今日はゴーヤが手に入ったということで、先輩とモエが張りきって料理しているはずだ。早く行かないと全部食べられてしまうかも知れない。

飛び込むとメグミが食器を準備している。なんとか間に合ったようだ。

炒め物にしたようで、とにかくがぶりと頬張る。うっ苦い、でもうまい。

なんだか今日は食がすすむなあ。いつものことか。つつこんでみる。

ああ、食べてるときが一番幸せだ。

「ミノル、あんた授業中寝てて怒られたんだってね」先輩が愉快そうに言う。

俺はモエのほうを見る。モエは笑って舌を出す。

「あんた最近すこし緩んでんじゃないの？」と先輩に心配される。

「まあ、こんなじめじめが続くと、眠くもなるよねえ」部長がフォローしてくれる。

「お恥ずかしい限りです」頭をかいて答える。

そしてふと、くだんのボランティアのことを思い出して、

「そういえば、というのも変ですが、実はミレイ先生から寝た罰としてボランティア実習の割り振りを仰せつかりまして。ちなみに先輩は去年どんなことをしたんですか」と訊く。

「ああ、そういう時期だね。あたしはね」と言いかけて、

「それなら、モエとメグミは何か考えてることはあるの」と訊く。

二人とも首を横に振る。

「まだそんな話にはなっていませんわ」とメグミが言う。

先輩は「そうねえ、あたしはね、老人ホームにボランティアへ行ったんだけど、よかつたら紹介してもいいわよ」と言うのだ。

「どういうことですか」

「自分で見つけてきてもいいのよ」

「あら、私そうしようかしら」メグミが言う。

「まあ、行く先に困ったら言ってよ」先輩は自分の胸をぽんと叩く。

そして、げほげほ咳き込むのだ。なんだかなあ、自分で力をコントロールできないのかな。

俺がにやついていると、

「なによ、なにか言いたそうね」とジロリと睨まれる。

皆、笑う。ああ、なんか楽しい。



## 第六章 天上に在る樂園



「今回は社会保障というものについて考えてみたいんだ」部長からテーマの提案がある。社会保障といえば健康保険とか年金とかそういうことだよな。

「うん、そうなんだけどね。社会保障と基本的人権との関わりを取り上げてみたいんだよ」基本的人権って言えば...

「そう、人間としての生活保障ということさ。わかりやすく言えば生活保護だよな。これを考えることは社会の基本的しくみとそこに生じるゆがみとの関連をどう折り合うのかということになるよね」

ああそうか、前にもそんな話しをしたような記憶があるなあ。

「そうだ」俺はつぶやいた。「確か自由競争と自己責任が社会の基本的しくみで、そこに生じるひずみを修正するのが社会保障ということですね」

「そう、そのところをよく考えてみようということ」部長は満足そうに言う。

「まず」と前置きして部長が定義する。

「資本主義社会の原則は、自由に経済活動をして各個人の才能で富を得ることも貧困にあえぐこともそれぞれの責任ということなんだね」

確かにその通りです。しかし、と俺は発言する。

「その原則は、これだけ経済が複雑になっているところで、どれほど意味を持っているのでしょうか」

「どういうこと」

「社会の階層とでも言うんでしょうか、勝ち組のひと握りの者とその他大勢の一般人との格差というものがある状況で、本当に自由な経済活動なんて成立するんでしょうか」

部長は少し考え込んでから言葉をつなげる。

「確かにそういう面はあるかな。成熟したという表現が適切かどうかわからないけど、ある程度は固定化してしまって個人の才能だけでは越えられない部分があることも確かだろうね。しかし、今も確実に成功する者と失敗する者がいて、自由競争の原則が全く無効というわけではないだろう」

なるほどそう言われればそういうことでしょうか。

「まあ、格差があるということが今回は重要ということさ。それが人の命にかかわるとき、さあどうするんだということを考えるんだからね」

部長は一息つくと、

「まあ、飲みながらゆっくりとやろうじゃないか」

新規導入のエスプレッソマシンを操作して香りの一杯を煎れてくれる。

よく香りを楽しんでからすすむ。熱いけどうまい。

そうか、部長がコーヒー好きなのはこうやって一杯を煎れることで適度にクールダウンできるということなんだ。

しばし味わう。気分がふわっと軽くなる。

部長が話しを続ける。

「その、現実にある格差というものを、自己責任と切って捨てるのが原理原則なんだろうけど、それじゃ社会の進歩というものが感じられない」

俺が引き受ける。

「それで、セイフティネットとしての生活保障をしようというわけですね」

うなずきながら部長は言う。

「競争に敗れたからといって放り出すような社会を私達は望まないだろう」

ずっと黙って聞いていた先輩が思い出したように話し出す。

「生存権ということね。しかし現実に行うときめちやくちや難しい問題があるのよね」

「それはどういう問題なんですか」素朴に聞いてみる。

「えっとね、それはどこまでの生活を保証するのかという基準をどうするのってことよ」

「基準はあるんじゃないですか。確か健康で文化的な必要最低限の生活を保証するんじゃないんですか」

「それはそうだけれど、健康っていうのはまあある程度共通認識が可能だと思うけれども、文化的な生活っていうのは、はっきり言えばその人の価値観によってばらばらなんじゃないかしらね」

メグミが続ける。

「文化的ってとてもあいまいな表現ですね。時代によっても変わってくると思いますし」慎重に続ける。

「そもそも満足感のある生活なんて人それぞれですから、その人によって満足を得られる生活を保障しなければならないという解釈も成り立つのではないかしら」

俺はその先輩とメグミの意見を聞きながら考えていた。

セイフティネットというものは一体何であるかを真剣に考えたことなんて無かったな。

たぶん国とか市町村とかが細かい規定でうまくやっているんだろう程度の認識しか無かった。

部長が話し始める。

「それは何を最低限度とするかの基準をあくまでも現実の生活に照らして積み上げていったものということではない。住む所着る物食べる物、そういった生活に欠くことのできないものにプラスして常識的にぜいたくではないものを加えてということになる。ぜいたくの基準はあいまいといえるかもしれないけど、それは行政が決めるほかない」と定義して、

「そこは時代の状況に合わせて決めるほかないことだから、話しはじめるときりがないんだ」

そして、話の方向を修正するように、

「ここで考えておきたいのは、その生活保障によって本当に全ての命は救われるのかということなんだ」

モエが「救われないことがあるんですか」と不信感のある言い方をする。

部長がそれに答える。

「本来は全ての命が救われなければならないはずなんだ。でもそうとは限らない。そこで何が起きているかということを考えてみたいんだ」

俺はつい、「何が起きているんですか」とそのまま訊いてしまう。情けない。

「うん、考え方はいろいろだろうけど、意図しない原因で、必要な援助が届かないことがあるんだ」

意図しない原因って何だろう。

「つまり、制度はあってもそれを本人が希望しなければ利用できないということがあると思うんだ」

メグミが「でも、困っている人を見つけて手をさしのべるのが仕事なんじゃないんですか」

非難するような声で言う。

「必要としている人がいるのなら、そこへ間違いなく届けるのが役目でしょう。それをしないなんてことが許されるわけじゃないです」

部長は、「もちろん、そうすることが理想だけど」と話しはじめる。

「実際にそれをやろうとしたら人員的にも予算的にもかなり規模を大きくしないと難しいんじゃないかな」

モエが「それができないのはあくまでお金の問題なんですか」と質問する。

「お金の問題は大きいんじゃないかな。でもそれはどんな制度にも言えることだから、特別この場合だけじゃないよね」

少し考え込んでから続ける。

「うまく言えないんだけど、本人が希望することがまず必要だということは、本人の感覚によっては今すぐ必要なほど困っていても例えば恥ずかしいと感じてちゅうちょするうち手遅れになることもあるということだよ。あとはどういう手続きをすればいいのかわからなくて、でも誰にも聞けなくてということもあるだろう。社会保障のありかたってそういうことをまず想像することが必要だということをおきたいんだよね」

すうと一息ついて、さらに続ける。

「本当に困っている人は声すらあげることもできない場合だってあり得るということをおもって、それに対応できるしくみを作るにはどうすればいいのかと考えることが、社会保障を考えるときの第一歩だと思うんだよね」静かに語りかける。

俺は、すこし違和感があったので率直に言葉にしてみる。

「あの、あえて変なこと言うようですが、本当に困っている人がいれば、周りにいる人が助けることを、助けなきゃいけないことを第一にすべきだと思います」

皆の視線が集まる。

「具体的な制度はもちろん大事ですが、それだけではできないところについては、よく考えてみれば、困っている人に対する周囲の関心でしかカバーできないと思う」

そう言ってから、はたして俺はどうだろうかと考えて、

「もちろん、俺もいままでどれだけ関心があったかという、こんな偉そうなこと言えるわけじゃないんだけど」と付け加えた。

モエが「わたしも関心あったと言えないな」とつぶやく。

部長が「ふむ、それはそうなんだけど」と言いかけたところで、先輩が割り込む。

「言いたいことはよくわかるけど、目に見えて困っている人がいれば助けるということと、たとえばよ、隣にいる人があまり社交的でなくてほとんど顔を合わせる事ができないとして、その人が実は困っていた場合に、隣にいる私がそれに気付かないことに責任を問うということができるのかしら」と反論する。

「そういうことを言えばきりがないと思います」メグミが言う。

「やはり、困ったときに困ったと遠慮無く言える社会を作るしか無いのではないのでしょうか」

「それは空論だと思うわよ」先輩がきびしく制するように言う。

「さっきのたとえだけれど、何も社交性をとがめているわけではないのよ。本人の意思でそうするのをはたして他人が入り込んでいいのかということ」

メグミも強い調子で応える。

「じゃあ本人が希望していないから困っていても放っておいていいとおっしゃるのですか」

俺は、これは水かけ論でどうにもならないなと思って、

「まあまあ、二人とも言ってることは間違いじゃないけど、そうだなあ、そのところは現実の難しさということで...」

メグミと先輩は声をそろえて、「だまって！」と俺に叫ぶ。

部長が「いったん落ち着いてみようか」困った顔で言う。

「周囲の関心ということに限定しなくても、困っている人がいること、どうすればいいかということに皆が関心を持つことは基本だから、それはそれでいいんだけど、社会に自動的に困った人を助けるシステムを作るということを考えないと。善意に頼るだけでは不十分だということだよ」とまとめる。

モエが「わたし思うんだけど」と收拾を計ろうとして話しはじめる。

「社会保障ってまだ新しいことだと思うのよね。だからどうしたらいいかはまだこれといった答えが出てないと思うの。だから善意でできることは善意に頼ることにして、それからもれた人をどうするのかはまだこれから皆で考えなくてはいけない、とっても深い問題だと思うのよね」

俺は、「うん、それを考えようということだけど、今回は考えてみれば思いのほか根の深いことだということまでしかいかなかったということなんじゃないかな」と言ってみる。

皆、消化不良のような感覚をいだきながらも、これ以上のいい提案はいまは出来そうにないというところは同じだと感じた。

「この話しはすこし整理してまたやりましょう」と俺がまとめたのだった。

ホームルームのとき、ボランティア実習の行き先の割り振りを委員長達と協力してやってみたところ、やはりというか比較的楽そうなどいっては失礼ながらあまり気を遣わなくていい公共施設の補助作業、例えば体育館での管理補助や森林管理事務所の現地調査補助などに人気が集まって、社会福祉関連の派遣先へはどちらかという希望がかなわ

なかった者がしかたなく選ぶという状況になった。俺はまあ選り好みするのも何だし、それになにしろ割り振りをする側になってしまった関係上残り物の福というやつにすることにしたのだ。残ったのは保育所の補助作業と老人ホームの補助作業だった。保育所のほうを副委員長にお願いして、委員長と俺は老人ホームのボランティアを選択したのだ。ミレイ先生に割り振りを報告にいくと、「ごくろうさん」と手渡した書類をざっとみて「さっそく手配します。多少調整があるかもしれないから、そのときはまたよろしくね」と頼まれてしまう。

辞去しようとしたところで、「宿題まだだけど」とすっかり忘れていたことを言われ、「すみません、今取ってきます」と急いで教室に戻る。

もうみんな部活やら帰宅やらで誰もいない教室は静まりかえっており、いつもとは別の顔を見せている。

問題集を探しながらふと俺はこれまでの短いようでごたごたと過ごした日を振りかえる。これといった目的も期待もなくただそういうもんだという気分がこの学校へ来たのだけれど、何だか部活はけっこう集中していままで考えもしなかったことをいろいろ考えることになった。

勉強はあまり得意じゃなくて成績はかんばしくないから本当はもっと学業に集中しないとまずいのだが、部室で皆としゃべっているのが何だか楽しくてそれが中心になって毎日が動いているようなのだ。

こんな想像もしていなかった自分の姿に今あらためてなんとも可笑しさがこみ上げてくる。

社会などどこか遠いことのように自分にはまだ関係の無い話だと思っていたのに、最近やたらと世の中の出来事を気にしている自分があるのだ。

急に真実味を持って眼前にせまってくる不安感みたいなものを無意識に感じているのだ。まだまだきっと先の話なのだろうが、社会の容赦のない姿というものをおぼろげながら感じて、一体俺は本当にそんな環境の中でうまくやっていけるようになるのだろうかと考えてしまうのだ。

いつだったか先輩が言っていた言葉を思い出す。

『社会って私達の遠くにあるわけじゃなくて日常を見えないかたちで支配しているんだ。それに無関心でいられるなんてどうかしてるのよ』

そのときはあまりピンとこなかったけど、この平和で何事もない日常のその薄い皮膜をはがした下にはまるで暴力的で理不尽で容赦の無い、弱肉強食なんていう言い古された表現が当てはまることが行われているのだ。

そんなことにはまるで無関心に俺は生きて来たのだ。今もそうかも知れない。本当はまるで何もわかっていないのかも知れない。たぶんわかっていないのだろう。ただ漠然と不安感だけがありそれを具体的にどう晴らせるのかと言われればまるで言葉がない。

気がつくと辺りはすっかり暗くなっていて、闇の中に一人たたずんでいる。どうも最近考え事が多くなっている。何か変だよな俺。

手にした問題集をぼんやりながめ、それからあわてて教室を飛び出した。

「遅いじゃないの。どうしたのよ」先輩はとがめるように言うのだ。

今朝仕込んでおいた材料と先輩がどこからか調達してきた特選黒豚によるしゃぶしゃぶなのである。何か最近、軽食という概念から離れてる気が。でもまあ、うまそうだからいいか。

「白菜もっと食べなさいよ」と先輩にまるで子供扱いされながら、ぼん酢でいただく。うまいうまい。もっと上等な表現をしたいところだが、うまいものはうまいでいいのだ。結局は遅れてきた俺が一番多く食べるといういつものながらの状況にモエは、「気持ちいいほど食べるから、見ていただけでおなかいっぱいになるわ」とあきれながらも楽しいひとときに満足そうだ。

メグミは取り分けるほうにいそがしいタイプで、一体いつ食べているのかという感じなのである。「雰囲気を楽しんでいるといったところでしょうか」と屈託のない笑顔をみせる。先輩はなべ奉行であしろうしろと休みなくしゃべるのだ。

部長はそんな様子をにこにこ見守る。

この空間だけやわらかい記憶のようにどこか実感のない時間がゆるやかに流れているようだ。

心の平衡を担保するこちら側の俺とは対極にあるものという感じなのだ。

ただ味覚におぼれて余計なものから解放されることに対する代償というものをいつか支払わなければならないことを知っていながら先送りすることを決め込んでいるモラトリアムというものの表徴として存在する時間。

いつか失われることがわかっている時間。

しかしまだここにいたい。わがままだとわかっている。

食後の冷茶をいただきながら、メグミがボランティア実習の話をする。

「私、偶然なのですけれども、以前お世話になったことのある自然環境保護のボランティア団体に行けることになりました」

窓外をながめて、「あの連峰に登って高山植物の生態系調査をするのです」とうれしそう。その横顔を見ながら、すっかり変わったなと思うのだ。

モエの後ろでいつもモジモジしていた印象が、いつの間にか積極的に部活にも参加するし、なによりときどき鋭い指摘もするようになったのだ。

俺は意を決して思っていることを口に出してみた。

「気を悪くしたらごめんね、メグミちゃんは」言いかけて、「メグミは環境保護にとっても興味があるんだから、将来そういったことを仕事にしたらいんじゃないのかな」

メグミは目を丸くして俺を見つめる。

「NPOとかそういうのがあるじゃない。そういうことに熱中することがいいんじゃないかと思うよ」

先輩がすかさずつつこむ。

「ミノル、なによその上から目線は。あんたに言われなくたってメグミはちゃんと考えてるわよ」

モエも「ミノルったら一体どうしたのよ」と吹き出しそうな顔になる。

俺はたぶん、自分のことはともかく、少しづつ皆のことがわかってきたことで、それぞれにそれぞれの思いというものがちゃんとあって、それが何だかまぶしくて、つい余計



なことと知りながらそんな感想を伝えたくてしょうがない気持ちになるのだ。

部長がおもむろに言う。

「いいんじゃない。それぞれキャラクターがはっきりしてきたってことだよ。難しい話をするようだけでも、こういうコミュニケーションにおけるオープンマインドな態度がもたらすフレンドリーな関係が今の社会には不足しているのさ」

うーん、冗談なのか本気なのかよくわからない話ですね。

いや、こういう軽さが不足しているということか。なんだか酸素が足りてない感じ。

モエが「わたしねえ」と切り出す。「児童施設に行くんだ」

そうだったね。

「実はすごく緊張しているんだ」

何で。

「どうやって仲良くなればいいのかって考えたら、どうしようと思うんだ」

部長がはげます。

「それはもう、心を開いて接することじゃないかな。相手はきっとそんなモエ君の気持ちを感じてくれると思う」

メグミもはげます。

「モエちゃんはもっと自信持っていいと思うよ。すごく人懐こいと思うもの」

俺は、そういえばと考えるのだ。

モエはすごく潔癖なところがあるから誤解されやすいところがあるのです。

たぶんそれを彼女は気にしているのだろう。

俺はどう言ったものか少々迷っていると、先輩がふっきれと言わんばかりに、

「何よ、失敗を恐れて成長はないのよ。正面からどーんに行ったらいいのよ」まくしたてる。

俺も「やってみなけりゃわかんないんだから、あんまり気にしないで思ったようにやればいいと思うよ」と言ってみる。

先輩は、「あんたが言うと、素直に聞けないのよね」としかめつらで言う。

はいはいそうですか。

「ミノル君はどこへ行くの」部長に訊かれる。

「はい、老人ホームでのボランティアです」

俺は窓から見える丘を指し、「あの丘の上にあるホームだそうです」と言う。

「あら、去年あたしが行ったところだ」と先輩が言う。

「そうなんですか。確かお知り合いかなにか...」

「実はね」と少し小声になり「ウチの婆ちゃんがいるのよ」

「えーっ、そうなんですか。どうしようなんてごあいさつすれば...」

「なんであんたがそんな心配するのよ」言ってから「大丈夫よ。婆ちゃんとは逢うことないと思うから」ちょっと寂しそうな目で言う。

まずいこと言ったかな、俺。

「ええと、経験者から何かアドバイスはありますでしょうか」と訊いてみる。

「そうね。まあ元気に明るくはきはきやれば大丈夫よ」とのお言葉。

何だかわかったようなわからないような。

「なにしろ、人を相手にする仕事は全てそうだけど、こちらから働きかけるのが基本なんだから。積極的にやんなさい。あとはまあ、なるようにしかならないから」

課外授業というものは朝が早いことが相場となっている。いつもより早い電車でターミナル駅に着き、駅前ロータリーで迎えに来てくれるのを待っているのだ。

まだ人影もまばらで、指定された時間には余裕がある。

所在なげにたたずんでいる俺は、なんだか自分を持て余していた。

やはり緊張しているのかな。

人の字でも飲んでみようか。

そんな他愛もないことを考えて気を紛らわせていたら、一台の白いワンボックスが滑り込んでくる。お迎えが来たのだ。

はっとして車へ近づく。

「川合さんですか」と運転席から中年女性が声を掛けてくる。

「はい。よろしくお願いします」元気にあいさつ、と。

「よろしくね。後ろに乗ってくれる？」

スライドドアが自動で開き、俺は乗りこむ。折りたたみシートで後ろには車椅子用のスロープが付いている。

「狭いけど我慢してね」そう言うと、発車する。

俺はとりあえず窓の外を流れる景色をながめる。

このターミナル駅に降りるのはいつ以来だろう。普段は支線に乗り換えて学校との往復ばかりだから、本当にひさしぶりのような気がする。

たぶん、記憶があいまいなころ以来ではないだろうか。

早朝のまだシャッターの降りた商店街を抜け、市街地を離れてしまうとあとはただひたすら丘を登ってゆくばかりだ。

けっこう急な道で、右に左に折れ曲がりながらぐんぐん登ってゆく。

道の両側には、ぶどう棚やりんごの木、いちごハウスやもも畑が見える。

谷間を吹き抜ける涼しい風が果物の栽培に適しているのだ。

そんな果樹園の丘を越えて、車はなお進んでゆく。

けっこう走っているのにまだそれらしい建物は見えない。

「けっこう登るんですね」話しかけてみる。

「そうね、この丘のてっぺんだからね」にこやかにルームミラー越しの視線が返ってくる。

「環境は抜群なんだけど、街から遠いのがねえ」と付け加える。

「やはり環境は大事なことですか」

「そうねえ、なにしろ静かで空気がいいことは重要なことよ」

すこし間があって、

「終の住処になることも多いから、安心して暮らせるということはせめてものことよ」

ついのすみか、か。そんなこと考えたことも無いや。

そんな俺の様子を察したかのように、

「そんなに気にすることはないわ。利用者さんにはできるだけ明るく接してあげてね」

そうか、先輩の言ってた意味は、そういうことなのか。

ともかく、初めてのことだから緊張するけど、普段どおりの感じでやってみるしかない。車はさらに急になった道をぐいぐい進んでゆく。

景色はいつしか杉が植林された林道というふうになっている。

「もうすぐだからね」

石造りの立派な門に入る。そしてプラタナスの並木が美しく整備された広大な芝生がひろがる敷地のはるか向こうに白亜の建物が見えてきた。

エントランスに車は静かに滑り込む。

「入って右にソファがあるから、そこで少し待っててね」言い残し車は去る。

中に入ると誰もいない。静寂につつまれている。

緊張してソファに掛けてしばし待つ。

「ごくろうさま」奥から施設長が出てきて「よろしくね。日課を説明しますからこっちへ」ということで奥へと案内される。

丸テーブルがいくつか置かれた部屋で、お世話になる職員を紹介される。

「ええと、高一だから十六か。ご家庭に高齢者の方はいらっしゃいますか」

「いいえ、おりません」

「そう。それじゃね」とポイントを教えてくれる。

繊細さを持って接すること。自分を主張しすぎないこと。気分の変化にあわてないこと。

「それにね」と付け加える。

「孫くらい離れているから、かえって感覚とかが合うこともあるけど、あくまでも尊敬の念を忘れないでね」

「それはどういうことでしょうか」

「たとえばね、レクリエーションなんかでとても無邪気に楽しむのはいいんだけど、子供を相手にするときとは違ってね、あくまでも遊んでもらっているという気持ちを持つということなのよ。いろいろ教えて下さいという姿勢で接するということよ」

なんだか難しい話なんだなあ。

「まあ、基本は元気にはきはきとね。いいかしら」

なんか緊張するなあ。

薄暗い廊下にゆったりとした音楽が流れると同時に、電灯が次々と灯り廊下に面して堅く閉じられていた扉がばらばらと開く。

ある者は杖をつき、別の者は車椅子でそれぞれの部屋から出てくる。言葉を交わす者は誰一人としていない。皆黙ったままそれぞれのペースで奥へ奥へと移動してゆく。

「さあ、いっしょにいらっしゃい。これから朝のあいさつを皆にします」

俺は連れられて皆のあとについて奥へ歩く。

その部屋は大きな窓からやわらかい日差しが差し込み、明るい雰囲気の中で囲まれていて、角が丸く低いテーブルや車椅子でも入れる高さのテーブルなどがいくつも並べられている。

皆はそれぞれの定位置であろう場所につく。

なんだろう、部屋の造りはとても明るく華やかで雰囲気であるのに、まるでそれとは関

係ありませんという風情で堅い表情をした老人達が、ただこちらをじっと見ている。  
正直俺は強烈な不安感に襲われる。  
「おはようございます」中央に歩み出た施設長が静寂を破るように話しかける。  
「今日はとても天気がよろしいですね。みなさん、ご気分はいかがですか」  
皆、にこりともせずただうなづく。  
「今日はみなさんにご紹介したい人がいます」  
施設長は俺に目でうながす。  
俺は、一歩前へ出る。  
「今日一日みなさんといっしょにすごしてくれる人です。お名前をどうぞ」  
自己紹介をするようにということだ。  
「僕は川合といいます。不慣れでみなさんにはご迷惑をお掛けすることもあるかと思いますが、どうぞよろしく願います」つとめて明るくゆっくりと一言一言話した。  
すると、前の方に座っている女性がパチパチと拍手してくれる。他にも何人か笑ってくる。  
すこし安心する。  
「みなさん仲良く願います」施設長がしめる。  
「川合君、いいわよ。こっちへ」と担当職員に呼ばれるままついていくと、食事のトレーを乗せたワゴンが数台ある。  
「一人一人違うから。私が配るから、これを押してついて来てくれる」  
指定されたワゴンを押してついて歩く。  
全員の手元に食事がゆきわたると、「それじゃ、こっちへ」とうながされて、車椅子に座った男性のところへ行く。  
「彼、伊藤さんは自分で摂れるから、見守りをしてください」と指示される。  
俺は「こんにちは」と声を掛ける。  
硬い表情で俺の顔をチラリと見ると、「どうも」と一言だけ応えてくれる。  
「それではみなさん。いただきます」  
声が掛かると、皆それぞれのペースで食事を始める。  
介助を受けながら食べる人もいるが、伊藤さんは手を合わせて感謝を表現してから箸を使って器用に食べ始める。俺はただ見守るだけだ。  
アジのひらきを丸ごとばりばりとかじってはご飯をかき込む。  
あまりじっと見つめられても食べづらだろうと考えて、周りの様子をうかがう。  
それぞれ食事の内容が違うのは、そしゃく能力に違いがあると体調によって食材や調味料が違うということなのだそう。  
伊藤さんは普通の食事ということなのだ。  
ご飯とアジと目玉焼きにみそ汁。  
「君。川合君だったね。悪いけどお茶取ってくれるかな」俺は我にかえる。  
「はい。ええと、これですね」  
すこし離れた場所にある急須を取って、湯のみに注ぐ。  
「すまんね」とだけ言って、また黙々と食べる。  
俺も何だかお腹が空いたなあ。

そんな調子で、皆が食べ終わるまで見守りを続けてあと片付けを手伝い、皆を個室へ見送ってから交代で職員の朝食となった。

打ち合わせ室でアジ定食をいただく。思っていた通りの味覚に頬が緩む。

がつがつ食う俺をみて「おかわりならあるから」と苦笑される。

とりあえずまだ始まったばかりだし、食えるときに食うことなのだ。

ごはん三杯とアジ一匹追加と目玉焼き四つを一息に平らげ、お茶を胃に流し込み一息つく。

「これから個別のプログラムでの散歩や運動の補助をしてもらいます」と指示される。

まずは、足の悪い女性をリハビリ室へ連れてゆくのを手伝い、歩行器をつかったリハビリの見学と介助をする。

そして部屋まで送りとどけたあと、

「それじゃ次はね」とスケジュール表を見ながら、「散歩の介助をお願いするわね」

さきほどの伊藤さんを、車椅子を押して外の遊歩道を散策することになった。

「よろしくね」と任されたものの、何を話そうか思いつかないまま、ともかくゆっくりと歩くことにする。

綺麗に刈り込まれた芝がひろがる広大な敷地を縫うように設けられた遊歩道には何人か歩いている姿が見える。建物から見とおせるように低い位置にある花壇の色鮮やかな花々のほかには視界をさえぎるようなものが一切排除されているので、どこにだれがいるかすぐわかるようになっている。

俺は、「どうですか、あの先端まで行ってみましょうか」と柵に区切られた見晴らしのよいテラス状の場所を指して言う。

「ああ、お願いしますよ」伊藤さんは静かに答える。

景色を楽しみながらゆっくりと歩いてゆく。

風が心地よい。

テラスから見える景色は、眼下の果樹園のひろがり、その向こうに霞んでいる街並み。そしてそのはるかかなたに淡い稜線が空との境へ溶け込みそうな連峰が望める。

高空を綿雲がゆったりと流れてゆく。

その景色に息を吞まれしばし言葉を失う。

下界から隔絶された静寂が支配する住処。

美しくとても恵まれた環境ではあるけれども、なぜかとても悲しくなる。

まるで世界から忘れられ見捨てられたような寂しさ。

心の底から湧き上がる感覚に圧倒されてしまう。

「君はどうしてここにいるのかね」声が聞こえる。

一瞬何のことかわからなかった。そしてそれは、伊藤さんが俺の様子を心配して話しかけたのだとわかる。

「はい、ええと、すみません。どういう意味でしょうか」

しどろもどろになりながら、それだけ言うのが精一杯だった。

「君はどうしてここへ来ようと思ったんだい」くり返し訊かれる。

「はい、あの、ボランティアを体験する授業というものがあまして、その、いろんな選択があったんですけど、まあ、興味を持ちまして、それで、一度体験してみようかと思いでまして」

はたして答えになっているだろうか。

沈黙が続く。どこからか甘い香りがしてくる。

「君はまだ若いからわからないかもしれないけれど」前置きをして伊藤さんは話す。

「ここから見える風景というものは、この施設を設計した者は、ただ綺麗だと考えたことだろう。季節によって変わる風情というものは自然の作り出す、手入れの必要の無い庭園のような美観を提供してくれる。まるで永遠にありつづけるものとしてデザインしたつもりだろう」

ひとつ咳払いをして続ける。

「だがね、ここはまるで人工的であまりに現実から切断されて、時間が止まったように変化がない。まあ、永遠を表現した意図とは合っているとも言えるがね」

そして、遠くを見るような、まるでなにも見ていないような目をして、

「まるで、そうだな、もうこの世のもので無くなったような錯覚にとらわれる」

俺は戸惑っていた。言わんとすることは俺が漠然と感じていた心象風景を指摘するものだ。

しかしそれは、あくまで俺の感傷が見せる心象に過ぎないのか、この場所がそういう意味をもつところだという現実なのか、あえてはっきりさせるべきでないと思った。

ついのすみか、言葉だけが頭を通りすぎる。その先入観がそうさせるのか。

「こんな話をしても、まだわからんよな」

黙っている俺を見上げ、寂びしそうにつぶやいた。

俺はもう何も言えない。言葉が出てこない。ただ胸が苦しかった。

「そろそろもどってくれ」それだけ短く言うと伊藤さんはそれきり黙ってしまった。

俺はただゆっくりと車椅子を押して歩きつづける。何だか時折吹く風までよそよそしく感じる。無言でただ歩きつづけた。

午前中の介助補助と昼食の介助を終えた後、交代で昼食を取りながら俺はただ考えていた。

ここは設備も充実しているしそれぞれの状況に合わせたプログラムでお世話がされている。俺のような外部の者から見れば非のうちどころなどない。それでもすっきりしないのだ。

本当にこれでいいのだろうか。

俺は率直に疑問をぶつけてみたくなった。

「あの、すみません、ひとつお伺いしたいことがあります」担当職員に訊く。

「午前中からいろいろな方の介助補助をさせていただいて、気になったことがあります」

「なあに？」

「その、皆さんはここでの生活に満足されているのでしょうか」

やれやれという顔をしてから静かに答える。

「そうね、満足というのはどうかしらね。誰だって身内から離れて生活したいとは思わないでしょ。身寄りがないということならそれもしかたないと思えるかもしれないけど、実際はそればかりでもないからね」

俺の目をじっとのぞきこむようにして続ける。

「でもね、それぞれ事情ってものがあるわけだし、思い通りにならないことは仕方ないことだとあきらめるほかないんじゃないかな。私はここで生活している利用者さん達が決して不幸な部類に入るとは思わないわよ。でき得る限りのことはしているつもりよ」

言いきってからさらに付け加える。

「そこから先はね、私達現場にいる者がどうこうできることを超えているの」

最後はまるで自分に言い聞かせるように言ったあとで、にっこりとして、

「伊藤さんでしょ。あの人はすこし理屈っぽいところがあって、難しいところがあるのよね。でも根はいい人だから、まあ気が済むまで聞いてあげることが一番なんじゃないかしら」

そうアドバイスをされた。

仕方がないことか。そう言われてしまえば、俺にはそれ以上何を言うことができるであろうか。どうしようもない。

午後はレクリエーションの手伝いをする。音楽に合わせて身体を動かしたり、ボール遊びをしたり、それぞれの体調に合わせたプログラムで実施する。機能訓練も兼ねているのだ。

俺は気になって伊藤さんの様子を見る。

皆と合わせて身体を動かしているが、やはりどこか寂しげだ。

俺は何か話しかけようと思うのだが、言葉が出てこない。

何もできないまま時間だけが過ぎてゆく。

レクリエーションが終わり、それぞれの個室へ送りとどけた後、俺は意を決して伊藤さんを訪ねてみることにした。

「こんにちは。お邪魔してよろしいでしょうか」

「おお、どうぞ」

受け入れてくれる。

「あの、午前中のお話ですけれども」

「ああ」

「正直よくはわかりません。こんなことを言っているのかどうかわかりませんが、ここは精一杯のいまできる限りの場所だと思うんです。足りないところはあるかも知れないけれど、いまのところこれしかできない、そう思うんです」

「ああ、なるほどね。いや、すまんすまん、何も君を責めているんじゃないんだ」

窓の外をしばらく見つめてから、ゆっくりと話し出す。

「これは、私達の責任なんだよ。この状況を作りあげたのは私達だからね。それは事実だ。自分達に都合がいい社会というものを、もちろん妥協もずいぶんしたけれども、自分達で考えうる限りのことを実現してきたからね。その結果なんだからね。君達に罪はないのさ」

すこし間をおいてさらに続ける。

「だけどね、私達はもうすぐいなくなる。そのあとどうするのかは君達で考えるということだよ。これからを決めるとき、せめて私達が犯した失敗というものを学んでおいてほしい。先輩として君達に言えることはその一点だけだよ」

そして、すこしおだやかな顔になり、

「まあ、しっかりやりなさい」と俺の手を握った。

その手はとてもあたたかく感じた。

俺は部屋を辞去したあとも、その短い会話の意味をずっと考えていた。

俺の中にある、現状を肯定する部分と否定する部分のうち、否定するほうははっきりとした形をまだ成さない違和感として存在している。

いつかその正体を見極めることを宿題として託されたということだろうか。

今はまだなにもしないけれど、いつかはやらなければならない責任はすでに俺の側にあるのだと言われたということだろうか。

そうやって少しずつ世代交代が行われていくのだと予告されたということだろうか。

俺はここに、いままで関心の薄かったことにも積極的に知ろうとする姿勢を持たなくてはならないと自覚するために来たのだ。そういうことなのだ。

ともかく、すこし気分が晴れたところで、その後の見守りや夕食介助をひと通りこなして俺の実習は終了となった。

「今日の経験をこれからの生活になにかしらプラスとなることを願います」

施設長からのねぎらいの言葉を聞きながら、すこしは進歩できたのかなと思った。

「なによ、元気ないわね」

先輩はいつも元気なのである。

部長と三人でお茶をしながらとりとめのない雑談をしているうち、そうだと思い出して俺は話してみるのだ。

「社会保障って、気持ちの部分を抜きにして考えていると空しいような…」

部長はすかさず俺の心のうちを読み取ったかのごとく、

「それはね、考え出したらきりのない話で、つまりまだそこまで完全に保障できるほど社会は発達していないんだよ」と先手をうたれる。

先輩は「何の話よ、一体」とぼかんとしている。

俺はそれでも続けるのだ。

「それなら、その不完全な部分を、今は無理としても、どうやってこれからうめることができるのか、その案みたいなのははたしてあるのでしょうか」

心の底からそう思うのだ。

部長はすこし困った顔になって考え込んでしまう。

先輩はやっと話の流れをだいたいつかんだみたいで、

「そうねえ、こう考えればどうかしら。ここ最近、変化が急なのよ。だからいままで先送りしてきたものが一度に噴き出して收拾がつかなくなっている。一種の混乱期なのよ」

そこまで言って、言葉がつまって黙ってしまう。

かわりに部長がおもむろに口を開く。



「いままでかろうじて保たれていた家制度は、本当はすでに機能していなかったのだろうけど、ともかく問題点はあまり表面化してこなかった。みんな個々でかかえてなんとかやりくりしていた。それがもう限界で一度に社会にのしかかってきた。そういう状態だから、いまこうすればという明確な答えは出せないけど、はっきりしているのは、いままでの制度では無理だということさ。すでに遠心力のほうが勝っていて、ばらばらになる方向に行かざるをえない。個別になることによる楽な部分をもう捨てることなどできない。だから、個別になることの害をいま見極めて、それを対処療法的にどうにかするという方針でいくしかないのだろう。そう思うよ」

皆黙り込んだ。

社会保障といっても範囲は広いけれども俺は思うのだ。

法律や制度でカバーしきれない、情や幸福感までいつのまにか社会が責任を負わされている。

何か釈然としないのだ。

これは社会の問題ではあるけれども、そのとき社会といっているものの正体は自分以外のものという認識ではないのか。

それは、無責任ということなのではないだろうか。

このままではどうもうまくいかないことはわかっているけど、まあ自分一人ぐらい関わらなくても他の人達が何とかしてくれるだろうと、皆がそう思ってじっと息を殺して様子をうかがっている。そんな姿が浮かんできたのだった。



## 第七章 親子って難しいのです



中間試験で数学と英語の赤点を取った俺は、放課後職員室へ呼び出されてきつくしぼられる羽目になってしまった。

ミレイ先生は不機嫌でイライラして投げやりな調子で「あなたのことは少し油断をしていたわ。こんなにできないとはね」と言う。

「ともかく、このままではどうにもならないから、来週から補講を行います。放課後月水は数学、火木は私が英語をやります。いいわね」

しかしながら、俺は正直うんざりしていたのだ。

だいたい教師だって毎年同じ内容をくり返し教えることにほとんど飽きているに違いないのだ。そういう気持ちが生徒に伝播して、授業をつまらなく感じさせるのだ。

話しつつけるミレイ先生の顔をぼんやり見ているうちに、表情が薄くなっていき、しまいには肌色をしたかたまりに見えてくる。

ああ、この時間がたまらなく無駄に感じられる。

「それじゃ、そういうことだから、よろしくね」

そう念を押されたあと、俺はただぎこちなく頭を下げ、職員室をあとにする。

ああ、勉強なんてなんの意味があるんだろ。めんどろくさいなあ。

「あんたね、それってね、ただのね、わがままだよ」先輩は一刀両断にする。

「だいたい勉強なんてものはね、平均的にやるとけばそれでいいのよ。あんたは選り好みしすぎなのよ」となおもたたみかける。

俺は一方的に言われっぱなしなのもしゃくなので、とりあえずろくに考えもせず言葉を放出するのだ。

「そうはいつでも、興味ってものがあります。だっておもしろくないものを見ても何も残らないでしょう」

さえぎるように「でもね、限度ってものがあるでしょ。なによ赤点で。それは勉強しなさすぎてことよ」そうまくしたてられる。

俺はもうどうでもいいやという気分になる。言うとおりの、適当に平均点とれば何の波風もたたないのだ。それをしなかった俺の責任だ。そんなわかりきったこと言われたってしょうがないのだ。ああつまらん。何だよこれ。やってらんないや。

「まあ、そんな頭ごなしに言うことが問題の本質ではないよ」部長が助け舟を出そうとする。

「興味の無いことは頭に入らないのは事実だ。それじゃなぜ興味がわからないのか考えないと意味がないよ」と俺の顔を見て続ける。

「数学は苦手なのに、物理とか化学とかはわりとできるのはどうしてだと思う？」

俺は考えてみる。

物理とか化学とかには、顔があるように思うんだよな。そうだよ、生きている感じがするんだ。それに比べて数学って何か無機質というか。それで好きになれない。

俺はその心の内を言葉にしてみる。

「数字の羅列って突き放されたような印象があるんですね。物語がないっていうか」

部長はひとつうなずいてから、話し始める。

「それは、まだ算数と数学の違いを感じるほど深く学んでいないからだよ。物理や化学にだって数式や記号がいっぱい出てきて、人によっては冷たい印象を持つ場合もある。要は物語を感じられるほど深く学ぶにはどうすればいいか考えればいいんじゃないかな」

そう言ってカウンターの方へ廻り何やらごそごそ探し物をして、ミルクティーと一緒に一冊の古ぼけた文庫本を置いた。

「興味を持つ一つの方法として、数学にだってそれに一生を捧げた人間のドラマというものがあるというのを知るのはどうかな。よかったらこれ読んでみないか」

それは、著名な数学者がいくつかの有名な数式を解き明かした数学者達の話のわかりやすく解説した読み物であるらしい。なるほど。俺はすこし冷静になれたような気がした。

「ありがとうございます。お借りします」

興味を持つためには俺のほうから歩み寄るしかないということなのでしょう。

「あの、英語の楽しさって、やはり会話することから始まると思うのです」

メグミが遠慮がちに言う。

「英語を話せることで、多くの国の人とコミュニケーションをとることができるようになって、そこから自分の知らない文化とか価値観とかに触れるおもしろさが生まれると思うのです」

なるほど、模範的回答だけど、誰にでも受け入れやすい考え方である。

「なにしろ、勉強って長い道のりだから、あせらずにおもしろいところを探せばいいんだ。それにね、授業の成績だけが物事を計るものではないんだから、あんまり深刻にならずにリラックスしてやればいいんだよ」

部長はいつもの通りにおだやかに語りかけるのであった。

時計を見るともう日付が替わっている。毎日放課後に要点を集約した補講を受け、次回までの宿題を出されることのくり返し。もちろん通常の授業もあるから最低限の予習復習も必要となってくる。

俺はいままでどれだけさぼっていたかを身にしみて感じているのだ。これがずっと続くのかと思うとうんざりするのだが、多少なりともわかってきたことは、ある程度苦しい時期を過ぎれば人間というものによくできたもので、どうやれば要領よくこなすことができるのかということ自動的というか自然にというか身につけているということだ。もちろん決してほめられるほど学力が上昇しているわけではない。必要最低限度のレベルというものを維持することに必要とされる労力というものが効率化されるということだ。それでも、やはり毎日午前様はきついのだ。今日はもう寝ようかな。

ひかえめにドアがノックされる。こんな時間に何だろうと思って振りかえると、マカロ

ンとチョコパイとそれからアップルティーのおやつを持ってかあちゃんが入ってくる。申し訳無い。

実は学校から呼び出しの通知が届いていたのだ。俺が思うよりも物事は深刻さを持っていたのだ。

それとも、この程度のことで深刻ぶるのが社会というものなのか。

「まあ、体を壊さない程度にがんばんなさい」それだけ言うと部屋を出ていく。

本当に申し訳が無い。こんなことはこれっきりにしないと。

「そうだ、あのね」扉からひょこり顔だけ出してかあちゃんは言う。

「学校へはね、父さんが行ってくれるって」

えっ、なんだよそれ。俺は面食らう。

子供のことなどほぼ放ったらかしの親父が一体どういうつもりなのか。

「なんでまたそんなことに」俺は気持ちを素直に言葉にする。

「父さんも心配してるのよ。そういうことだからお願いしたからね」

そう言い残して、今度は本当に部屋をあとにする。

まあいい。どっちみち俺のせいなんだからしょうがないんだ。

おやつをいただきながら、ぼんやり考える。こんな中途半端な状況をあと数年続けたのちに来るであろう大人という期間ははたして刺激的であろうか。それとも退屈であろうか。予想してもしかたのないことだけど、そんなことが気になりだしたということは、それを現実味を持って感じている証明なのだろう。

ああ、いつものことながら雑念が尽きることがない。

あとすこしやっておくか。目が冴えてきた。

いまのところ俺がやらなくてはならないことはこれなのだ。そう言い聞かせて心のゆらぎを押さえておくしかあるまい。もう義務教育ではないけど、ほぼ義務となっている高校生活をこうして過ごすほかない。

さあ、さっさとかたづけて早く寝よう。

「それは誤解なんだよ」部長のその言葉から始まったのは、教育の義務という話なのである。

「ええと、教育を受ける義務があるということではないんですか」

俺は素朴に訊いてみるのだ。国民の義務は、教育と勤労と納税の三つだよな。

「教育を受ける権利であって、義務は親が子に教育を受けさせる義務ということなんだ」

モエは率直な疑問を口にする。

「何で義務なんていうのかしら。教育を受けさせたくない親なんているのかしら」

「まあ、原則というものは当たり前すぎることだからね。わざわざ言わなくてもいいような話だけど、それだけ大事なことだと強調しておかなくてはならないんだと解釈すればいい」

「何だかよくわからないなあ」

部長は真剣な表情で話を続ける。

「こういう考え方を紹介しておきたい。人間は法の下での平等を保障されているけれども、それはただ待っていて与えられるものじゃない。自分の意思で獲得しなければなら

ない。法の下において自由を保障されているけれど、自由とは何であるのかを理解していないと何をしたいのかどこまでしていいのかわからない。そういった法の下に許されていることを実行するために必要な理性というものは、先天的なものじゃないんだ。それなら子が理性を獲得する方法は何であるのかというと、それは親から子への教育なんだ」

目でここまではいいかなと確認すると、さらに続ける。

「そうだとしたら、教育というものは学校で実施されているものが全てということじゃない。もっと広い部分を指して言っているんだ。だから親は子に社会で生きていくために必要なことを教育する義務があるということは当然なんだ。その中に学校へ通わせて教育を受けさせる義務も含まれていると考えたら、自然なことだろう」

メグミがぼつりとつぶやく。

「ヒトの社会だけに限ったことではないのですね。生物すべてに当てはまる親から子への生きるためのことを伝える行為そのものと考えればいいんですね」

俺は、なるほどそうならとてもわかりやすい話だと思う。

そして同時に、そのことをどれだけ意識して皆生活しているのかという疑問も生じるのだ。

すると、自分でも信じられないほどの感情の噴出が始まった。

「それなら、子供が教育を受ける義務を怠っているんじゃないじゃなくて、親が子供を教育しなければならぬ責任を果たしていないんじゃないのかな」

皆びっくりしたように俺を見る。

「たとえばさ、仲がいい親子とか言うけど、子供を甘やかすのは親が面倒くさいことから逃げて、好き勝手させることが優しい親だと視点をすりかえているだけのことなんじゃないかな」

「ミノル、あんた何かあったの」と先輩に訊かれ、俺は内心ギクリとした。

頭に浮かんでいるのは、放任主義の親父の顔だ。

仕事が忙しいという理由でほったらかしにしてもいいと自分に言い聞かせているであろう親父の顔だ。

しかしそんなことは、俺の小さな問題で、もっと広い視野での不満を感じているのだと自分を分析して言葉をつなげる。

「最近なんだか親と子ってとても微妙な関係にあると思うんです。どうしてそうなったのかなんて考えたこともなかったけど、いま急にそんな気がしたんです」

皆それぞれ言いたいことがある顔してるけど、何だかうまく言葉にできないような雰囲気なのだ。

モエが「家族っていったい何なのかな」とぼつり呟く。

俺の頭の中でひらめくものがあった。

「そう、これは家族ということなんです。つまり、親子の問題点はその前の親子に何があったのか、つまり俺達からすればおじいちゃんおばあちゃん世代がおやじやおふくろ世代とどう向き合ってきたのかということとをひも解かないとわからないことなんだよ」  
そこまで一気にしゃべって、あれ、俺今日どうかしてると思った。



俺は何だか引っかかるものを無理やり飲み込んだような違和感を抱えながら、深夜の勉強をしているのだ。これは義務だ。そうとしか考えられない。いつかこれを権利だと思える日は来るのだろうか。まあいい。今はとりあえず今度の追試で合格して、人並みの生活に戻ることを考えればいいのだ。

集中するのだ。早く終わらせて寝なきゃ。

俺は思うのだ。こんなことで許されているのはとても気楽なことなのだ。とりあえずやることが決まっていてそれをただ何となくこなすことで時間は経過していく。深く考えることなどない。ただ目の前にあることをこなせばいいのだ。

ああ、こんなでいいんなら人生なんて楽勝なのにな。

またどうでもいいことを考え始めてるぞ。早いとこ宿題片付けて寝なきゃ。最近寝不足で変なことばかり頭に浮かんでしょうがない。どうかしている。どうにかしなきゃな。

「家族というのはね」部長は思い出したような調子で語る。

「社会の基本的なしくみがそなわったものなんだ。本来は家のルールというのがあって、不満があれば話し合っただけでルールを変えていく。経済的弱者である子供やお年寄りを労働力を持つ家族が養う。外部との接触や交渉というものは外交みたいなものだ。本来はそ

の中で育つことで自然と社会というもののありようを身に着ける場所なんだよね」

少しちゅうちょして、部長は告白を始める。  
「こんな話をするのもどうかと思うけど、僕はね、家族というものを知らずに育ったんだ。いわゆる孤児なのさ。今はある篤志家に世話になって生活が保障されているけど、とてもつらい思いをした頃もあった。まあ、何で今そういう話しをするかっていうとね。家族ってものを知らないゆえの、あこがれもありまた危うさというものもわかる気がするんだよね」

皆をぐるりと見廻してから続ける。

「本来の家族の姿ってね、実はもうすでに壊れているんだよね。どうしてそうなったかを僕なりに考えてみるとね、家制度ってものがあってね、それはとてもじゃないけど今の世の中では窮屈で前時代的で受け入れられないものだったんだけど、その代わりと言っては何だけれども家の中での教育というものにしっかりした原理原則があって、それをなぞるように実行すればまあ平均的社会生活を営むに足ることは身に着いたというわけさ」

「それは具体的にはどういうものだったんですか」とモエが訊ねる。

「そう、わかりやすく言えば、父権とかね、なにしろ父親を中心にした社会なんだよね。絶対的な権力者として家長として君臨していた。だから、国家がそういうものだった頃は、家というものがその縮図として成立していたから、ある意味とてもわかりやすかったんだよね」

モエは苦虫をかんだ顔をして「わたし、そういうの嫌い」と一言。

「まあ、今はそんなこと通用しないんだから、それでいいんだけど。問題はね、時代が変わった、自由と平等の社会になりました、じゃあその時代の家族像って一体何だろうとあったときに、迷いがあったんだと思う。社会の縮図としての家族ではなくなった。しかし、どんなに新しく自由で発達した社会になろうともそこにはルールがあって作法と

いうものがあるって常識というものがある。それを一体誰がいつどこで教えるのかという責任の所在があいまいになっていることが、家族ってものの危うさと関係があるんじゃないかって思うんだよね」

そこまで聞いていて、俺はいまひとつ納得できないものがあった。俺達はそんないいかげんな扱いをされているのだろうか、いまひとつ実感がわかない気がしたのだった。

こう毎晩遅くまで勉強ばかりしていると、そろそろ頭がおかしくなりそうなのだ。だから余計なことをなるべく考えないようにして、ただ追試に受かることだけ考えて、勉強に集中しようとするのだけれども、元々それができるならこんな無様なことにはならなかったわけで、そう考えるとまた余計なことばかり頭に浮かんできて、ますます集中できないのである。

ああもう全部投げ出せばどれだけ楽だろうなという欲求とそんなことして一体何になるのかという理性が衝突するのである。

そうだ、理性なのだ。その理性を一体誰が俺に教えたというのか。そんなもの学校で教わるものではないのだ。だったら誰から教わったのか。それはやはり親なのだろうか。しかし、具体的に思い当たるようなことは何一つ無い。それならばもともと備わって、いるわけがない。そもそも俺に理性なんてあるのかな。だいたい、理性って何だよ。ああわからない、何でこんなこと考えるんだ俺は。

そうだよ、こんなことしてる場合じゃないんだ。俺は頭をぶんと一振りして眠気を払い教科書に集中した。

放課後、俺は進路指導室の前で親父を待っている。会社を早退して来るという。

心の中では申し訳無いという気持ちが無いわけではない。

しかし、そう素直になれないのは何とも言えない反発心があるからだろう。まあ、今回のことは俺に非のあることだから、そんなことは言えないのだけれども。

薄暗い廊下で待っていると、遠く玄関のほうからシルエットになった見覚えのある姿が左右に揺れながら近づいてくる。

「おう」「ああ」

何とも形容しがたい気恥ずかしさでお互い言葉にならない声をかけあう。

俺は指導室のドアをノックし、入室の申告をしてから、親父に入るよううながす。

「お忙しいところお呼び立てしてすみません」

「これがお世話になっております」

型どおりのあいさつを済ませると、ミレイ先生は席をすすめる。

「今日お越しいただいたのはほかでもありません、川合君の成績についてですが、まだ入学されて最初のテストですから、苦手を認識して重点的に勉強をすればまだ十分間に合います。どうかご家庭でもご協力をお願いいたします」

ミレイ先生は、とても慎重な言いかたをする。

「全くお恥ずかしい限りです」

親父は俺の顔をちらりと見てから頭を下げる。

ミレイ先生は、すこし硬い表情になって続ける。

「実はですね、川合君には勉強以外でも少し心配していることがございまして」

俺は意表を突かれた気がした。一体何を。

「川合君には少々物事を難しくする傾向が見られます」

「ほう、それはどういうことでしょうか」

親父も意外そうな顔で訊く。

「単刀直入に申し上げます。決まりに対して批判的なところがございます。視点は鋭いところもあるのですが、細かいことにこだわりすぎて何事も複雑にするといいですか、既存のものに対する基本までさかのぼった再考をしようとする傾向がございます」

親父は黙って聞いている。

これはどういうことなのだ。これが目的だったのか。

俺ははめられたと思った。

ミレイ先生はこれまでのことを心の中ではおもしろく思っていなくて、今度の機会に俺に圧力をかけようとしているのだと解釈した。

俺は無性に腹が立ったのだ。こんなことは直接俺に言えば済むことなのに。

どうしてこんなまわりくどいことをするのか。真意がまるでわからない。

「川合君にははっきり言って体制に批判的な傾向がみられるということです。それで、お父様にご確認させていただきたいのは、こういった考え方はご家庭での教育方針ということなんでしょうかということです」

ミレイ先生は、青ざめた顔で親父を見据えている。

そして俺はそれまで聞いたことがない真剣な声で話し始めた親父に驚かされる。

「失礼ながら、おっしゃる意味がわかりませんな。体制に批判的で何か不都合があるのですか。批判に耐えられないようなものは変わるべきでしょう。物事を基本に立ち返って考えることはそれほど特別なことなのですか。決まったことはおとなしく聞けということですか。全く理解不能なもの言い方ですな」

発言しようとする俺を目で制して続ける。

「成績ががんばしくないことはお恥ずかしい限りです。しかし、今言われたことは何ら問題の無いことだと考えます。いかがなさいますか」

親父の物言いにミレイ先生は合点がいったという顔になり発言する。

「失礼だとは思いましたが、お父様の過去について調査させていただきました。先鋭的な活動をされていたようですね」

「ああ、そういうことですか。失礼ながらお若い先生はご存知ないかも知れませんが、そういう政治の季節というものがあったというだけのことで。御覧の通り、今の私はただの世間にまみれた人間ですよ。先生にご心配されるようなことはありません」

親父は厳しく断じた。

「それにね、私の過去がどうであろうと、息子は自分の意思で自分の考えで行動しているのです。私はそれを尊重しますよ」

ミレイ先生はなお青ざめた表情のまま静かに言う。

「こちらとしましては、運営に支障のないことを優先せざるをえないのです。方針に反す

る行為が今後表面化するようなことがあればあらためてお話させていただくことになります」

そして俺の顔を見ながら「それが杞憂に終わることを私達は希望しています」と言った。俺は何も言えないまま会談は終了した。

親父は「成績については、もっと身を入れて勉強するように言い聞かせます。お手数をお掛けして申し訳ありません」と繰り返して辞去する。

俺は黙って玄関まで親父を見送る。

「何か、迷惑かけてごめん」とだけ言う。

「ああ」とだけ親父は答える。

そして、しばし窓外に見えるアカマツをじっと見つめていた親父は、急に、

「ちょっと付き合え」と言ってずんずん歩き始める。

一瞬間食らう俺を振りかえり「いいから付き合え」と言ってまた歩いていってしまう。

仕方なくあとを追いかけることになる。

校門を出てほぼ正面の駅には向かわずに、左へ折れて住宅街の方へどンドン歩いていってしまう。あわてて追いかける。

なんだよ意外に足速いじゃないかよ。

親父はただ黙って歩き続ける。

住宅街を右に左にさまようようでありながらも何かを探しているふうな様子で、時折十字路で周囲を見廻し、また歩き始める。俺はただ黙って付いていくしかない。

入り組んだ路地にある壁一面がナツツタにおおわれた明らかに周囲とは異質の小さな一軒家の前で立ち止まり、しばしちゅうちょしたあと扉を開いて入ってしまう。小さな看板が出ていて営業中の札が掛かっている。こんな住宅街の中にこんな喫茶店があるなんて知らなかったな。

俺もカラカラと扉に付いた鈴を鳴らして中に入る。

薄暗い店内には暖色系のランプがいくつか下がって、その下に小さなテーブルが三つ、右側はカウンター席になっている。カウンターの奥に白髪混じりの短髪で深い皺の刻まれた精悍な顔立ちで長身のマスターがいて、「いらっしやい」とよくとおる声で一言。

親父は手を挙げてあいさつし、迷うことなく奥のテーブルに着く。俺は向かいに座る。

「ブrend二つ」親父は注文してから俺を見て、それでいいだろうという顔をする。

店内には客は一人も居らず、静かだ。あらためてこんなところがあったのかという気分を楽しんでみる。

「なつかしいな」親父はぼつりと言った。

俺は親父の顔をじっと見つめる。

「なつかしいな、何も変わってない」

壁に掛けられた絵を見てしみじみとしている。

コーヒーが二つ運ばれてくる。

「砂糖は入れるのか」と聞かれて、

「自分でやるよ」と角砂糖を一つ放り込んでかきまぜる。

一口飲むとふわりと鼻に抜ける香りがいい。

「いい豆使ってるな」

俺がつぶやくのをしげしげとながめながら、

「お前、最近どうなんだ」と訊くのだ。

「どうってこともないさ、あいかわらず勉強苦手だし」

「苦手で済まんだろ」

「わかってるさ」

「まあいい」

親父は目の奥を覗きこむようにして続ける。

「さっきの話なんだがな、勉強のことはともかく、あまり先生に心配かけるようなことは」  
すこし言葉に詰まって、

「まあ、ほどほどにしとけよ」と言う。

意味がわからない。

「まあ、覚えのないことでもないしな」一口すすって、「うん、うまい」とつぶやく。

あれ、このしぐさ、気にもしてなかったけど俺に似てる。

俺が似てるのか。

「こんな機会もなかなかないだろうから、すこしちゃんと話しておくとな」苦い顔をする。

「お前ぐらいの頃はな、いろいろ気に入らないものがやたら目に付くもんなんだ。それで  
まあ、真っ直ぐ言葉が出ちまう。周りなんか気にしちゃいない。軋轢も生まれる」

また一口すすってから続ける。

「でもな、それでいいんだ。それはな、今しかできないことなんだ。今しか感じないこと  
なんだ」

「それはどういう...」

「まあ聞け」あいかわらず自分勝手なのだ。

「ここはな、俺がお前くらいのとき、よく入り浸っていたんだ。仲間で集まっては時間を  
忘れて語り合ったものだ」遠くを見る目になる。

俺はチラリとマスターの方を見る。マスターはニッコリ笑ってうなずいた。

「お前も、勉強がおろそかになるほど夢中になっているものがあるということだろう。そ  
それはそれでいいんだ」一息ついて、

「だがな、呼び出しをくらはうのはお前の失点だ。俺なんかな」やっぱり自慢話かよ。

「まあいい。ともかくとやかに言われぬ程度には勉強しろ。いいな」

言われなくともわかってるさ。

「なんか食うか。ここのミートソースはうまいぞ」

本当かよ、それ。いただきます。

出来るまでしばし雑談になる。

「お前おぼえてるか」そう言うのだ。

「今の家に引っ越す前は、この辺に住んでたんだぞ。その頃はまだこの辺にあった紡績工  
場の跡地がぽっかり空いていてな。よくそこで遊んでたのおぼえてるか」

それはうっすらとおぼえてる。

「なつかしいなあ」勝手に自分の世界に浸ってるのだ。

なんだかな。

ミートソースが運ばれてくる。  
ケチャップで味付けした典型的なやつで、細かく切ったウインナも赤いやつだ。  
そして、これがまたイケるのだ。  
すこしバター風味か。いやオリーブオイルの香りもいい。でもこれは...  
俺はマスターに訊いてみる。  
「隠し味にね。塩麴が少し入れてあるんだよ」にこにこしながら答えてくれる。  
親父は「うまいなあ、昔よりうまくなってるなあ」とうんうん頷いている。  
なるほど塩麴か。今流行だもんな。  
変わらないようで進化というものは目立たないところでしているものなのだ。  
一気に平らげると、心地よい感覚が下のほうからゆるゆると上ってくる。  
食後にはコーヒーをもう一杯。  
親父も同じこと考えていたらしく、俺の目を見て「アメリカンでいいか」と言って注文する。  
「お前、昼飯自分で作るんだってな」  
「まあ、ジャンクだけどね」  
「ジャンクって何だ」  
「ぱっとできる簡単なものってことだよ」  
「ふうん」  
コーヒーが運ばれてくる。今度はミルクを少し垂らしたただけでいただく。さっぱりする。  
がらがらと鈴を鳴らして扉が開き、見覚えのあるシルエットが入ってくる。  
背が高く、手足が長くて、しなやかな身のこなしで。  
「あら、ミノルじゃないの」言ってから「まあ、おじさま。こんにちは」  
えっ、どういうこと？  
  
「おお、さあちゃん。しばらく見ないうちにすっかり美人になったね」  
親父は家では決して見せることのない満面の笑顔で答えると、俺に席を詰めろと目で指図する。わかってるよそんなこと。  
それにしても、俺は何も聞いてないぞ。  
となりに座った先輩は「ご無沙汰しております。もう三年になりますか」と親父に話しかける。全然話しが見えないぞ。  
「ああ、もうそんなになるかね」  
俺は、置いてけぼりです。  
「ミノル君が呼び出されていると聞いて心配してたんです。それで」  
先輩は俺の方を見て続ける。  
「私達の部活動の影響があるんじゃないかと思って」  
「なあに、こいつが悪いんだよ」親父は断言する。  
「心配しないでいいんだよ」  
「あの」俺はたまらずに言う。「話しが全く見えないんですけど」  
「おお、そうか。知らんよなあ。うんうん」と勝手に納得している。  
「ほんとに偶然だったのよ、ミノル。やっぱり類は友を呼ぶっていうのかしら」

「おいおい、類ってのは聞き捨てならんね」  
「ごめんなさい。何ていうの、会おうべき運命ってあるんじゃないかと思うんですよね」  
「そんなもんかなあ」  
俺は全く無視かよ。  
「ごめんね。ええと、おじさまとあたしの父は昔お友達だったのよ」  
「まあ、腐れ縁ってやつかな」  
「それでね、三年前にあたしの父が亡くなったときはとてもお世話になってね」  
「そんな大したもんでもないがね」親父はちょっと照れてる。  
「ミノルに初めて会ったとき、もちろんその時はそうとは知らなかったんだけど、何か自然とじっくりくるものがあったのよね。いつか話そうと思ってたんだけど、言いそびれてね」  
舌を出して笑う。へえ、そんなことがあったのか。  
「だからね、本当はミノルとは初対面ではなかったんだよね。まあ、あたしもミノルもこーんな小さいころの話なんだけどね」と親指と人差し指で五ミリほどすき間を作って見せる。  
「おぼえてなくて当然なんだよなあ」親父はまた回想モードになっている。  
まあいい。そういうことなら特別異存はありません。  
俺はミレイ先生のある言葉を思い出して、少々の想像を加えて訊いてみたのだ。  
「親父。先輩の父さんと毎日ここで悪だくみしてたんだろう、違うかい」  
「悪だくみとは何だ。俺達はな」言いかけて「まあ、そんなとこかな」満足そうに言う。  
「お前もそういうことがわかるようになったということかね」とにやにやする。  
何だか子供扱いされてるようで腹立つ。  
「おじさま、実はね、ミノル君はウチの部活のエースでして、すごく活躍しているんですよ。でもそれが忙しくて勉強がおろそかになったと思うと責任感じちゃって」  
しおらしいこと言うじゃありませんか、先輩。  
「なに、大丈夫だよ。今日は先生からもきつく言われたから、こいつも心を入れ替えてやると思うよ」俺の顔を見て「なあ」と言う。  
はいはい反省しております。  
「あたしも気をつけます」先輩までそういうこと言うのですか。  
「コーヒー飲む？」「はい、戴きます」  
それからひとしきり、親父と先輩はなつかしいを連呼しながら雑談に花を咲かせる。  
「おおもうこんな時間か。すまんけどこれから会社へ戻って仕事しないかん。さあちゃんに会えてよかった。じゃね」と支払いを済ませてから俺に「よろしくな」と一言残して親父は去っていった。  
「先輩、なんで黙ってたんですか」俺は訊いてみる。  
「ごめんごめん、タイミングがね」と言い訳をする。  
「ところで今日、部活はどうなってるんですか」  
「うん、臨時休業よ」  
「俺がここにいるの知ってたんですか」  
「そんなわけないでしょ、ただの偶然よ」

「本当かなあ」

「なによそれ」

こういうのひさしぶりだなあ。

「何しろあんた追試がんばんなさいよね。本当にみんな心配してんだからね」

そう言う顔を俺はずっと見つめながら、そうか俺にはこのかけがえのない時間を無駄にはできないのだと思った。

窓から見える灰色の空に万年雪を頂く峰が溶けこみ、そのモノクロームの風景は俺の気分を反映しているかのような雰囲気なのです。

何てことはありません。ただの平均的な取るに足りない、しかし地に足をつけた確かな日常というものの中でしかないということなのです。

先日の追試は合格したけれど、それは毎日の生活をいままで以上にも以下にもしない、ありふれた事実すぎないのです。

集中的に嫌な思いをしてしかたなく取り組んだ結果として、以前よりは授業に対する姿勢というものは変化し効率化したのだけれども、あいかわらず低調であることに変わりはないのです。

そういえば発見もありました。それは学校で教える内容とは何なのかということです。教科とは何を基準にして決められているのでしょうか。もちろんその基準をこうだと示されたところでどうなるものというわけでもないのです。ただ言いことは生徒が怠けていることは同時に教えている内容がつまらないことの結果ではないのかということなのです。たとえば活字離れをなげく大人がいます。それは活字というものがどうおもしろいのかを伝えきれていないからなのではないのでしょうか。かつて活字を読むことが最先端の時代というものがあったのです。興味があったからいろんな本をむさぼるように読んだんだと思うのです。新しいものは自然と興味がわくものだと思うのです。はっきり言えば、もはや最先端ではないものを興味を持ってと強制することのおかしさに気付いていないのではということです。そして今の最先端と言われるものは、おかしなことに教育というものに対してあまり関わろうとしないところがあるのではないのでしょうか。その原因は教育の保守性にもあるでしょうし、また教育に本気で関わろうとすれば途方もなくコストのかかる問題で、そんなものに関わるのは損だということもあるでしょう。地味すぎてお金にもならないことに投資などできないというところでしょう。結果としていままでの内容を繰り返すばかりの場所にただ我慢してこの時間が過ぎ去ることだけを考えるものだけが存在している。これはやはり無駄なことなのだとそんな発見があったということです。もちろんそんな発見が何かの役に立つとは思われないのですが。

「あんた何深刻な顔して物思いにふけてんのよ」先輩のつつこみに我にかえる。

「まさかこの世の不幸を一人で背負ってるみたいな気になってんじゃないでしょうね」

ここはいつもの部室です。

部長は新作のブレンドに挑戦しているようで、ミルのがりがりする音がカウンター奥からします。モエとメグミは新製品の固形タイプ雑炊とカップ春雨をテイस्टィングしてあれこれ品評しています。俺は先輩に苦手の数学を教わっている次第です。



「ちょっと休む？ 何だか顔色悪いわよ」

そうとうくたびれた顔をしているのだろうな。どおりでつまらないことばかり頭に浮かぶんだな。

メグミがカップ春雨を持ってきてくれる。「これ、試してみてください」

ありがたくいただく。つつつしておいしい。オニオンスライスが入ってる。鶏がらスープがベースかな。それともこれは。

そこで俺は気付くのだ。食べてるときは頭が働くのだ。いっせせんべいに数式を書いて食べれば頭に入るだろうか。そういえば単語をおぼえるのに辞書を食べたなんて話があったな。

「あんたね、休んでいるときくらいもうちょっとはしゃいだらどうなのよ」

先輩にまたつっこまれてしまう。

やっば俺疲れてんのかな。うかうかしていると期末が来るなんて強迫観念にとらわれているのは、疲れてる証拠なんだろうな。

「元気だしなさい」背中をどんと叩かれ、多少目がさめたのだった。

「教育と親子関係は取り上げるに足る重要な問題だね」

俺の疑問というかこのごろ頭を占めているもやもやのようなものを提示すると、部長はそう言うのだ。

先輩は「あんたそんなこと考えてたんだ」と言いそして「まあそんな気分のあるときもあるか」と納得したようなのだ。

部長がまず定義する。

「このあいだミノル君が言っていたとおり、親子関係はさかのぼって考えたほうがわかりやすいんだ。つまり、世代を越えて普遍的な価値として受け継がれるべきものというのがあるんだ。それを間違いなく子供へ伝えることが教育というふうに考えればわかりやすいだろ」

「たとえばそれは、しつけとかいうものですか」

「そうだね。まあ、それに限定すると何だかアレルギーが出そうだけど、その家の考え方みたいなものだよね」

モエがこういう話に拒否反応を持っているのを知っている俺は、ちらと様子をうかがう。モエは視線に気づいて口を開く。

「その家によって方針がまちまちだなんて、そんなんでいいのかしら。よそが聞いたらとんでもないことがまかり通るなんてこともあるんだから」

ご両親の方針にとっても不満のあるモエなのです。

「なるほどね。そこで考えるべきことは、この世には不条理というものがあって、それに耐えた分だけ得るものもある。つまり、親から子へ伝えるものは、変わらない価値もあれば、自分が親となったときに自分の体験に照らしてこうしようとするオリジナルの部分もあるということ。モエ君が大人になって親になったときに振りかえって、それでも不条理だと思うならば、それを子へ伝えるときに修正すればいいと考えればどうかな」モエは両手をひろげて肩をすくめてみせる。

「そういうことにしときましょ」

部長は苦笑する。

俺は考える。はたして俺は親から何を伝えられたのだろうか。それともこれから伝えられるということか。

「親子関係を考えるとき、家によって差があることは認めざるをえないけれど、それはまたそれぞれの家の個性だと考えれば、それを無理に統一する必要性なんてないんだ。まあ運命なんだというとなんか無責任かも知れないけどね」

部長は新作のブレンドコーヒーをゆっくりと味わってから続ける。

「放任主義の親もいれば過保護の親もいる。しかしそれは、よし悪しでは言えないんだよね」

「それはどういう」俺は訊いてみる。

「どんなやり方をしても、結果伝わらなきゃ意味ないってことよ」先輩が答える。

「そう、問題はやり方ではなく伝えようとする意思なんだ」部長が引き継ぐ。

何だかわかったようなわからないような。

あの親父は、あれで伝えてるつもりなのかなあと俺はしみじみと考えたのだった。

今日もすでに午前様です。忙しさは増すばかりです。いったいいつまで続くのかと思いつつも、こうやって続けていられるのだから、案外このままいけるのかも知れません。とりあえずあと少しで終わるなど思っていたとき、ドアがノックされるのです。

夜のおやつも日常化しつつあるなど思い、振りかえると、なんだ親父かよ。

「勉強か」「ああ」「そうか」「...」「まあ、あんまり無理するな」「わかってるよ」「そうか」そして去っていく。

毎度のことだけれども、以前ほどいやではないのだ。

これが不器用な親父のやり方であり、その息子として不器用に育った俺のやり方なのだとわかるから。

眠い目をこすりながら最後の問題に取り組み、まあしばらくはこんなことのくり返しなのだろうとあきらめのような安心のような何ともいえない気持ちになりながら静寂の音が沁みた。

## 第八章 夏って何だか儂いよね



拝啓

盛夏の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

平素は格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、このたび当軽食研究会ではサマーキャンプと銘打ちまして夏休みを盛大かつお気楽にエンジョイしようではありませんかというごく定番で意外性のかけらも感じられない企画を実施させていただくことと相成りました。つきましては経費節減の厳しい財政状況ではございますが、なにとぞご配慮のほどよろしく願いいたします。

最後ではございますが、生徒会執行部の皆様のご多幸を祈念いたしまして結びの言葉とさせていただきます。

敬具

「なんですかこれ、先輩」俺は訊いてみる。

「夏休みって言ったら海水浴でしょ。でもね、宿泊費とか交通費とか結構掛かるのよね。だから部活の合宿ということにして経費をふんだくるってことよ」こともなげに言う。なるほど。でもこんなんでも予算くれるのかな。大いに疑問です。

「大丈夫よ、あんたの交渉力次第なんだからさ」

えーっ、俺がやるんですか。

「あんたが生徒会对策室永久室長に任命されたの知らなかったの」

なに適当なことってんですか。

「ともかくあんたは自覚はないかもしれないけど、勉強以外は何でもできる頼れる我が部のエースなんだからね。しっかり頼むわよ」

結局そんなこと言って、ただの便利な使いっばしりということでしょうか。

生徒会室の扉の前である。とてつもなく大きくて重いものに見える。

「失礼します。軽食研究会の川合です。どなたかいらっしゃいますか」

「おやおやいらっしゃい。ひさしぶりだねえ」

生徒会長の佐伯は、なにやら難しそうな経済評論誌から視線をあげて俺を迎える。

「ごぶさたいたしております。本日は折り入ってお願いがございまして参りました」

舌をかみそうになる。

「なんだい改まって。さあさあ掛けたまえよ」席を勧められる。

「失礼します」うわ、このソファァーふかふかだ。

「なんか飲む？」そう言ってから「おーいシズカ君、麦茶二つお願い」と言う。

「どうぞ」うわいつのまに。うしろから副会長の城山がよく冷えたのを出してくれる。

「すみません。いただきます」ありがたくいただく。のどを清涼感が満たす。

「ところでお願いってなんだい。どうせ予算くれってことだろ」

お見通しなのである。俺は依頼文を取りだしてお願いをする。

「こんな虫のいいことを言えた義理ではございませんが、なにとぞご検討の程深く深くお願いいたします。はい」

「なるほどね。合宿か。うん、まあ、どこまで意に添えるかはわからないけど検討させていただくよ。それに」

後ろを振りかえり「この時期その手の依頼が、ほら、こんなに」書類が積みあがっている。

「でもまあ、君みたいにちゃんとお願いくるのは稀だから、できるだけことはするよ」

ああよかった。これでとりあえずお役目終了。

「ところで最近どうだい。みんな元気にやってるかい」

「はい。なんとかかんとかやっております」

「そう。それはよかった」少し考え込んで、佐伯は切り出す。

「このあいだ君に話したこと。いまでも考えはまとまらないかい」

ええと、ああそうだ、権力に対抗するには力を持たなくてはという話だったな。

俺は少し考えて、慎重に話し出した。

「理論としてはわからなくはありません。ただ、具体的に何があるのかが見えないと説得力がないのだとおもいます」

「なるほど。でも具体的になったときには手遅れってこともあると、そういうことでは納得してもらえないのかな」

「それは、そういう理論で与えられた力が思いもよらない方向へ暴走する可能性だって否定できないのだから、慎重であるべきだと思うのです」

「なるほど。うん。そうか」佐伯はしばらく俺の言葉をはんすうしている。

「でも、それを言い出したら、なにもできないのではないかしら」

城山がたまらないという声で話し始める。

「どちらの危険性を重視するのか決断しないと、前へは進めないわ」

「そう。その通り。でも、川合君の考え方は正論なんだよ」

佐伯は考えをまとめるように一つ一つ言葉を出していく。

「僕達にはトラウマがあるのさ。それは僕達自身の経験からくるものではなく過去の経験則から導き出されたものを植え付けられたというもの。権力への懐疑がそれへの対抗ではなく権力そのものを悪として無効化するほうがいいという考え方。武装するのではなく武装解除するのだという考え方。それが主流だし決して間違っているとは思わない」

そして俺の目をじっと見つめて続けるのだ。

「間違いではないけれど、多くの人達が持つ心理ではあるけれども、その過去の経験が万能だとは限らない。いつくつがえされるかわからない」

そしてまた、慎重に言葉を選ぶように続けるのだ。

「そして、慎重であることに安住していることは許されないんだと思う。最悪の状況を想像することから逃避しているのであればそれは許されないんだと思う」

俺は、気付いたのだ。考えている方向は同じなのだ。話せば話すほどたぶんそれははっきりしてくるのだろう。表現方法に違いがあって、その外見だけで全てが違うのだと判断することの誤りを俺は感じた。俺は先入観が邪魔してそれが見えていなかったのだ。

「こういう事だと思います。現状を否定することも肯定することもたやすい。そのたやすさはどこからくるのかと言うと、自分の考えだけでもの言うからなんです。自分の頭の中に自分を批判する成分が無いから疑いも迷いも無いからたやすく言えるのです」

そして俺は自分に語りかけるつもりで続けた。

「だから、こうして違う意見をぶつけ合うこの瞬間に可能性があるのです。意見が違うことをそれを言い負かして克服するのではなくて、違う意見があるということは認め尊重しながら共存することを受け入れることだと思う」

さらに、そう、佐伯に伝えておくべき言葉があった。

「僕達には実質的対立はないんです。同じ目標に向かってるんです。ただその道筋が違うだけなんですよ」

佐伯はにやりとして「それ、細川だろ」と指摘する。なんだばれてたのか。

「そうだな。そういうことだな。僕達は互いに必要としているんだな」

そして佐伯は満足そうに笑いこぼれた。

「またいつでもいらっしやい。みんなによろしくね」

「ごくろうさん。いつも大変な役回りばかりお願いして申し訳ないね」

部長がメロンソーダ味のフラッペを作ってくれながら言う。

いつのまにかき氷器なんて。まだまだ謎が多いのだ。

「まあ、交通費くらいは期待していいんじゃない」先輩の言。

「ふふ、新しい水着買わなきゃ」これはモエのつぶやき。

「わくわくしますね」メグミはいつも初々しい。

ああ、これが学生生活の醍醐味なのだ。夏休みなんていうとんでもなく開放的で非現実的で贅沢な時間は今しかないのだ。心ゆくまで楽しむことなのだ。

「まあ、ミノルは期末でまたコケて夏期補習なんてことにならないよう気をつけるのよ」

うわ思い出したくないことを。ふくらんだ気持ちがしゅうとしぼんだ。

「おお、川合君こっちこっち」日比野さんに呼ばれる。

「お邪魔します。へえ、これですか」

プールの機械室でのことです。水泳の授業に使う道具がいろいろ置かれている。

「こっちは水泳部が使ってるやつだから駄目だけど、こっちは古くてもう使っていないから」

ビーチパラソルなのです。それからこれは折りたたみのベンチ。

「でもこれ運ぶの大変でしょ。どうするの？」

「はい、電車なら無理なんですけど。いっそ車をチャーターして機材持ち込んでテント張ってキャンプすればどうかという案が出まして。それでタダで調達してこいと先輩、岩橋先輩に言われまして」

「へへへ、下級生はつらいねえ」

まったく、雑用一切は俺の担当なんだから。

「しかし楽しそうで羨ましい。青春は短いから悔いの無いように楽しんでね」

「はい、ありがとうございます」

「どう？ これなんだけど」

先輩のお家へお邪魔しております。

お母様には「まあまあミノルちゃんすっかり大きくなって。お父さんの若い頃そっくりだわね」と言われアルバムなどを見せていただいた。ほんと豆粒みたいに小さい俺といたずらっ子そのものの先輩が写っている。そして若き日の何か生意気そうな顔の親父と時代を感じさせる髪型と洋服でせいっぱいおしゃれたかあちゃん。先輩のご両親とは家族ぐるみでの長い付き合いだったんだな。でもなんで俺はそれを一切知らないんだろう。全く謎なのである。

で、そうそう何をしに来たかと言いますと、天幕、規模の大きいテントを見に来たのです。

「へえ、けっこうな大きさですね。これ普段は何に使ってるんですか？」

「物産展なんかのとき、御得意さんに貸し出すのよ。そういう気をつかうのがこの商売では大事になるのよ」先輩の家は老舗の菓子問屋です。

「なるほど、まるで遊牧民のゲルみたいになるんですね」取説を見ながら感心する。

「これなら五人ゆっくり寝られそうですね」

先輩は不思議そうな顔をしてしばし俺の顔を見ていたが、おもむろにこう言う。

「あんたあたし達と一緒に寝るつもりなんて、なに考えてんのよ全く」

「えーっ、じゃあどうするんですか」

「これは女子専用よ。あんたはね」

先輩は悪代官みたいな微笑で、

「部長と二人で三角テントよ。心配なくていいわよ、部長がワンダーフォーゲル同好会から借りてくれるって言うから。ただしね気をつけなさいよ」

え。ま、まさか。

「部長はああみえて筋金入りの山男だからテント生活のマナーには超キビシイのよ」

なんだそういうことか。びっくりしたなもう。

「部長は山登りとかするんですか。へえー。そういえば山岳部が今度剣岳縦走するって行ってたけど一緒にいたりするんですかね」

「あら、よく知ってるじゃない。冬山のときも常連よ」

部長ってなんでもできるんですね。正体不明だな。

「えっとそれでね。テントや機材一切はウチのトラックで運ぶからね」

「トラックって、二人乗りですよ」

「そうよ」

「じゃあ先輩と俺で。でも先輩免許ないでしょ。まだ高二なんだから」

「あんたね、どうすればそういう発想が出てくるかね」呆れ顔で言う。

「じゃあどうするんですか」

「ウチで奉公してるユリちゃん、夜間の大学通いながら働いてくれてるんだけど、相談し



たら運転してくれることになって。それであんたを人足として同乗させることにしたの」  
「なんで全部勝手に決めるんですか、先輩は。え、でも、ユリちゃんって」  
「あんた、変なことしたらどうなるかわかってるわね」怖い。  
「わかりました。でもそれじゃ他のみんなはどうするんです？」  
「うん、メグミちゃんがね、リムジンで送ってくれるんだ」  
「なんですかそれ。なんか悪意を感じるんですけど」  
「部長はともかく、あんたが一緒だとメグミちゃん家で心配するといけないから」  
「それで、俺だけ隔離するってことですか」  
「なに言ってるの。あんたには現場設営班最高責任者兼作業員というありがたい任務を」  
「もういいですよ」  
「それにね、ユリちゃんに失礼でしょその言いぐさ」  
「はい、それはそうでした」  
俺は一連の経緯を整理して確認することにした。  
「ええとそれでは、テントも輸送手段もいいですね。あと機材もだいたい手配できたしと。あれ、それじゃ生徒会に申請している経費はなにに使うんですか？」  
「きまってるじゃないの」先輩は大きく胸をそらせて宣言する。  
「盛大なバーベキューパーティーの経費ということよ」

打ち合わせが終わり、お茶をいただきながら雑談しているとき先輩はこう切り出した。  
「ミノル、あんた将来のこととか考えてるの」  
将来か。みんなそれぞれ夢があって、少しづつそれに向かっているんだよな。でも俺は。  
「先輩はどうなんです。やはり家業を継ぐんですか？」  
「まあね。あたしの代で潰すわけにいかないしね」  
それは義務ということなのだろうか。  
「現実には全くのフリーハンドなんてことはないのよ。やはり制約はある」  
それは運命ということなのですか。  
「でもね、誤解しないでよ。あたしはそれを肯定的に受け止めてる」  
本当にそれでいいんですか。  
「ウチはね、女系なのよ。まあ肩書き上は爺ちゃんや父さんが社長やってたんだけどみんな婿なんだよね。だからあたしもいずれ婿を取って」  
いいんですか、それで。  
「それにね、あたしの中には菓子屋の血が流れているんだ。ずっと昔の先祖から受け継いだものがね」  
でも。  
「こんな性格だけど、商売やるにはちょうどいいのよ。まあ、持って生まれた才能ってやつ」  
俺がふさぎ込んでいるのを見て、先輩はこう言った。  
「まあ、誰も来てが無かったら、あんたを婿でもらってやるから」  
え！  
「冗談に決まってるでしょ」爆笑されてしまった。

「なんですかもう。からかわないでください」

先輩は急に真顔になりじっと俺を見つめる。

「ミノル、あんたはね、自分で思ってるよりずっと可能性を持っていると思うよ。その証拠にあんたこの短い間にどれだけのことしたか。正直いうとあんたをああの部室ではじめて見たときあたしはこれだと直感したのよ。この子があたしの跡をあたしの意思をつないでくれると。あんたにとってはそんな迷惑かもしれないけどね。部長が種をまいてあたしが育ててあんたがそれを引き継いで、そして今度はあんたが次へと引き継いで、そうやって残していきたいものがあるんだ。たとえそれがちっぽけで取るに足らないものでもね」

先輩はさらに静かに語りかける。

「部長も卒業して、あたしも卒業して、そのあとにあんたが引っ張ってつないでいてほしい。そうすることであんた自身ももっと成長していけると思う。あたしはそう信じてる」

俺は、なんだか別れを告げられているようで無性にせつなくなった。

「そんな、先輩、まだ先の話じゃないですか。まだまだこれから…」

おどけてみたけど、うまくいかない。

「うん、そりゃね、ずっとこうしていたいよ。でもそうはいかないんだ。始まりがあれば必ず終わりは来る。出会いがあれば必ず別れがある。そうじゃなきゃいけないんだ」

なんで、なんでいま、そんなこというんですか。

先輩の顔は今まで見たこともないくらい透明で深く、吸い込まれそうなほど美しい。

俺は、やはり、あの瞬間に、恋に落ちていたのだ。

失いたくない。でも。それは。

言ってはならないことなのだ。俺と先輩はそんなことではないのだ。

いつか先輩が言っていた、部長と先輩との関係は未来にある同じものを見ている同志のようなもの、その表現がいまの俺と先輩との関係にも当てはまるのだ。

「はい、わかりました。それじゃあ一緒にいられる間にできるだけ多く吸収させていただきます」

先輩はまぶしように俺をみて、

「やっぱりあんた、あたしが思ったとおりだわ」

そう言って、とびきりの笑顔になった。

来るべき夏休みを思いきり楽しむために、俺は猛勉強をしたのだ。つらくても目的があれば頑張れるものだ。

そして期末試験を迎え、ぎりぎりクリアした。

胸をなで下ろしたところで、ミレイ先生からのお呼びがかかる。

今度は、一応は、堂々としていいのだ。

「あなたね、この成績でそんな偉そうなこと言えると思うの」

ミレイ先生は、どこまでも手厳しいのである。

各教科の成績をグラフにしたものをながめながら言うのだ。

「これだけの低空飛行、狙ってもできるもんじゃないわ」

平均点と赤点の間の狭い空間を見事に駆け抜けているのだ。

「これはこれで、才能なのかしらね」と呆れている。

俺は、照れていいのか落ち込めばいいのか迷うのです。

「まあ、努力の跡はあるんだから、一応は褒めておきましょう」

そして、真顔になり続けるのだ。

「あなたにはちゃんと話しておかないといけないことがあります」

「はい、勉強以外のことでしょうか」

「そうね、あなたはね、たぶん誤解をしているんだと思う」

「誤解とはどのようなことでしょうか」

「あなたは、私のことをどこかの星から来た異星人か何かであなた達を操って悪いことで  
もしようと企んでいると思っているのではありませんか」

ミレイ先生らしい飛躍した表現だが、言わんとしていることはわかる。

「いえ、そこまでは思いませんけど、何かとんでもないことを考えているのではないかと  
いう思いはあります」俺は正直に答えることにした。

「やはりね」ミレイ先生は憂いを帯びた表情をする。そして続ける。

「私は見た目がこんなんだから、正直いろんな苦勞をしてきました。社会を恨んだ時期も  
ありました。いつか私をばかにした連中を見返してやりたいと必死で生きてきました」

そして、少女そのものの姿には似つかわしくないほどまぎれもない大人の顔で言った。

「でもね、そういう内面の葛藤がたとえ言葉の端々や行動に現れたとしても、現実の私は  
この高校で英語を教えるただの教師にすぎない。なんの権限もないただの一教師にすぎ  
ない。あなたは先入観で私を過大評価し過剰に警戒し敵意をふくらませている」

「でも、お言葉ですが、先生は生徒を管理して自分の意に添うような行動をするかどうか  
を実験しているのではないですか」

俺は、しまったと思った。すこし喋りすぎた。憶測でものを言ってしまった。

先生は、やっぱりねという顔をして、そしてやわらかい表情になって続けた。

「やはり誤解していますね。でもね、それはあなたの責任ではないのよ。真意とは思うよ  
うに伝わらないものなのです。確かにあなたの言うように私はある実験をしています。  
たぶん誰かから、細川君でしょうけど、聞いている通りで私の専門は情報工学です。人間  
の不完全さを技術がどう補うことが出来るのか、その研究をしています。しかしね、そ  
れは人間を支配しようとか操ろうとかすることではありません。あくまで主役は人間な  
んです。ただね、そのための実験があたかも私が情報技術で人間の心を支配しようとし  
ているように見えるだけ。そう誤解しているだけ」

そして俺の顔をその透き通る底無しの湖のような瞳で見据えながら続ける。

「いまから言いにくいことをあえていいます。あなたにはその理由がわかると信じます。  
あなたにはその感性があると私は見えています」

そして、決然と話し出すのだ。

「あなた達の部活、公然の秘密である社会倶楽部の実態を分析すれば、それは家族ごっこ  
だということです」

家族ごっこ？ どういうことだ。

「細川君が父親、岩橋さんが母親、そしてあなたや高岡さん石井さんが子供なのです。そ

してその家族像は今もう失われてしまったかつての父権を頂点としたピラミッド構造。そしてそれは細川君の生立ちからくる家族への憧れと岩橋さんのファザーコンプレックスが結合することによって生まれた。そこにあなた達が迎え入れられた。擬似家族が完成することでそこに幸福な日常が生まれた。あなた達はそれを今楽しんでいる」

俺は思わず声をあげる。たまらず言葉が噴き出してくる。

「それがいけないことなんですか。家族ごっこ？ いいじゃないですか。俺は満足してますよ。かけがえのない仲間に出会えて俺は幸せですよ」

先生は「話しは最後まで聞きなさい」と制して、そして諭すように続ける。

「私はいけないなど言うてはいません。あなた達は家族ごっこを通して社会を擬似体験する手法で現実を理解しようとしている。ここまで言えばわかるでしょう。ごっこ遊びは立派に実験として機能しているのよ。それがあなた達が選んだやり方なんだから」

俺は、理解した。先生の言わんとすることを理解した。

「それは、先生も先生のやり方で実験をしているということを言いたいわけですね」

先生は少しほっとした表情になり、そして続けた。

「やはりあなたはちゃんと理解する力があるのね。実験というのはあくまでも現実ではできない極端な条件を入れることでどういうことが起こるかを調べて、その結果を現実活かすことなんだから、実験に用いられる極端な条件だけを取り上げてそれに拒否反応を起こすことは意味がないのよ。それだけで全体を理解したつもりになっている。それが誤解の正体よ」

なんだそういうことか。でも、本当に信じていいのだろうか。

「それにね、私は残念ながら、現実にしばられ、制約のなかでしか行動できない存在なのよ。常に責任を問われることを前提に行動せざるをえない。できることなんて知れてるのよ」

そしてふっとため息をついてつぶやく。

「あなた達がうらやましいわ。恐いもの知らずで真っ直ぐで全部が新鮮で」

そんなおおげさなものでもないと思いますけど。

「ともかく、あまり先入観にとらわれないでね。お互いにね」

「あの」俺はこの際と思い訊いて見た。

「生徒会は、それでは、何ごっこなんですか」

「それは、あなたが思っているとおりのよ」

「政治ごっこですか」

「そういうことになるわね」

「それでいいんだと、言うことですね」

「そう、それが彼らの選んだやり方」

そうか、みんなお遊びを楽しんでいるのか。

「それでね」ミレイ先生は付け加える。

「このことは、ここだけの秘密にしといてね」ウインクする。

「ええと、なぜですか」

「実をいうとね」いたずらっ子みたいな表情で言う。

「得体の知らない存在って役回りがね、けっこう気に入ってるのよね」

なるほど。部長が言うとおりに、お遊びがすぎるんですね、違う意味で。  
そしてもう一つ確認しておきたいことが。  
「あの、この間の面談で親父に言ったことなんですけど、先生は親父の過去を知っているのですか？」  
「ええ、くわしく調べさせていただきました」  
「それはどういう内容なのかは、教えてはいただけないのでしょうか」  
「残念ながら、守秘義務があるからね。たとえあなたでも教えることはできないの」  
「そうなんですか」  
「でも、直接訊けばいいじゃないの。親子なんだから」  
それができないのが、親子なんですよね。  
「ええと、でも先生の情報収集力はすごいんですね。なんでもわかるんですか」  
「そうでもないわよ」  
「でも、どうやれば親父の過去なんて調べられるのですか」  
「あら、簡単なことよ。だって」  
簡単なこと？  
「あなたのお父さん、この学校の卒業生なんだから。全部記録が残っているもの」  
「えーっ、そうなんですか」  
「なによ知らなかったの？ 本当に？」心の底からびっくりしてるようだ。  
あの親父め。そんなこと一言も。なんで俺こんなに何にも知らないんだろ。  
「そう、本当に知らなかったんだ。ふうん、そうなんだ」珍しいものを見る目なのだ。  
まあいいや。とりあえず謎は一つ解けたから。  
「そういえばあなた達キャンプに行くんですってね」  
「はい、いま準備中です」  
「そう、まあ今しかできないことを存分に楽しんでらっしゃい」  
「はい、そうします」  
「ただしね」  
はい？  
「二学期もびびりしいくから、油断しないようにね。ちゃんと勉強もするのよ」  
最後はそういうめですか。あーあ、つらい。

「がんばったじゃないの、ミノル」  
先輩はうれしそうに言う。  
「とりあえずこの夏の自由を勝ち取ったというわけね」  
そんなおおげさなものでもないですが。  
先輩は、ずんだ餅を食べながら満足そうな顔をする。  
「あの、ひとついただいてもかまいませんか」  
「もちろん。食べて食べて」  
「ミノル君は食いしん坊だねえ」部長は愉快そうに言う。  
「ミノルは食べてればそれで他は何もいらないんだから」モエは呆れ顔。  
「すてきなことだと思います」メグミは全てに肯定的だ。

俺は、自分の心の中だけにとどめている思いをゆっくりとはんすうする。  
ここにある擬似家族は、擬似社会である学校空間の中で、擬似体験を通して擬似生活をしている。全てはつくりものであるけれど、つくりものこそすばらしさなのです。  
つくりものだから、どこまでも理想的であることを追求することが可能なのです。  
つくりものだから、どんな失敗も笑って許されるのです。  
つくりものだから、永遠に終わらない安心感があるのです。  
でも、俺は自分に言い聞かせる。  
つくりものは、所詮、さらさらと零れ落ちる砂でできた家なのです。  
つくりものは、結局、強い日差しの中に現れる蜃気楼なのです。  
つくりものは、いつかは醒める夢にすぎないのです。  
だから、俺は思うのだ。  
この、今しかないものを、今しか見えないものを、今しか感じるものがないものを、愛しく慈しむほかない。  
いつか失われ二度と触れることの許されないこの瞬間を楽しむほかないのです。  
初夏の強烈な日差しは、風景を極彩色にいろどります。  
そんな現実から遊離した情景に釘付けになる俺の姿を、サヤカは向日葵のように見守る。

【おわり】



---

秘密結社社会倶楽部

---

著 みどりのくま

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---